

あい さこ うし づか
相 作 牛 塚 古 墳

2010年3月

高 松 市 教 育 委 員 会

例　　言

1 本報告書は、高松市鶴市町に所在した相作牛塚（あいさこうしづか）古墳の調査報告書である。

2 調査地及び調査期間は次のとおりである。

調査地 高松市鶴市

調査期間 昭和 48 年 12 月 28 日

現地調査は小竹一郎（高松市文化財保護委員（当時））が担当し、整理作業は高松市教育委員会が実施した。

3 採集された資料は、小竹雅子氏により高松市教育委員会（歴史資料館）に寄贈された。

4 本遺跡の整理作業から報告書作成に至るまで、下記の関係機関ならびに方々から御教示・御協力を得た。記して謝意を表したい。

香川県教育委員会 小竹雅子 高松市立弦打小学校 大久保徹也 青柳泰介 清水和明 藤川智之
森下浩行

5 本報告書の執筆・編集は中村が行った。

6 文中の半角英数字の番号（I. 0058 等）は高松市歴史資料館が保管している分類番号を示す。本報告書では公開した資料にのみ新たに報告番号を設け統一している。

7 遺物の写真撮影は、西大寺フォト（杉本和樹ほか）が行った。

8 第 1・2 図を除く挿図および本文中の方位は、磁北を表す。

9 本文の挿図として、高松市都市計画「高松市全図」3 万分の 1 と「N0. 2」・「N0. 4」 1 万分の 1 を一部改変して使用した。また、遺物の整理と公開にあたって、高松市歴史資料館 1996『高松市歴史資料館収蔵資料目録～考古資料～』より、図面の再トレースを行い掲載した。

10 調査で得られたすべての資料は、高松市教育委員会で保管している。

11 卷末に小竹氏が相作牛塚古墳について記録した『高松市鶴市町相作牛塚古墳採集遺物報告』を転載した。ただし、図面については再トレースを行い、明らかな誤字や誤植については修正するとともに、図面番号については本文からの通し番号とした。

目 次

第1章 調査の経緯と経過	1	第3節 外部施設	10
第2章 地理的・歴史的環境	1	第4節 埋葬施設	11
第1節 地理的環境	1	第5節 出土・表採遺物	11
第2節 歴史的環境	5		
第3章 古墳の概要	10	第4章 まとめ	52
第1節 立地と周辺地形	10	第1節 古墳の築造年代	52
第2節 墳丘	10	第2節 墳丘と石室	54
		高松市鶴市町相作牛塚古墳採集遺物報告書	73

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図	(S=1/40,000)	第19図	人物埴輪腕または脚部	(S=1/4)
第2図	相作牛塚古墳位置図	(S=1/10,000)	第20図	人物埴輪復元図	(S=1/4)
第3図	口縁部分類図		第21図	家形埴輪復元図・実測図	
第4図	円筒埴輪実測図1	口縁部 (S=1/4)			(復元図 S=1/8, 実測図 S=1/4)
第5図	基底部分類図		第22図	家形埴輪基部	(S=1/4)
第6図	円筒埴輪実測図2	基底部 (S=1/4)	第23図	形象埴輪片	(S=1/4)
第7図	円筒埴輪実測図3	基底部 (S=1/4)	第24図	器種・部位不明形象埴輪	(S=1/4)
第8図	突帯分類図		第25図	須恵器片	(S=1/4)
第9図	円筒埴輪実測図4	突帯 (S=1/4)	第26図	須恵器器台	(S=1/4)
第10図	円筒埴輪実測図5	突帯 (S=1/4)	第27図	金銅張劍菱形杏葉	(S=1/2)
第11図	円筒埴輪実測図6	突帯 (S=1/4)	第28図	金銅張鞍金具覆輪 (左・中)	
第12図	円筒埴輪実測図7	突帯 (S=1/4)			鉄鎌 (右) (S=1/2)
第13図	円筒埴輪実測図8	突帯 (S=1/4)	第29図	大刀 (S=1/3)	
第14図	円筒埴輪実測図9	突帯 (S=1/4)	第30図	挂甲小札 (S=1/3)	
第15図	円筒埴輪実測図10	突帯 (S=1/4)	第31図	三足釜(左)柱状片刃石斧(右) (S=1/4)	
第16図	円筒埴輪実測図11	突帯 (S=1/4)	第32図	古塚分布図	(S=1/25,000)
第17図	円筒埴輪実測図12	体部 (S=1/4)	第33図	牛塚墳域図	(S=1/200)
第18図	朝顔形埴輪	(S=1/4)	第34図	牛塚位置図	(S=約1/2,000)

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧1	第6表	形象埴輪觀察表
第2表	周辺遺跡一覧2	第7表	須恵器觀察表
第3表	周辺遺跡一覧3	第8表	その他出土・表採遺物觀察表
第4表	各部位別分類表	第9表	鉄製品（武具・馬具）觀察表
第5表	円筒埴輪觀察表	第10表	相作牛塚古墳周辺の古墳名

第1章 調査の経緯と経過

相作牛塚古墳は高松市鶴市町に所在した古墳である。昭和48年、当該地周辺において運輸会社による社員住宅建設のための整地作業が始まった。相作牛塚へも削平が及び、その際に当塚が古墳であることが確認された。連絡を受けた小竹一郎氏（高松市文化財保護委員（当時））が現状確認に訪れた際、古墳は既に著しい破壊を受けており、墳丘は3分の2を残す程度であった。また、削り取られた墳丘内からは、竪穴式石槨とみられる埋葬施設の一部が露出し、周辺には遺物が散在している状態であった。昭和48年12月28日、僅かに残された墳丘、石室、遺物も全て削平され、古墳は完全に消滅した。

古墳については、重機による整地作業が進行中であったため、遺物の採集すら困難な状況であったようである。しかし、その状況下において埴輪、須恵器をはじめ、馬具や武具を含め317点もの遺物が採集された。また、遺物採集とともに氏により概略的な記録が作成されており、当古墳の時期の位置づけや墳丘規模等、ある程度推測することを可能としている。採集資料については『高松市歴史資料館収蔵資料目録～考古資料～』(1996) 内で採集遺物を実測図化している。これにより埴輪、鉄製品、須恵器等の豊富な遺物が出土していることを報告した。特に埴輪では円筒埴輪のほか、人物・家形といった形象埴輪が含まれ、鉄製品では金銅装の馬具と県内では2例のみの挂甲小札が採集されている。

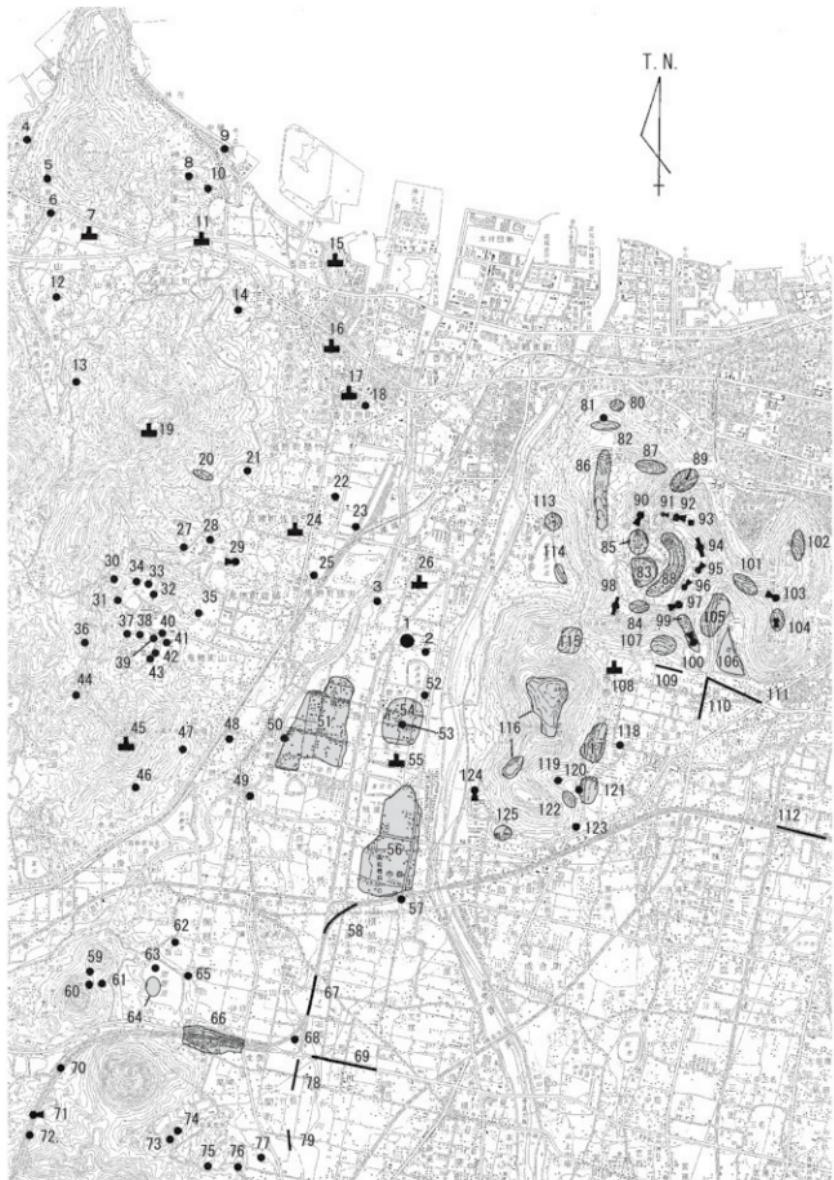
今回は、小竹氏の概略的な記録報告と、『高松市歴史資料館収蔵資料目録～考古資料～』では報告しきれなかった資料を追加し、報告するものである。

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

高松市は香川県のほぼ中央に位置し、北には瀬戸内海を挟み岡山県と対峙する。北東には屋島が聳え、東は立石山・雲付山に連なる。南は由良山・日山・宍相寺山・日妻山・上佐山等の標高120～250mほどの山が点在する。さらに南下すれば徳島県との境に位置する阿讃山脈の一つである大滝山と竜王山の一部が含まれる。北西部には石清尾山・稻荷山・紫雲山・淨願寺山といった石清尾山塊が存在し、西には国分台や猪尻山といった五色台山塊や鷲ノ山が存在する。これらの山々には侵食に弱い花崗岩の下層と、比較的耐性のある安山岩が上層にみられる。この侵食耐性が異なるために、急傾斜の側面に、山頂は平坦な面をもつメサと、さらに侵食が進行し独立丘となったビュートという特徴的な様相を示している。代表的なものとして前者に屋島や国分台、後者には白山や六ツ目山が例に挙げられる。水系は東から新川・春日川・詰田川と石清尾山塊を挟んで香東川・本津川等が北流し、瀬戸内海へ流れ出る。高松平野はこれらの河川によって形成されたものであり、東西20km、南北16kmの規模を測る。この内、平野形成の主体である香東川は、17世紀に人工的に流路を改修されたものであり、それ以前は石清尾山塊の南を回り、東側を北流していたことが分かっている。

相作牛塚古墳が所在した鶴市町相作地区は、高松平野の北西部に位置し、南部の飯田町と境を接する。北は瀬戸内海が広がり、南方は阿讃山脈からのびる平野と遠方には六ツ目山と堂山がある。北東には石清尾山塊の一つである淨願寺山、西は五色台山塊である勝賀山と袋山を望むことができる。特に鶴市町周辺は、この両山塊が近接しているため平野が狭まっている場所でもある。この山塊を両側に東には香東川、西に本津川が北流する。当該地はこの両山塊と両河川に挟まれた平野に所在した古墳である。また、海岸線は現在当該地から約2km先にあるが、寛永10年（1633）『讃岐国絵図』や



第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/40,000)



第2図 相作牛塚古墳位置図 (S=1/10,000)

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	その他
1	相作牛塚古墳	鶴市町	古墳・消滅	古墳時代後期前半	
2	相作馬塚古墳	鶴市町	古墳	古墳時代	
3	王墓古墳	飯田町	古墳	古墳時代中期～後期	
4	浜津神社南遺跡	神在川塙町	包含地		
5	彈正原古墳	神在川塙町	古墳・消滅	古墳時代後期	
6	木野戸古墳	中山町	古墳・消滅		
7	中山城跡	中山町	城館	中世	
8	住吉神社西古墳	神在川塙町	古墳	古墳時代中期	
9	牛ノ鼻古墳・牛ノ鼻遺跡	神在川塙町	古墳・城館	古墳時代前期、中世	
10	白骨古墳	神在川塙町	古墳・消滅		
11	植松城跡	植松町	城館	中世	
12	原経塚古墳	中山町	古墳	古墳時代	
13	桑崎古墳	中山町	古墳	古墳時代後期	
14	勝買廻寺	香西西町	寺院	古代	
15	芝(榮)山城跡	香西本町	山城	中世	
16	藤尾城跡	香西本町	山城	中世～近世	
17	作山城跡	香西南町	山城・消滅	中世～近代	
18	香西南西打道跡①	香西南町	城館	中世	
19	勝買城跡	中山町、鬼無町、香西西町	山城	中世	
20	かしが谷古墳群	鬼無町は竹	古墳・消滅	古墳時代前期	
21	沢池西古墳	鬼無町は竹	古墳	古墳時代後期	
22	香西南西打道跡②	香西南町	生産	旧石器時代、弥生時代、中世、近世	
23	西打道跡	香西南町	集落	縄文時代、弥生時代、中世	
24	佐料道路・佐料城跡	鬼無町佐料	包含地・城館	縄文時代、弥生時代、中世	
25	鬼無藤井遺跡	鬼無町	集落	弥生時代、中世、近代	
26	筑城城跡	鶴市町	城館	中世	
27	虎池西古墳	鬼無町佐料	古墳		
28	善師塚古墳群	鬼無町佐料	古墳	古墳時代後期	

第1表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	その他
29	今岡古墳	鬼無町佐野、鬼無町佐藤	古墳	古墳時代中期	
30	山口龍神社古墳	鬼無町佐藤	古墳		
31	山野塚古墳	鬼無町山口	古墳	古墳時代後期	
32	平木1号墳	鬼無町佐藤	古墳	古墳時代後期	
33	平木2・4号墳	鬼無町佐藤	古墳	古墳時代後期	4号墳消滅
34	平木3号墳	鬼無町佐藤	古墳	古墳時代後期	
35	鬼無大塚古墳	鬼無町佐藤	古墳	古墳時代後期	
36	山口山頂古墳	鬼無町山口	古墳		
37	空家古墳	鬼無町山口	古墳	古墳時代後期	
38	古宮古墳	鬼無町山口	古墳	古墳時代後期	
39	こめ塚古墳	鬼無町山口	古墳		
40	神高志西古墳	鬼無町山口	古墳	古墳時代後期	
41	神高志北西古墳	鬼無町山口	古墳	古墳時代後期、中世	
42・43	神高志南西古墳1・2号墳	鬼無町山口	古墳/消滅	古墳時代後期	
44	相越古墳	鬼無町山口	古墳		
45	鬼無城跡	鬼無町鬼無	山城	中世	
46	衣堅古墳	鬼無町鬼無	古墳		
47	袋山古墳	鬼無町鬼無	古墳		
48	鬼塚	鬼無町鬼無	塚		
49	御殿大塚古墳	御殿町	古墳	古墳時代後期	
50	柿木荒神	飯田町	塚	弥生時代～中世	
51	半田・小坂塚群	飯田町	塚		
52	飯田町東青木道跡	飯田町	集落	古墳時代、中世、近世	
53・54	青木1号墳・青木塚群	飯田町	古墳・塚	古墳時代中期	
55	飯田城跡	飯田町	城館	中世	
56	紙漉塚群	紙漉町	塚		
57	中森遺跡	紙漉町	集落	旧石器時代、中世	
58	八幡遺跡	紙漉町	集落	弥生時代、中世、近世	
59	うたい塚古墳	御殿町	古墳		
60	伽藍山東麓古墳	御殿町	古墳		
61	山王神社古墳	御殿町	古墳/消滅		
62	御殿天神社古墳	御殿町	古墳	古墳時代中期	
63	御殿池古墳	御殿町	古墳	古墳時代後期	
64	御殿池道路	御殿町	包含地		
65	三つ塚古墳	御殿町	古墳	古墳時代後期	
66	中間・西井坪遺跡	中間町	集落	旧石器時代、古墳時代、中世	
67	正莉遺跡・栗王寺遺跡	紙漉町	集落	縄文時代後期、弥生時代中期、古代	
68	中間・東井坪遺跡	中間町	後期旧石器、古代		
69	瓦塚遺跡	紙漉町・円座町	集落	古墳時代、中世	
70	国分寺六ツ目遺跡	国分寺町福家	集落	旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古代、中世、近世以降	
71	国分寺六ツ目古墳	国分寺町福家	古墳	古墳時代	
72	国分寺橋井遺跡	国分寺町福家	古墳・生產	古墳時代後期、中世	
73	矢塚南古墳	中間町	古墳/消滅		
74	矢塚北古墳	中間町	古墳/消滅		
75	司塚下古墳	中間町	古墳	古墳時代後期	
76	西山崎1号墳	西山崎町	古墳		
77	馬塚古墳	西山崎町	古墳		
78	本郷遺跡	西山崎町・中間町	集落	旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古代、中世	
79	川原遺跡	中間町	生產		
80	西方寺古墳群(4～6号墳)	西宝町	古墳/消滅	古墳時代後期	
81	下ノ山遺跡	郷東町	包含地	弥生時代	
82	木里神社古墳群(1～6号墳)	郷東町	古墳/消滅	古墳時代後期	2～5号墳消滅
83	摺鉢谷道路	峰山町	包含地	弥生時代	
84	石清尾山古墳群(1・22号墳)	西春日町	古墳		
85	石清尾山(摺鉢谷)古墳群(石清尾山2～8、21・23号墳)・摺鉢谷西斜面古墳群(1～4号墳)	峰山町	古墳	古墳時代後期	
86	石清尾山10～20号墳(摺鉢谷北尾根古墳10～13、17～20号墳)	鶴市町・西宝町二丁目	古墳	古墳時代後期	
87	石清尾山北尾根東古墳群(摺鉢谷北尾根東古墳群)14～16号墳	西宝町二丁目	古墳	古墳時代前期	
88	摺鉢谷東(東斜面)古墳群(1～15号墳)	峰山町	古墳		
89	峰山墓地内古墳群(1～4号墳)	西宝町二丁目	古墳/消滅	古墳時代後期	2～4号墳消滅
90	石清尾山9号墳(摺鉢谷9号墳)	峰山町・西宝町二丁目	古墳	古墳時代前期	
91	北大塚西古墳	峰山町	古墳	古墳時代前期	
92	北大塚古墳	皆山町	古墳	古墳時代前期	

第2表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	その他
93	北大塚東古墳	峰山町	古墳	古墳時代前期	
94	鶴塚古墳	峰山町	古墳	古墳時代前期	
95	石船塚古墳	峰山町	古墳	古墳時代前期	
96	小深古墳	峰山町	古墳	古墳時代前期	
97	第戎古墳	峰山町	古墳	古墳時代前期	
98	猪塚古墳	峰山町, 鶴市町	古墳	古墳時代前期	
99	鶴尾神社古墳群（1～3号墳）	西春日町	古墳	古墳時代前期	
100	鶴尾神社4号墳	西春日町	古墳	古墳時代前期	
101	稲荷山西星根古墳群（1, 2号）	室新町, 宮脇町	古墳		
102	稲荷山西端古墳群（1～4号墳）	宮脇町	古墳（消滅）	古墳時代前期	2～4号墳消滅
103	利弓山姫塚古墳	室新町, 宮脇町	古墳	古墳時代前期	
104	稻荷山西塚群（1, 2号墳）	室新町	古墳	古墳時代前期	
105	奥の池古墳群（1～23号墳）	西春日町, 室新町	古墳（消滅）	古墳時代後期	6～23号墳消滅
106	奥の池遺跡	室新町	包含地	弥生時代	
107	北山浦古墳群（1～3号墳）	西春日町	古墳（消滅）	古墳時代後期	3号墳消滅
108	片山城跡	西春日町	城館		
109	北山浦遺跡	西春日町	集落	弥生時代	
110	松並・中所遺跡	西春日町, 松並町	集落	弥生時代, 中世, 近世	
111	西八セ土居遺跡	西八セ町	集落	弥生時代, 中世, 近世	
112	上天神遺跡	上天神町	集落	弥生時代	
113	御殿神社古墳群（1～4号墳）	鶴市町	古墳（消滅）	古墳時代後期	2～4号墳消滅
114	御殿町水池内古墳群（1～4号）	鶴市町	古墳（消滅）	古墳時代後期	1～3号墳消滅
115	野山古墳群（1～11号墳）	西春日町	古墳（消滅）	古墳時代後期	9～11号墳消滅
116	淨願寺山古墳群（1～55）・南古墳群（56～57号墳）	飯田町, 西春日町	古墳		
117	南山古塚群（1～14号）	西春日町	古墳（消滅）	古墳時代後期	1～6号墳消滅
118	南山浦遺跡	西春日町	集落	弥生時代	
119	片山池1号窯跡	西春日町	窯跡	古代	
120	坂田廻寺	西春日町	寺院	古代	
121	坂田廻寺下層遺跡	西春日町	集落か	弥生時代	
122	片山池古墳群（1～3号墳）	西春日町	古墳（消滅）	古墳時代後期	2～3号墳消滅
123	南山浦1号窯跡	西春日町	窯跡	古代	
124	がめ塚古墳	勅使町	古墳	古墳時代中期	
125	がめ塚古墳群（2～4号墳）	勅使町	古墳（消滅）		

第3表 周辺遺跡一覧 3

寛永17年（1640）『生駒高俊公御領分惣高覚帳』には鶴市町の北にある郷東町はみられず、寛永19年（1642）『讃岐国高松領小物成帳』より郷東町の記述がみられることから、この頃に塩田や田畠が造成されたと考えられる。そのため、当時の海岸線は鶴市町近辺まで入ってきていたものと推定でき、古墳は瀬戸内海に近接した場所に位置していたものと考えられる。

第2節 歴史的環境

相作牛塚古墳が位置する高松平野は、両側を山塊に挟まれた平野である。しかし、その平野には、当古墳をはじめ、塚が群集しており、いくつか遺跡も確認されている。また、平野を挟む両山塊には石清尾山古墳群や神高池古墳群等が存在するなど、遺跡が数多く存在する場所でもある。以下、時代別に周辺遺跡と歴史的環境について概観していく。

旧石器時代

高松平野西部においていくつか遺跡が知られている。現本津川の下流域では西打遺跡より、包含層から石器が出土し、香西南西打遺跡②では、火山ガラスを包含する堆積層からナイフ形石器、スクレイパーの他、抉入石器、翼状剥片石核類、接合資料が出土している。南へ下り、六ツ目山から北東方向の麓に位置する中間・西井坪遺跡では、調査地区の3a区、3c区を中心に数基の石器ブロックが確認されている。また、角錐状石器、ナイフ形石器を主要石器として、スクレイパー、加工痕有剥片、石核、接合資料が確認されている。隣接する遺跡に中間・東井坪遺跡が存在し、ナイフ形石器をはじ

め、翼状剥片、抉入石器等が石器ブロックから出土している。また、中森遺跡でも石器ブロックが3ヶ所確認されており、正箱遺跡では遺構から離れた状態で石器が出土している他、近接する本郷遺跡、川原遺跡においても旧石器時代の石器が確認されている。六ツ目山を西に越えた麓にも国分寺六ツ目遺跡があり、香東川の西側から六ツ目山付近の平野には遺跡の分布がみられる。

六ツ目山の麓及び平野においては9遺跡確認されており、当地には早くから人間活動が及んでいたことが知られる。また、遺跡は隣接して確認されていることや、比較的浅い深度の層に旧石器の遺物を包含している層が確認されていることから、平野には依然、旧石器時代の遺跡が分布しているものと推測される。

縄文時代

旧石器時代に続き、遺跡を確認しているが、明確な遺構を伴うものは少ない。香西南西打遺跡②では後世の包含層から草創期と考えられる有舌尖頭器が出土している。西打遺跡からは縄文時代早期のものとみられる異形局部磨製石器（トロトロ石器）や岡山県浅口郡船穂町船穂にある里木貝塚から設定された「里木I式土器」の特徴に共通する土器が出土している。また、西打遺跡C区からは、縄文時代晩期前葉の土器と石器が一括廃棄された土坑が検出されており、出土状況から近くに居住城が存在することを示唆する。近接する鬼無藤井遺跡からも、自然流路から西打遺跡と同時期とされる縄文時代晩期の遺物が確認されており、近くに居住城があるものと想定される。その他、散布地である佐料遺跡から後期前半頃とされる無文小形深鉢が水路補修工事中に採集されている等、現本津川の下流域である香西南町と鬼無町に跨って遺構・遺物が確認されている。下流域から遡り、六ツ目山の山麓周辺の平野では正箱遺跡より、自然流路から彦崎KI式土器に比定される縄文土器深鉢で縄文時代後期前葉に属す土器が出土している。また、本郷遺跡では縄文時代晩期から後期にかけての貯蔵穴、柱穴跡が確認されている。国分寺六ツ目遺跡ではサヌカイトの集積遺構が確認されており、放射性炭素年代測定から、縄文時代後期頃の年代が想定されている。また、遺構は確認されていないが、中間・東井坪遺跡より旧石器時代と縄文時代の遺物が混在して確認されている。

弥生時代

高松平野北西部において、弥生時代前期の西打遺跡がある。前期の土器とともに突帯紋系土器が多く確認されており、出土地点より旧河道に挟まれた微高地に上に居住城が想定されている。また、掘立柱建物跡6棟、竪穴住居跡2棟で構成された後期終末の集落跡も確認されている。同じく前期の遺跡に属す鬼無藤井遺跡では、直径約60mの二重環濠が検出されており、環濠内部からは竪穴住居跡4棟、掘立柱建物跡1棟を確認している。松並・中所遺跡では前期の土器が出土している他、松菊里型住居と考えられる住居跡が検出されており、環濠をもつものと推測されている。中期には竪穴住居跡と居住施設に類する建物跡が確認される他、近接する西ハゼ土居遺跡では小区画水田が検出されている。中期の遺跡では正箱遺跡より竪穴住居1棟が確認されている。直径約6mを測り、松菊里型・北牟田型住居の系譜である可能性が高いとされている。香西南西打遺跡②では溝跡や土坑から後期に属する土器が出土している他、自然流路からは前期中葉の時期に属する土器が確認されている。中期中葉に属する北山浦遺跡からは円形の住居跡の他、方形の住居跡と考えられる遺構が確認されている。上天神遺跡では前期から後期にかけて土器が出土しており、特に後期では後期中葉から古墳時代初頭に特徴的な胎土・形態・技法により製作された「下川津B類土器」（大久保徹也 1990）の出土が多く、当遺跡を中心に周辺に製作地が推測される。高松平野南部では弥生時代後期に属する円形周溝墓を3

基検出した兀塚遺跡、溝跡から弥生時代後期後半段階の土器が出土した八幡遺跡の他、溝状遺構を検出した川原遺跡、建物跡を検出した本郷遺跡がある。国分寺六ツ目遺跡では川跡から弥生時代終末期の土器が確認されている。

また、未調査もしくは詳細不明な遺跡に、摺鉢谷遺跡がある。石清尾山山塊の中央にある摺鉢谷周辺に存在したもので開墾時に多量の土器・石器が採集されている。遺物は中期に属するもので、立地から高地性集落であったと推測される。また、石清尾山より北側斜面からは青銅器（広形銅鋸）が二口出土した下ノ山遺跡が存在する。その他、中世城館跡として知られる藤尾城跡では、在地の弥生土器のほか、特殊器台と特殊壺片が表露されている。土器は吉備から搬入されたものであり、当地に弥生墳丘墓があった可能性を示す。また、天満・宮西遺跡でも特殊器台が出土しており、高松市ではこの2例のみである。

その他、生島湾に面する串ノ山の西麓には浜津神社南遺跡より、土器の散布が知られている。石清尾山と室山に挟まれた麓に位置する奥の池遺跡、淨願寺山の西側麓に位置する南山浦遺跡、さらに南下した同山と東小山の麓に位置する坂田庵寺下層遺跡がある。これ等は弥生時代に属する遺跡であると推定されているが、詳細な内容は不明である。

古墳時代

当市内では古墳の築造は早くから行われている。石清尾山山塊には国指定史跡である石清尾山古墳群をはじめとして前期から中期初頭、後期の古墳群が形成される。前方後円墳出現期の鶴尾神社4号墳をはじめとして石清尾山9号墳、姫塚古墳、北大塚古墳、石船塚古墳といった前方後円墳や猫塚古墳、鏡塚古墳といった双方中円墳が築造されている。これ等は全て積石塚古墳であり、古墳時代前期から中期の初頭まで継続して築造される。また、鶴尾神社4号墳を含む鶴尾神社支群や、同じく積石塚古墳である稻荷山姫塚古墳や稻荷山支群、稻荷山北端支群、稻荷山西尾根支群があり、古墳時代前期に属する古墳が相次いで築造される。また、古墳時代後期には同山塊に峰山墓地内古墳群、西方寺古墳群、木里神社古墳群、北山浦古墳群、御殿神社古墳群、御殿貯水池内古墳群、奥の池古墳群、野山古墳群、淨願寺山古墳群、片山池古墳群、南山浦古墳群等の群集墳が築造される。その他、同山塊の最南端には、盛土前方後円墳であるがめ塚古墳が所在する。

高松平野の北西に位置する串ノ山では、生島湾に面して住吉神社古墳が存在する。内部主体には箱式石棺があつたとされ、円筒埴輪・形象埴輪片が採集されている。近接して盛土円墳に箱式石棺があつたとされる白骨古墳や竪穴式石槨と箱式石棺を内部主体にもつ牛ノ鼻古墳が知られる他、同山の西麓には両袖式の横穴式石室をもつ彈正原古墳や箱式石棺が出土したと伝えられる木野戸古墳が所在した。勝賀山北麓には積石塚である原経塚古墳が存在し、さらに南には横穴式石室をもつ桑崎古墳が存在する。このように串ノ山と勝賀山山塊、五色台山塊に挟まれている狭隘なこの地には、箱式石棺を内部主体にもつ古墳や積石塚古墳がいくつか知られている。

勝賀山東麓においても古墳が築造されている。古墳時代前期に属するにかしが谷古墳群がある。2号墳・3号墳が調査され竪穴式石槨、箱式石棺が確認されている。中期には円筒埴輪と形象埴輪を立て並べた盛土前方後円墳の今岡古墳が築造され、前方部から長持形陶棺（空芯專陶棺）が出土している。後期古墳には、沢池西古墳、善師塙古墳群が存在する他、詳細は不明である虎池西古墳が知られている。また、勝賀山と袋山により挟まれた浅い谷間には後期古墳である神高古墳群が形成されている。いずれも横穴式石室をもち、山野塙古墳、古宮古墳、神高池北西古墳、神高池西古墳、こめ塙古墳、空家古墳、神高池南西1号墳、同2号墳をグループとする古宮支群。鬼無大塚古墳。平木1～

4号墳（平木古墳群）をグループとする平木支群の3グループに分けられる。また、神高古墳群周辺には実態が不明であるが山口龍神社古墳、山口山頂古墳が存在する他、袋山には相越古墳、袋山古墳、衣懸古墳といった前方後円墳とされる古墳が知られる。

また、石清尾山山塊と勝賀山山塊に挟まれた狭隘な平野においてもいくつか古墳が確認されており、本書報告の相作牛塚古墳をはじめ、相作馬塚古墳、王墓古墳、青木1号墳等の古墳時代中期から後期前半に属すると考えられる古墳が知られている。また、これら古墳の周辺には塚群が形成されており、青木1号墳を含む青木塚群や半田・小坂塚群、紙漉塚群が分布する。塚からは古墳時代から中世、近世の遺物が確認されている。この塚の中には古墳も含まれているものと考えられる。

伽藍山から堂山にかけても古墳がいくつか築造されている。この内、伽藍山にはうたい塚古墳、伽藍山東麓古墳、山王神社古墳が分布し、同山東麓から平野にかけては、前方後円墳である御厩天神社古墳や横穴式石室をもつと考えられる御厩肥池古墳、三つ塚古墳や大型横穴式石室をもつ御厩大塚古墳が存在する。六ツ目山の西麓では前期に属する前方後円墳である六ツ目古墳が確認されており、その南方には横穴式石室をもった桶井古墳が存在した。六ツ目山南麓には内部主体を箱式石棺にもつ矢塚北古墳、矢塚南古墳が存在し、その南方堂山の北麓には弓塚下古墳、西山崎1号墳、馬塚古墳が分布する。

古墳以外の遺跡では、六ツ目山の北東裾部に埴輪製作跡が確認された中間・西井坪遺跡がある。円筒埴輪、形象埴輪に加え土製棺が出土している他、埴輪焼成土坑が確認されている。これら製作・焼成された埴輪や土製棺は今岡古墳に供給されたことが想定されており、当地域の様相を探る上で重要な遺跡である。また、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての古墳である中間・西井坪1号墳、中期に属する同2・3号墳が確認されている。集落遺跡では本郷遺跡から、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての掘立柱建物跡と竪穴住居跡が検出されている他、兀塚遺跡より古墳時代後期末の掘立柱建物跡が、飯田町東青木遺跡より溝、土坑が確認されている。

古代

古墳時代に続き、兀塚遺跡、中間・西井坪遺跡、正箱遺跡・菜王寺遺跡より古代の集落跡が確認されている。8世紀以降には正箱遺跡、中間・西井坪遺跡では条里型地割に合致する遺構がみられる。これら遺跡の南方には伽藍山と六ツ目山の間と、木田郡三木町の白山南麓とを結ぶ東西ラインに古代南海道が推定されており、条里地割施工との関連が推測される。また、古代南海道推定地を範囲に含む川原遺跡からは、条里地割に沿って幅約3～4mの溝状遺構が検出されている。灌漑としての機能も含め、古代南海道の側溝にあたる可能性をもつものである。近接して所在する本郷遺跡では、古代から中世にかけて埋没した条里溝跡が検出されている他、墨書き器が出土しており、近隣に関連する建物跡の存在が予測される。これら遺跡が所在する地域は、条里地割の残りもよく、中間・東井坪遺跡、中間・西井坪遺跡の「東井坪」「西井坪」の小字名から条里的「坪」に関係すると推測されるものや、本郷遺跡の「本郷」のように郡や郷にちなむ小字名があり、古代の地名が残る地域でもある。

古代には仏教の普及とともに古代寺院の造営が始まり、高松平野西部でも確認されている。石清尾山山塊の南東には、坂田庵寺が造営される。白鳳期の創建と推定され、寺域には礎石が残る他、県指定の金銅誕生釈迦仏立像が出土している。近接して、片山池窯跡群（片山池1号窯跡）と南山浦1号窯跡が確認されている。これら窯跡群から出土した瓦は坂田庵寺に供給されていたものと考えられる。その他、勝賀山北麓には勝賀廃寺、伽藍山には伽藍庵寺が知られている。高松平野において仏教の広がりを確認することができる。

中世

発掘調査によって居館跡や城郭と考えられる遺構が確認されている。高松平野北部では牛ノ鼻遺跡から丘陵の尾根に対して一定の距離をもって直交する溝が確認している。尾根を遮断する堀切であると考えられ、検出状況から城郭状遺構が推測されている。香西南西打遣跡①からは「コ」の字形を呈する区画溝が検出されており、屋敷地であったことが想定されている。香西南西打遣跡②からは土器製作のための粘土採掘の痕と考えられる土坑が検出されている。西打遣跡では、計画的に配置された掘立柱建物跡や溝跡が検出されており、居館跡の可能性をもつ。石清尾山山塊を挟んで、奥の池の麓に位置する松並・中所遺跡や西ハゼ土居遺跡でも掘立柱建物跡が確認されている。平野の南部では中森遺跡、八幡遺跡、正箱遺跡・菜王寺遺跡、兀塚遺跡、中間・西井坪遺跡からも溝跡や掘立柱建物跡が確認されており、これらは条里型地割に沿った遺構であることが確認されている。また、中森遺跡では鉄型や溶解炉片が出土しており生産行為が行われた集落跡と想定され、八幡遺跡からは平地式城館跡の可能性をもつ遺構が確認されている。堂山の西麓に位置する国分寺楠井遺跡は、窯跡や土器溜りが確認されており、中世の生産遺跡として知られる。また、当遺跡で生産された土器は県内に搬出されていたことが明らかになっている。その他、国分寺六ツ目遺跡でも少数の遺構が確認されている。

中世では、諸国に守護・頭領が設置され、国の治安や警備、土地の管理が始まる。当地も例外ではなく、後に強大な勢力を振るう香西氏の祖である讃岐の豪族藤氏資光が守護となる。承久の乱後はその子香西資村より代々とその権力と地位が世襲される。以後18代佳清までの約350年もの間、香西と佐料の地域を中心に栄えた。その間、勝賀山の山頂に本城である勝賀城を築き、麓には居城である佐料城と藤尾城を築いている。その他、周辺には中山城跡、植松城跡、芝山城跡、築城城跡、作山城跡、鬼無城跡、飯田城跡といった香西氏に関係する城跡が点在する。

近世以降

発掘調査から香西南西打遣跡②近世の井戸跡や瀬戸・美濃、備前陶磁器等が知られ、正箱遺跡・菜王寺遺跡では近世の墓を3基検出している。近世に入ると遺跡の分布数も増え、松並・中所遺跡や西ハゼ土居遺跡、八幡遺跡等、市域から広く近世にかかる遺構・遺物を確認している。

近世に入り、豊臣秀吉による四国征伐以後は、豊臣氏の家臣である生駒親正が讃岐の一国を領し、香東郡原庄に高松城を築城し城下町として栄えた。その後、生駒家に代わり松平頼重が藩主となり、後11代頼聰を最後に廃藩置県により藩が廃止され、高松県が置かれ、明治23年には高松市が誕生した。平成に入り、2005年に香川郡塩江町、2006年には木田郡牟礼町、木田郡庵治町、香川郡香川町、香川郡香南町、綾歌郡国分寺町が高松市の行政区画に加わり、市域面積375.11km²、総人口418,668人の中核市として現在に至っている。

主要参考・引用文献

- 高松市教育委員会 1990『平木1号墳試掘調査報告書』
- 高松市教育委員会 1991『高松市文化財調査報告書 横立山東麓 史跡高松城』
- 00香川県埋蔵文化財調査センター他 1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第二十五冊中間西井坪遺跡Ⅰ』
- 00香川県埋蔵文化財調査センター 1996・1997・1998『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成7・8・9年度』
- 00香川県埋蔵文化財調査センター 1997『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第二十八冊 国分寺六ツ目古墳』
- 00香川県埋蔵文化財調査センター 2000『都市計画道路国分寺綾南線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 松並・中所遺跡』
- 高松市教育委員会 2005『高松市埋蔵文化財調査報告第82集 神高池古墳群一神高池北西古墳群一』
- 香川県教育委員会 2008『県道因幡香南線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 本郷遺跡 川原遺跡』

第3章 古墳の概要

現在、古墳は削平により消滅しているため、確かめる方法はないが、ここでは唯一の手がかりである小竹氏の報告を基に遺構を整理するとともに、出土・採集資料を検討し、古墳の内容を報告する。

第1節 立地と周辺地形

相作牛塚古墳が所在していた高松市鶴市町は現在、東は石清尾山の北西端を含む西宝町と、石清尾山古墳群が所在する峰山町と淨願寺山古墳群が所在する西春日町と接する。西は本津川を町界の西境として、鬼無藤井遺跡が所在した鬼無町藤井、南は塚が群集する飯田町、北は寛永年間から造成された埋立地であり、瀬戸内海と近接する香西東町と石清尾山の北西端を含む郷東町と接する。町域は東西約2.0km、南北約2.1kmにわたり、石清尾山山塊の西側から本津川までの平野を取り囲む。中央には山塊と平野を斬ち切るように香東川が北流する。

現在、相作牛塚古墳の詳細な立地場所は不明であるが、おおよその位置は地籍図から確認することができる。現在の地図と比較すると、宅地化や道路敷設が進み、一部区画の変化がみられるものの、まだ当時の区画の姿を残している。古墳が立地していた場所は、香東川に近接した平野の標高約10mの高さに築造されていた。古墳の周辺は、香東川によって形成された扇状地によって南から北へ低くなる傾斜があり、さらに南東から北西に向けて等高線が傾斜する地形にある。視界は平野を一望することができる位置にあり可視領域は広く、主に平野が望める西を意識した立地と言えよう。また、この相作牛塚古墳の南方には、同じ地理的環境の上に造営された相作馬塚古墳や青木1号墳が知られる。また相作牛塚古墳からさらに西に入った平野のほぼ中央には王墓古墳が立地する。これらは未調査のため詳細は不明であるが、表探遺物から何れも相作牛塚古墳と同じ古墳時代中期から後期に属する古墳であると推定されている。

第2節 墳丘

削平以前の残存墳形や規模、採取資料等の記録は知られておらず、現状確認時の記録に止まる。それによれば、高さ1m程の雑木に覆われた小高い塚であったとされる。

古墳築造当初の墳丘規模、墳形については、出土遺物からある程度の推測を可能としている。円筒埴輪の基部が、埋葬施設から北西方向7m地点に出土している。この埴輪の詳細な出土状況は不明であるが、古墳築造時の位置を留めているものと考えられる。記録によれば、埋葬施設を開むように弧を描いて樹立していたことが確認されており、埋葬施設を中心に直径14m以上の円墳であったと推定されている。しかしながら、この埴輪列が墳丘中段のものであり、墳丘基部が埋没している可能性があるため、さらに大型の墳丘であった可能性がある。

第3節 外部施設

墳丘内から多量の埴輪片が出土している。この内、円筒埴輪の基部が3箇所確認されている。この円筒埴輪の基部は、2~2.5m程の樹立間隔で立て並べられていたとされ、同様の間隔で墳丘を巡っていたものと考えられる。また、墳丘の頂部からは人物埴輪・家形埴輪といった形象埴輪片が集中して出土している。以上から、墳丘の周囲には円筒埴輪を巡らせ、頂部には形象埴輪を立て並べて墳丘

を埴輪で装飾していたと考えられる。その他の外部施設として、葺石や周濠の有無については確認されていない。ただし、小竹氏の報告にあるように他の塚同様、削平または盛土の流出のため、早くに消滅してしまったという可能性も否定できない。

第4節 埋葬施設

墳丘の内部には石室の残欠が存在していた。石室は既に破壊を受け、北壁面を残すのみであったとされる。そのため、石室の規模、形態、副葬品の詳細は不明である。概略図から残存石室規模は北壁面幅約1m、東壁面約1m、西壁面約0.5mが記されており、南北方向に主軸をもつ堅穴式石槨であったものと推測されている。石室の高さについては触れられていないが、墳丘の頂部から形象埴輪片が確認されていることから、墳丘頂部はある程度、現状を保っていたものと考えられる。

第5節 出土・採集遺物

現在確認できる資料は埴輪（円筒埴輪・形象埴輪）、須恵器、石器、鉄製品（武具・馬具）である。ここでは、『高松市歴史資料館収蔵資料目録～考古資料～』（1996）において既に公開されている実測図を再掲するとともに、これまで未報告であった遺物資料の公開を行う。

円筒埴輪の分類

出土・表採された円筒埴輪は全部で213片に及ぶ。土師質と須恵質のものがみられ、全体的に断片的なものがほとんどである。しかし、調整の残りが比較的良好で、中には二次調整が施されているものや、ヘラ記号をもつものがみられる。確認されている埴輪は体部片が大半を占めるが、この内突帯部については台形・M字形・扁平形等、形状に多様な様相がみられバリエーションに富むものである。これらは今回の整理作業により、いくつかのグループに分けられることが分かった。ここでは円筒埴輪の分類を行い、諸類型を設定してその特徴の抽出と把握を試みる。

分類方法として形態、法量、胎土、調整、焼成、色調、透かし孔、ヘラ記号の項目を設けて埴輪の特徴を提示することにする。まずは焼成により大別し、各部位ごとに形状により諸類型を設定し、そして細分類の項目として胎土、調整、焼成、色調を設けて同様の特徴を示すもの同士をまとめてみた。また、前述の通り、当古墳の埴輪は全て破片のため、各部位との関係及び全体像を復元することは困難である。そのため本報告では分類するに止め、当古墳に用いられている埴輪の特徴を抽出することを中心とした。

形態

破片のため、本来の大きさ、突帯の段数、透かし孔の位置と数等の詳細は不明である。部位ごとの形態でみれば口縁部は直立するものが多く、外反するものも2例みられる。基底部は直立するものと、大きく外へ開くものがあり、底部形状は細く窄まるものと肉厚な器壁をもつものがみられる。体部は口縁部や基底部のように基準となる端部がないため傾きは推測になるが、復元したものをみると大半が緩やかに外へ開くもので、数例直立に伸びるもののがみられる。

法量

いずれも直径は復元により算出したものであり厳密なものではないが、以下に示すと、口縁部径は17.6cmと35.1cm前後の2つに集中する。基底部径は12.7cm～18.0cm内に納まり、その内16cm前後に

集中する。体部径は破片自体がどの位置にくるものか不明であるが、突帯部を避けた部分の計測で大よそ右20cm前後を示し、中には30cmを越えるものもみられる。また、参考数値ではあるが、残存状況の比較的良い資料を例に上げれば、口縁部から突帯までの長さが2では13.0cm以上、64は9.7cmを測る。突帯間の幅は38は8.5cm、55は約7.5cm、41は約8.5cmを測り8cm前後の幅が設けられている。また、基底部から突帯までの長さは18は4.7cm、16は6.5cm、25では7.3cm、27では7.7cmを測る。また23や19のように8.0cm以上でも突帯がみられないものがある。18の突帯位置の低さが際立つが、基底部の突帯は7、8cmの幅をもたせ貼り付けている。各部位と突帯までの幅は大小様々である。

調整（外面・内面）

外面には縦、斜め方向の刷毛が施される。斜め刷毛は右下から左上に施されており、また逆に左上から右下へ施すものもみられる。外面調整は基本的に一次調整で終わるが、92・68のように二次調整に横刷毛を施すものが確認できる。ともにB種横刷毛（川西宏幸1978）に分類され、刷毛の停止痕跡から両者とも刷毛を左から右へ水平に移動している。92は突帯より上の壁面には横刷毛、突帯より下の器壁には一次調整の斜め刷毛がみられる。68は突帯下辺にも横刷毛がみられる。破片のため全てに横刷毛を施したものか、部分的なものは分からぬ。

内面調整は横刷毛、斜め刷毛を施した後、縦・横ナデまたは斜め方向のナデ調整が加えられる。中には板状工具を用いてナデを施すものもみられる。口縁部は口縁端部の調整に差があり、内面には横ナデが確認できるが、外表面は横ナデ調整が弱く刷毛が残っていたり、強くナデを施して刷毛を打ち消したもの等がみられる。底部では外表面には指頭圧痕の他、板状工具を用いて押さえを施し、内面には底部の整形とともに自重による潰れを防ぐために底部付近に指頭圧痕を施している。また、安定させるために底面に指頭圧痕を加えるものや、刷毛を施して底部面を水平にするものもみられる。突帯については、粘土紐を貼り付けて整形し、後に横ナデ調整する從来からの技法と断続ナデ技法A（鐘方正樹ほか1991）と呼ばれる調整技法を確認している。断続ナデ技法Aとは器壁に突帯となる粘土紐を貼り付けた後、一定間隔に左上方向または左下方向に交互に強いナデを加え、器壁に粘土紐をより接着させることで、仕上げに横ナデ調整が施される。その際、突帯の上辺の左上方向のナデは細く長いため、横ナデ調整後も擦痕を残す。また、交互にナデつけた突帯粘土は横ナデ調整後も団子状の膨らみとしてナデの痕跡を残す。この技法は須恵質、土師質とともに焼成に限らずみられ、突帯形状は強くナデ付けられるため、断面扁平台形または扁平M字になる。また、当古墳では断続ナデの後に、仕上げに横ナデ調整を施さない断続ナデ技法Bは確認していない。

胎土

石英と長石を主に含み、赤色粒や雲母を若干含むものがみられる。粘土には極稀に5mm大の石粒がみられるが、全体的に3mm以下の石粒を含む。胎土の相違から、土師質と須恵質、また円筒埴輪や朝顔形埴輪、形象埴輪（人物・家形）に際立った違いはみられない。また、類型によって特徴的な胎土をもつようなものもみられなかった。胎土の違いは石粒の含有量に変化がみられるのみである。

焼成

黒斑を有するものは一切みられず、硬質な埴輪がいくつかみられることから窯による焼成と考えられる。焼成の違いでは比較的軟質な土師質と非常に硬質な須恵質がみられ、中には土師質と須恵質の中間の様相を示すものがあり明確に区分することは難しい。本報告書では土師質埴輪を基準として、非常に硬質で灰褐色を示すものを須恵質埴輪とし、橙色や浅黄橙色、黄橙色等の黄色を帯びた軟質な

ものを軟質土師質埴輪とした。また、中間の様相を示すものには別枠として、軟質土師質埴輪に比べ硬質なもので色調はにぶい赤褐色、にぶい橙色、橙色等の赤色を帯びるものや、表面と内面とで色調と硬度に差があるものを基準として硬質土師質埴輪とした。焼成別の割合として確認している埴輪の内、大半が軟質土師質埴輪であり、須恵質埴輪片は全体の7%，硬質土師質埴輪片は15%である。

色調

黄橙、浅黄橙、にぶい橙、明赤褐、にぶい赤褐、褐灰、灰褐色等がみられる。橙色を示すものが主で、その多くが土師質であるが、中には色調は橙色を示していても硬質のものや、表面と内面とで色調と硬度が異なるものも含まれており、当然ながら一概に色調と焼成が一致するものではない。

透かし孔

円形もしくは梢円形のものである。方形や三角形のものは確認できない。透かし孔は鋭利な道具を用いて切り取っており、切り取り断面には胎土の石粒の移動が顕著にみられる。位置は突帯の上辺または下辺裏に入り込むものが多く、突帯貼付後に透かし孔を穿孔している。位置と間隔については、38によれば突帯間の透かし孔の位置はずらして穿孔しているようであるが、同じ規模で残存する61や104をみると38と同じ位置にみられない。位置や間隔については必ずしも決まっているようには見受けられない。また、透かし孔は円形を意識して切り開かれていると考えられるが、大きさはまちまちで、61のように指頭圧痕や器壁の粘土を引っ張るほどナデを施すものが多くみられるほか、人差し指、中指、薬指の3本を用いて無理やり引き広げて梢円形にしている103の例が確認されており、しばしば指紋が残るものもみられる。

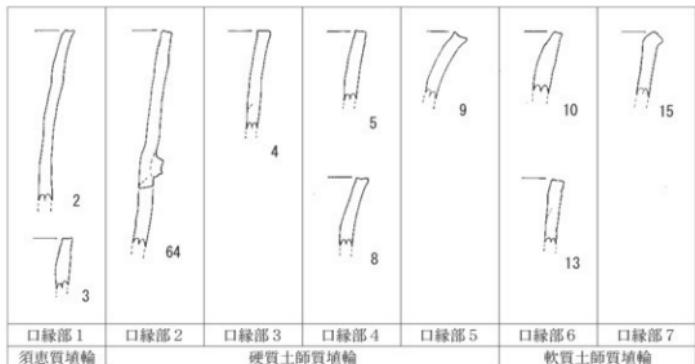
ヘラ記号・印

須恵質埴輪に1例(30)、硬質土師質埴輪に2例(50・53)、軟質土師質埴輪に2例(104・120)確認している。30は二股状のヘラ記号である。左下から右上方向にやや緩やかに湾曲した線と、線の途中に左側から水平に伸びた線がぶつかる。53は突帯と並行して水平に深く刻まれている。50は左下から右上方向に伸びる浅く刻まれた線がみられる。また、別に左上から右下方向に伸びるもので突帯下辺まで印が及ぶものもみられる。120は2本の線がハの字状に深く刻まれている。上部を欠くもので、本来は交差してXの字に印されていたかも知れない。104は突帯間に左上から右下方向に直線的にみられる。いずれも、破片のためヘラ記号の全容は不明である。また、体部にのみ確認でき、口縁部と基底部には確認できない。

印が確認できるものに86がある。突帯の一部が剥離しており、剥離面には一次調整の継・斜め刷毛のほかに、刷毛を切るように幅2mm程の凹線が水平にみられる。この凹線は棒状の工具を用いて施されたとみられ、突帯の貼付に際し、目印として施されたものと考えられる。その他、後述する硬質土師質埴輪の〔突帯2〕に分類される埴輪の突帯下には列点文のようなものが大よそ等間隔に確認できる。果たして印の役割をもつものか、突帯調整時に付いたものは判断できないが、突帯と並行してみられることから、突帯に関係するものと考えられる。

口縁部(第3・4図)

口縁部は14片確認している。この内、須恵質埴輪は3片、硬質・軟質土師質埴輪はともに6片である。まずは焼成によって大別し、口縁端部の細かな形状や胎土・焼成・色調と調整によって細分を行った。特に調整は口縁端部の横ナデ調整と内面調整に注目した。また、観察から須恵質のものを除き他は別個体である。そのため、分類とあわせて各口縁部の胎土、調整、色調等を記しておく。



- 1 直立または直立気味で、
口縁端部は凹む、外面に
細かな縦刷毛が施される。
- 2 直立または直立気味で、
外側に斜め刷毛を施す
- 3 直立した口縁部で、内
面に斜めナデを施す。
- 4 直立気味で、口縁端部
は水平である。
- 5 外反する口縁部で、口
縁端部は水平に尖る。
- 6 直立気味であるが、口
縁端部付近で外面にやや
反り返る。
- 7 口縁端部付近で明確な
角度をもって折れる。

第3図 口縁部分類図

須恵質埴輪

〔口縁部1〕(第4図)(報告番号1・2・3)

(収蔵資料分類番号I.0054)

直立または直立気味の口縁部に、口縁端部は調整により凹みがみられる。外面調整は細かな縦刷毛、内面には横刷毛が施される。口縁部の横ナデ調整は弱く刷毛が残る。

1の器壁は薄く直立気味で、やや外側へ外反する。口縁部の端面は僅かに窪み、角は丸く終わる。外面調整は端面付近まで刷毛幅1cmあたり約12~14条の細かく幅の狭い刷毛が及ぶ。口縁部にみられる横ナデ調整はあまり、ほとんど施されていないため口縁部はところどころ凸凹している。内面は外面に使用した工具を用いたとみられる横刷毛が口縁部付近まで施される。胎土は2mm以下の石英、長石を含み、外面の色調は褐灰色と内面は灰褐色を示す。2は1と同様の胎土、調整、口縁端部の形態、色調がみられる。破片下部には上方と横方向に向かった強いナデがみられ、突帯が近くにあることを示すものと考えられる。また、両者は同一個体の可能性をもつものである。

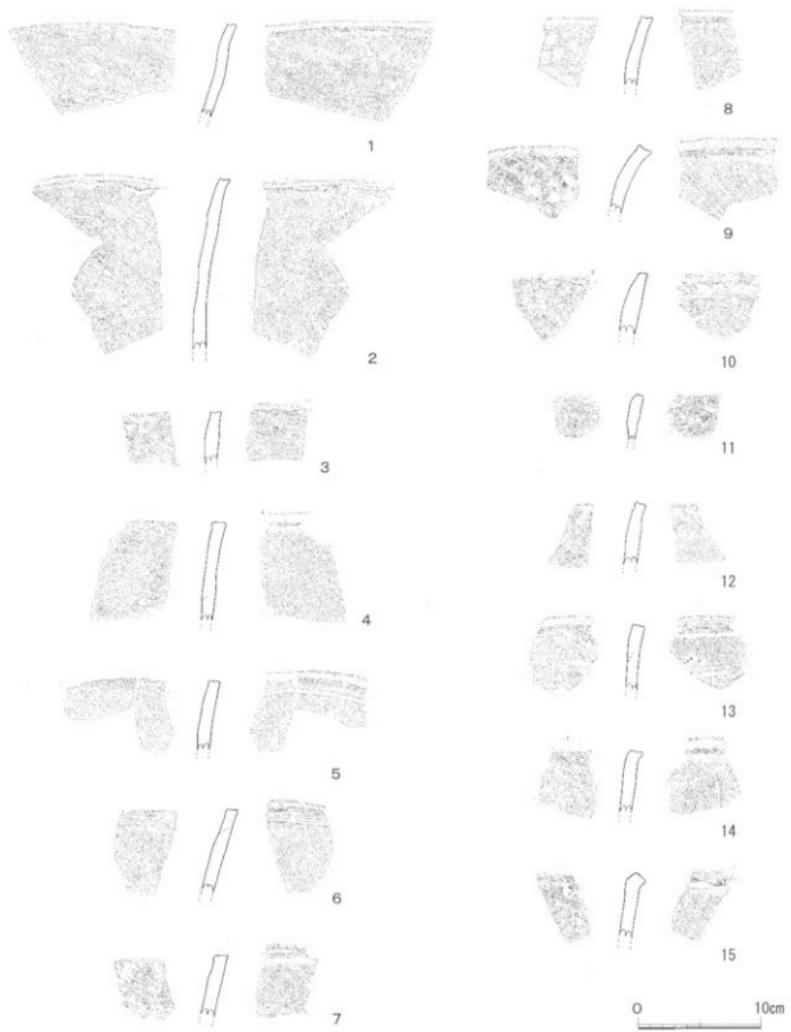
3の器壁は厚く直立気味である。口縁部端面は僅かに窪み、角は丸く終わる。外面調整は深く施された斜め刷毛が端面付近まで刷毛が及ぶ。横ナデ調整はあまいため刷毛が残る。また、3特有のものであるが、調整の横ナデとは別に、口縁部から約2cm下に幅0.8cm前後の一条のナデがみられる。同様のナデが体部片I.0054-91にも確認でき、何らかの目印の可能性が考えられる。内面は指頭圧痕が顕著に残り、口縁部付近には内外面に横ナデが施される。外面は口縁部から下へ約3cm幅にナデがみられる。胎土は1mm以下の石英と長石を含み、色調は内外面ともに5YR6/2の灰褐色を示す。

硬質 土師質埴輪

〔口縁部2〕(第12図)(報告番号64)

(収蔵資料分類番号I.0054)

直立もしくは直立気味にのびた口縁部に、内面調整は斜め刷毛と斜めナデを施し、口縁端部は外面に傾く。64の器壁は直立気味で外に開く。端部の角は突出することなく丸く終わる。外面は粗く深く縦・斜め刷毛が施された後、口縁部に横ナデと左上から右下へ強いナデが施されている。内面には斜め刷毛で調整した後、縦ナデと指頭圧痕が施される。口縁部には指頭圧痕と横ナデがみられる。横ナ



第4図 円筒埴輪実測図1 口縁部 (S=1/4)

デ時につけたと思われる1mm程の石粒の移動痕が口縁部と並行にみられる。また、64は確認している中で、残りの比較的良いものであり、口縁部から突帯、透かし孔の形状を観察できる資料であるため合わせて各特徴を記す。残存長17.7cmを測り、口縁部から2段中腹まで残る。突帯は口縁部から10cm下に取り付けられる。突帯は断面M字型を呈するもので上辺の稜は突出し、下辺の稜は押しつぶされたようにやや下に垂れ下がる。これは調整時に下辺と側片を横ナデした後、上辺と側辺を横ナデ

した結果、下辺の稜が潰されたものと判断できる。また、その際に横ナデはほぼ突帯のみに施され、突帯の上・下辺の器壁には横ナデは施されない。二次調整はみられず、継・斜め刷毛の一次調整で終わる。透かし孔は円形で、突帯の直下に切り開かれる。鋭利な工具を用いた後に、強い指頭圧痕や内面から粘土を引っ張りナデ付ける等の調整が加えられており、正円形にはならない。胎土は1mm以下の石英と長石がみられ、刷毛は1cmあたり5条が確認できる。色調は内外面ともに2.5YR6/4・5YR6/4のにぶい橙色を示すものである。表面はやや軟質で土師質埴輪の色調を示し、中の粘土は硬質であることから土師質と須恵質の中間とみられるが、全体的に硬質であるため硬質土師質埴輪に区別される。

〔口縁部3〕(第4図)(報告番号4)

(収蔵資料分類番号 I. 0054)

直立した口縁部に内面調整は斜めナデを施す。口縁部の横ナデ調整は外面はあまく、内面は強く施される。口縁部は器壁よりも厚くなり口縁部端面はナデにより若干窪む。外面は1cmあたり8条の斜め刷毛が施されている。内面は指頭圧痕と斜め方向のナデが施された後、口縁部をナデにより整形する。そのため口縁部付近はやや凹む。胎土は3mm以下の石英、長石を含み、色調は外面は5YR6/8の橙色、内面は5YR5/3のにぶい赤褐色を示す。また、同様の調整・色調・焼成を示すものにI. 0051-13・60・67・72・78がある。以上は器壁のみのため図化はしていない。いずれも内面に板状の工具を使用してナデを施すもので、他の埴輪にはみられない調整である。そのため同一個体の可能性を考えられる。確認しているものは口縁部のみで突帯や基底部は不明である。

〔口縁部4〕(第4図)(報告番号5～8)

(収蔵資料分類番号 I. 0054)

直立気味の口縁部に、口縁端部は平らなものと凹みがみられるものがあるが、傾くことなく水平を保つ。5の器壁は直立気味で焼き歪みがみられる。口縁部端部はナデにより窪む。外面は浅く粗い刷毛の後、口縁部付近にナデが施される。また、口縁部下には幅3mm程の凹線のようなものがめぐる。整形時のものか、何らかの目印であるかは判断できない。内面は指頭圧痕と口縁部付近はナデが施される。胎土・色調とともに9に近く硬質である。6は外へ開く口縁部である。口縁部端面は焼き歪みが生じている。外面は1cmあたり6条のやや粗い斜め刷毛が深く施される。胎土は1mm以下の石英、長石を含む。色調は内外面ともに7.5YR6/3のにぶい褐色を含む。調整の刷毛目は7に近似する。7の口縁部は直立気味である。口縁部の端面はほぼ水平であるが、外面に位置する口縁部の角がやや上方に突出する。外面調整は1cmあたり5条の粗く浅い刷毛が打ち消されている。内面は強い指頭圧痕と口縁部付近に横ナデが施される。外面には口縁部から下に約2cm幅にわたりナデがみられる。胎土は1mm以下の石英、長石を含み、外面の色調は2.5YR6/3のにぶい橙色、内面は2.5YR5/4にぶい赤褐色を示す。8の口縁部は直立気味で緩やかに外へ開く。外面は1cmあたり9条の刷毛が口縁部付近まで及び、内面は強い指頭圧痕が施され、口縁部には幅の狭いナデが内外面にみられる。胎土は2mm以下の石英、長石を含み色調は内外面ともに5YR5/4のにぶい赤褐色を示す。

〔口縁部5〕(第4図)(報告番号9)

(収蔵資料分類番号 I. 0054)

外反する口縁部で1例のみ確認している。9の口縁部は大きく外反する。口縁部のつくりは親指と人差し指によって挟んだままナデ調整が行われているために端面は窪み、外面の角は水平に強く突出している。また内面の角は上方へ突出する。外面調整は1cmあたり6条の斜め刷毛が施され、内面には2・3種類と同様の調整が施されている。胎土は3mm以下の石英、長石を含み、色調は内外面ともに2.5YR5/3のにぶい赤褐色を示すもので非常に硬質で調整が良く残る。また、体部片で同様の胎土・色調・調整を示す破片(I. 0054-62)が1点確認されている。

軟質 土師質埴輪

〔口縁部6〕(第4図) (報告番号10~14)

(収蔵資料分類番号I.0054)

基本的には硬質土師質埴輪の形状と同じ直立または直立気味の口縁部であるが、内面は反り返りぎみで、口縁端部はやや外面に傾く。

10の口縁部は直立気味に緩く開くが、内面側からみると外側への反りが強い。厚い器壁は口縁部付近でかなり薄くなる。外面は1cmあたり、約5条一束の斜め方向の刷毛がみられ、内面は指頭圧痕が施される。胎土は3mm以下の石英と長石を含み、内外面ともに7.5YR8/6の浅黄橙色を示す。かなり軟質で調整の剥落がみられる。11は内外面ともに7.5YR7/3のにぶい橙から8/6浅黄橙を示す。外面は斜め刷毛が施され口縁部付近で横ナデが施される。内面は摩滅により確認できない。口縁部の器壁は薄く摩滅により角が失われているが、直立する口縁部の形態を示すものである。胎土は1mm以下の石粒を含む。12は直立気味である。口縁部は体部より器壁が薄くなりナデにより端部は窪む。外面は1cmあたり10条の斜め刷毛。内面は斜め方向のナデが施される。胎土は1mm以下の石粒を含み、色調は外面が7.5YR6/4のにぶい橙色、内面は7.5YR6/6の橙色を示す。13は直立するもので、口縁部付近で短く外側に折れるが明確なものではない。外面は1cmあたり、8~10条の斜め刷毛が器壁の粘土を引くほどに施される。刷毛の条には細いものから太いものがあり、何度も刷毛が繰り返し行われていることが考えられる。内面は斜め方向の板ナデがみられる。口縁部はナデにより整形され、特に外面には凹線のように強いナデによる凹みがみられる。硬質で胎土は3mm以下の石粒を含むものでやや粗い。色調は外面5YR7/4のにぶい橙色、内面は5YR7/6の橙色を示す。14は直立気味に伸び、口縁部付近で短く反り返る。外面の口縁部の角はやや上方に向かい弱い突出をみせる。調整は粗く、幅の広い斜め刷毛が浅くみられ、その後に刷毛を打ち消すナデが局所的に施されている。内面には横ナデがみられる。胎土は1mm以下の石英、長石を含み、内外面とも5YR7/6~7/8の橙色を示すもので軟質である。

〔口縁部7〕(第4図) (報告番号15)

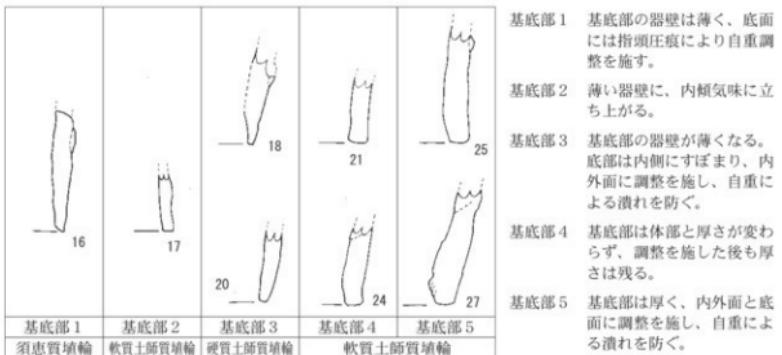
(収蔵資料分類番号I.0054)

口縁部付近で角度をもって折れるもので15のみ確認している。直立気味に伸びた器壁は口縁部付近で短く曲がる。口縁端面は凹みはみられず平らに仕上げられる。内外面の調整や胎土・色調は11と同様なものがみられる。また、口縁部内面は明確な角度をもって折れるが、外面は外側の器壁と口縁端面を指で挟んで横ナデを施したため、外側にも角度をもって折れているようにみえるが、実際には14のように口縁部外面が突出するものに近いと考えられる。しかしここでは、明確な折れが内外面にみられることから、別類型として設定している。

以上、胎土・調整・口縁部の形状・色調・焼成の整理から7類型に分けることが可能である。また、観察より全て別個体であると考えられる。口縁部の形態から硬質土師質埴輪では口縁部が大きく開く9、軟質土師質埴輪では口縁部で折れがみられる15の特異な形態を示す2例を除けば、全体的に直立気味で緩やかに外に開くつくりである。

基底部 (第5~7図)

基底部は12片確認している。この内須恵質埴輪は1例のみで、他は軟質土師質埴輪である。全体を通して20cmを越えるものではなく、12cmから18cm台で納まる。以下、焼成により大別し、基準項目として胎土・色調の他に底部の調整に注目した。また、本古墳からは朝顔形埴輪と形象埴輪が確認されており、これらの基底部も含まれている可能性がある。



第5図 基底部部分類図

(収蔵資料分類番号 I. 0054)

〔基底部1〕(第6図)(報告番号16)

基底部の器壁は底面に近づくほど薄く、指頭圧痕により自重調整が施されるものである。16は外外面ともに7.5YR5/2の灰褐色～7.5YR6/3のにぶい褐色を示す。底部は細く窄まり外面側にむけて尖る。そのため底部面は内面に入り込む。外面調整は指頭圧痕とナデにより仕上げられる他、突带上辺に条幅の太く浅い斜め刷毛が施される。内面は指頭圧痕と縦・横ナデにより整形される。基底部端面にも細かく指頭圧痕が施され、自重による潰れを調整している。突帶は断面扁平M字形を呈し、調整は下辺をナデた後、上辺と側片をナデたため、下辺側の稜は下に垂れる。底部と突帶間の幅は6.5cmを測る。その他、円形の透かし孔が突帶の上部に切り開かれており、鋭利な工具を用いた後、指頭圧痕が加えられている。

軟質 土師質埴輪

〔基底部2〕(第6図)(報告番号17)

(収蔵資料分類番号 I. 0054)

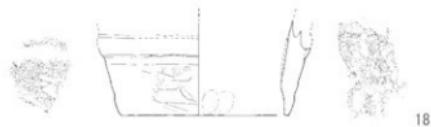
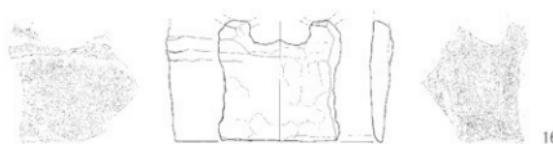
17は薄い器壁にやや内傾気味に立ち上がる基底部である。外面はナデにより仕上げ、内面は指頭圧痕がみられる。また、底面にも指頭圧痕が加えられる。色調は外外面とともに5YR6/4のにぶい橙色を示し、胎土は1mm以下の石英、長石がみられる。

硬質 土師質埴輪

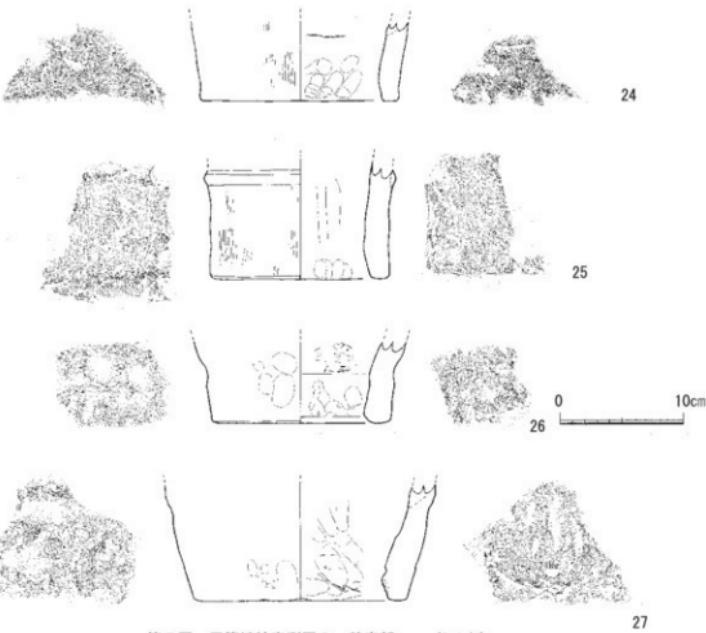
〔基底部3〕(第6図)(報告番号18・19・20)

(収蔵資料分類番号 I. 0054)

基底部端部が器壁に比べ細くなるものである。底部の外面には指頭圧痕もしくは板を用いて押さえ、内面には指頭圧痕を加え、自重による潰れを防いでいる。18は外外面ともに7.5YR6/3のにぶい褐色を示す。底部は体部器壁に比べかなり薄く形成されており、外面には縦・横刷毛後ナデが施されている他、自重による粘土の撹みがみられる。内面は横ナデと底部付近に強い指頭圧痕がみられる。また、外面には底面から約5cmの箇所に断面扁平台形状の突帶が貼り付けられている。胎土は1mm以下の石英と長石を含むものでやや硬質である。19は底部が細く底面を殆どもない。外面は刷毛調整の痕跡はみられずナデ調整が施され、内面は指頭圧痕と縦ナデ施されている。18と同様の胎土・色調がみられる。また、20も底部が細いタイプである。外面は縦・斜め刷毛が顕著に残り、底部付近にナデにより打ち消されている。内面は指頭圧痕が施され、底部付近には自重による潰れ防ぐために底面から指頭圧痕による調整を施しており、その際の粘土の撹みがみられる。胎土は1mm以下の石粒を含むもの



第6図 円筒埴輪実測図2 基底部 ($S=1/4$)



第7図 円筒埴輪実測図3 基底部 ($S=1/4$)

で軟質である。

軟質 土師質埴輪

〔基底部4〕(6・7図)(報告番号21~24)

(収蔵資料分類番号I.0054)

基底部は器壁と同等の厚さのものである。調整は〔基底部3〕と同じであるがそれでも器壁に厚さを残す。21は5YR~7.5YR7/4のにぶい橙色を示す。外面はナデ調整、内面は底部付近に強い指頭圧痕が施される。底面には調整はみられない。胎土は1mm以下の石粒を含む。22は器壁が底部と同等の厚さで伸びるものである。外面には底面近くまで縦刷毛が及び、横ナデにより打ち消される。内面には斜め方向に板ナデ状の調整と指頭圧痕がみられる。胎土はやや粗く、色調は7.5YR5/4のにぶい褐色を示す。23は内外面ともに7.5YR7/4のにぶい橙色を示す。外面は縦・斜め刷毛が底面付近までみられ、内面は摩滅しているが指頭圧痕が確認できる。器壁はやや狭い底面から直立するもので、外面は緩やかに外反し、内面は底面より3.5cm程の地点で明確に折れて外へ開いていく。軟質で胎土は1mm以下の石粒を含む。24は内外面ともに7.5YR7/6の橙色を示し、胎土は3mm以下の石英と長石を含むものでやや粗く、軟質である。外面には縦刷毛が施され、内面には顕著に指頭圧痕が残る。底部は厚く、直立気味で緩やかに外反していく。

〔基底部5〕(第7図)(報告番号25・26・27)

(収蔵資料分類番号I.0054)

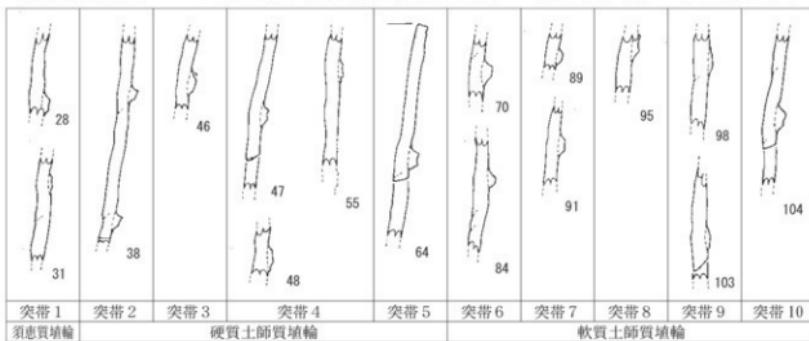
基底部は厚く、底面に調整が施されているものである。25の底部は厚く、直立気味に器壁は伸びる。底面は広く設け安定感がある。内外面ともに色調は7.5YR5/3のにぶい褐色を示す。外面調整は条幅

の太い縦刷毛がみられ、底面にまで刷毛が施されている。内面には指頭圧痕と綫ナデがみられる。底部付近には指頭圧痕が連続して施される。底面より7.5cm上は摩滅しているため正確ではないが、断面扁平三角形状の突帯が貼り付けられている。突帯直下に縦刷毛がみられるため、突帯調整は突帯のみにナデが施されていたものと考えられる。胎土は1mm以下の石英と長石を含むもので軟質である。26の底部は厚く器壁は上方に向かって開いていく。色調は外面とともに7.5YR6/4のにぶい橙色を示す。調整は外面に指頭圧痕が確認できるが摩滅が激しいため、刷毛が施されていたかは確認できない。また、底部から上に7.5cmの地点に、断面扁平台形状の突帯がみられる。内面はナデと底部付近に指頭圧痕が無数に確認できる他、底面には強い指頭圧痕が施されている。胎土は3mm以下の石粒が確認できる。同様の形態と胎土、色調を示すものに27がある。26に比べ径が大きく、外面の調整は指頭圧痕とナデが施されるが刷毛は確認できない。また、断面扁平突帯がみられ、内面には綫ナデにより、底部付近に粘土の擦みがみられる。

以上、基底部は形態から、底面が体部に比べ細く窄まるもの、底部は体部と同等の厚さをもち、底面に平坦面をもつもの、更に底部が厚くなったもの大きく3つに分けられ、基準項目の整理より、5類型に分けることができた。類型別に調整・色調等の項目によって細分は可能と考えられるが、調整の残りや遺物の数から、安直な細分は混乱をまねく恐れがあるため、現段階では形態別の分類に比重をおくものとして細分は控えた。調整は主に外面は刷毛とナデ。内面は指頭圧痕、底面には指頭圧痕とナデの他刷毛が施される。確認したものはすべて自重を防ぐため、また、整形のために何らかの調整を加えている。

突帯（第8～17図）

突帯形状は台形、M字形を中心に扁平が加わったものや幅が広く低平等ものがみられる。また、突帯の貼り付け方法や、その後の横ナデ調整の違い等バリエーションが豊富で類型化は難しい。そのため、口縁部・基底部の分類と同様にまずは焼成別に大きな枠組みとして須恵質埴輪、硬質土師質埴輪、軟質土師質埴輪の3つに分けた後、台形突帯、扁平台形突帯、M字形突帯、扁平M字形突帯に分け



- | | | | | |
|---|---------------------------------|---|---------------------------------------|--|
| 1 断面扁平M字形。突
帯側面の凹みは広い。
断続ナデ技法Aを施す
ものが含まれる。 | 3 断面扁平台形。突帶
下辺が低く、傾いた突
帯。 | 5 断面M字形。刷毛は
やや粗く、内面には斜
め刷毛が施されるもの
が多い。 | 7 断面扁平台形。丸み
を帯び、蒲鉾状を呈す
ものが含まれる。 | 9 断面扁平。突帯幅が
広く、底面で明確な稜
はもない。また、断
続ナデ技法Aを含む。 |
| 2 断面台形。突帶下辺
は低く、上辺は上方に
向かって尖がる。 | 4 断面扁平M字形。断
続ナデ技法Aを含む。 | 6 断面台形・突帶粘土
貼りつけ後丁寧に横ナ
デを施す。 | 8 断面扁平M字形。突
帯側面は広く凹む。 | 10 断面M字形。高さが
あり、突帶側面には幅
の狭い凹みがみられる。 |

第8図 突帯分類図

た。また、以上の突帯形状に当てはまらないものはその都度新たに突帯形状を設定した。そして突帯形状ごとに分類した後、突帯の胎土・調整・色調から細分を試みた。

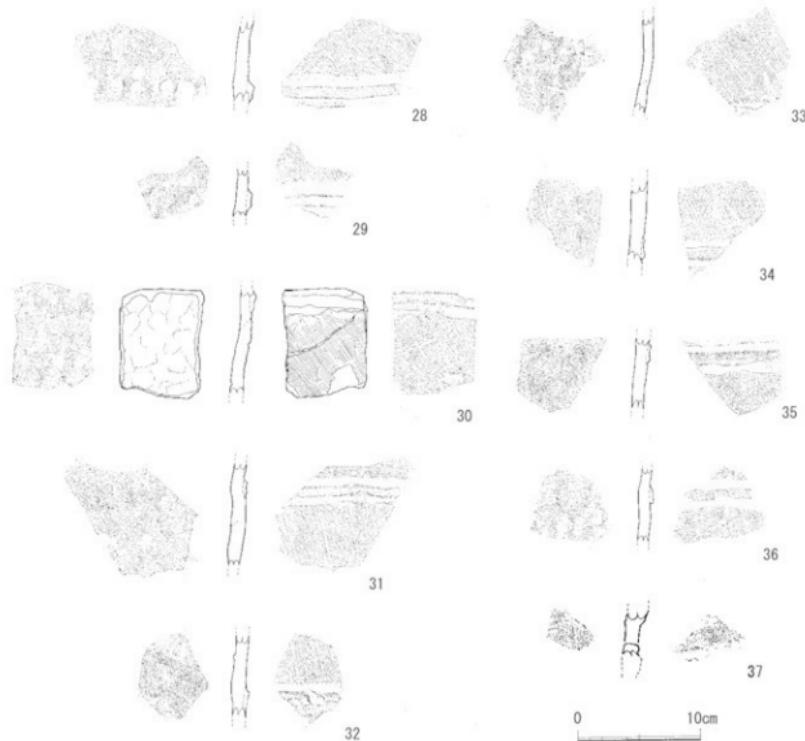
須恵質埴輪

〔突帯1〕(第9図) (報告番号 28~37)

(収蔵資料分類番号 I. 0054)

断面扁平M字形の突帯である。やや突帯下辺に傾いた断面M字形を呈する。

28は突帯幅 2.3cm、高さ 0.6cm前後を測り、胎土は1mm以下の石粒を少量含むものでとても密である。器壁は凸凹しており直直ぐ伸びるものではない。外面は約50度の角度で斜め刷毛が施されており、1cmあたり6・7条のやや太い刷毛が施されている。突帯の上辺に断続ナデ技法Aがみられ、左上がりのナデが細く約1cm間隔で施されている。29は突帯下辺に横ナデとは別に左下方向のナデがみられることから、断続ナデ技法Aが施されている可能性がある。内面には縦・横ナデと突帯裏には強い指頭圧痕が施されている。また、29は突帯の形状・胎土・色調・調整から28と同一個体の可能性をもつものである。



第9図 円筒埴輪実測図4 突帯 (S=1/4)

30～33は、胎土は3mm以下の石粒を含むもので、褐灰色～灰褐色を示すため長石の粒が目立つ。外面は1cmあたり7条の刷毛がみられ、突帯を水平基準に刷毛は65～75度の角度で施されている。また28・29よりも突帯の高さが低い。30の割れ口断面にみられるように、突帯となる粘土紐を貼り付けた後に横ナデにより整形・調整が行われている。横ナデは突帯の上辺から下辺と側片、または逆の手順で施されているため、どちらかに反り返りがみられる。その他、31には円形透かし孔が突帯上辺に切り開かれており、切り取られた断面には反時計周りに石粒の移動がみられる。また、突帶上部には左上がりの擦痕がみられ、断続ナデ技法Aが認められる。30は須恵質埴輪では唯一のヘラ記号がみられる。内面は指頭圧痕とナデが施されており、表面にはナデにより引っ張られた粘土の移動や粘土の塊がみられ、凹凸が激しい。同様の調整が32にもみられる。また、壁面だけで突帯を欠く33は胎土・調整・色調からこの類型に属すと考えられる。

34・35・36は30～33より胎土は細かく、褐灰色にやや赤みが含まれる。外面は斜め刷毛が浅く施されており、1cmあたり5条を測る太い刷毛工具を使用している。突帯は高さ0.3cmを測り、体部とほぼ変わらない。突帯には断続ナデ技法Aは確認していない。34・35の突帯は均一な幅ではなく緩やかな波線状に横ナデ調整が施されている。この突帯は後述する断続ナデ技法Aをもつ硬質土師質埴輪で突帯断面扁平M字形を呈す〔突帯3〕と同様の突帯形状を示すことや、突帯の表面の凸凹等の特徴が近似することから断続ナデ技法Aを作ったものかも知れない。内面は縦ナデ調整を施してきれいに仕上げている。

36は胎土に2mm以下の石英と長石を大量に含んだ粗い粘土である。外面は浅く斜め刷毛が施されており、1cmあたり14～16条のとても細かい刷毛工具が用いられている。突帯は側辺の下端に粘土の垂れがみられることから、横ナデ調整は下辺を最初に行い上辺と側辺を最後に行ったため、押し伸ばされた粘土が下端に垂れたものと考えられる。また、断続ナデ技法は確認していない。突帯には歪みはみられず水平に整形・横ナデ調整されている。内面には無数の指頭圧痕が施されている。36は他の須恵質埴輪に比べると胎土と調整が異なる様相を示す。

37は突帯を欠損したので破片の上部には透かし孔が切り開かれている。透かし孔は指頭圧痕により調整されており、指紋を残す。一部突帯が残っており低い突帯になると考えられるが断面形状は不明である。

硬質 土師質埴輪

〔突帯2〕(第10図)(報告番号38～45)

(収蔵資料分類番号I.0054)

突帯断面台形を呈するものである。突帯は高さ0.8cm前後を測り、上端よりも下端が低い台形状を示し、若干に突帯中央が凹みM字形状を示すものも含む。色調は灰褐色やにぶい橙色等を示し、細かい石粒を含む胎土で非常に硬質な焼き上がりである。外面は1cmあたり約10条を測る斜め刷毛が施され、一次調整に止まる。突帯の側辺の下端には、側辺を横ナデした際に押し出された粘土の垂れがしばしばみられる。その他、43以外の突帯の下辺に、一定間隔に爪を突き刺し、または挿いたような痕が突帯と並行にみられる。この爪状の痕は他の類型にはみられず、同一個体の可能性を示すものであり、当類型の特徴でもある。内面は主に縦ナデが施されており、42には斜めナデも施されている。また、44は断面形状が突帯上辺に偏った三角形を示しているが、実際には断面台形を示すもので、横ナデ調整の際に下辺を強くナデしたことによる形状の変化である。

〔突帯3〕(第10図)(報告番号46)

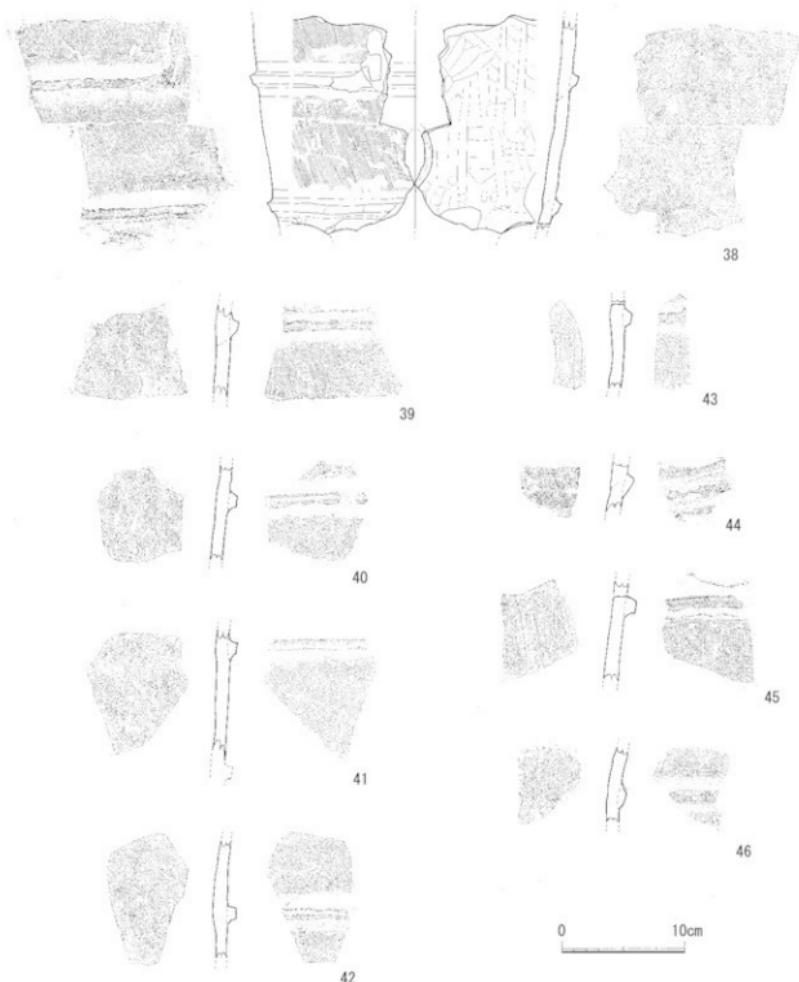
(収蔵資料分類番号I.0054)

断面扁平台形を呈するもので46のみ確認している。外面は1cmあたり11条の斜め刷毛が施され内面は縦ナデが施される。胎土は粗く長石が目立つ。

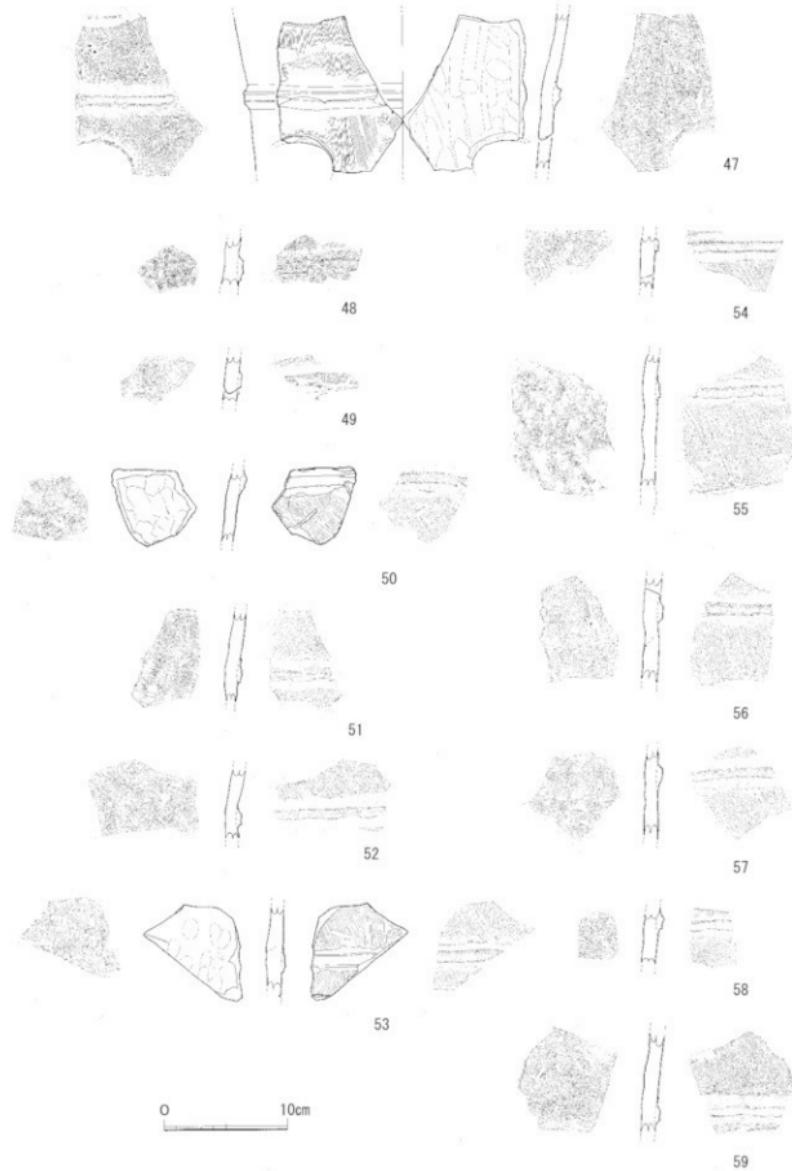
〔突帯4〕(第11・12図) (報告番号47-63)

(収蔵資料分類番号I.0054)

突帯断面扁平M字形を呈するものである。胎土、調整、色調から5つに細分される。47の胎土は2mm以下の石粒を多く含み、やや粗い粘土である。色調はにぶい赤褐色を示す。外面は1cmあたり12条を測る細かい縦・斜め刷毛が施されている。突帯は上下辺、側辺に横ナデ調整が施され、粘土の接合面をきれいに消す。内面には指1本分の間隔を空けて縦ナデが施されている。同じ胎土・色調と細か



第10図 円筒埴輪実測図5 突帯 (S=1/4)



第11図 円筒埴輪実測図6 突帯 (S=1/4)

い刷毛を施すものは 47 と体部片の I.0054-73 の 2 例のみ確認している。

48・49・50 は、刷毛は 1 cmあたり 7・8 条の斜め刷毛を施す。二次調整はみられない。突帯の調整は下辺に施した後、最後に上辺または側辺のみを施している。器壁はやや歪みがみられ、突帯の粘土接合部分の調整があまい。内面はいずれも縦方向のナデが施される。胎土に含まれる石粒の量や色調、突帯の高さ等から 48・49 はヘラ記号をもつ 50 とは異にする。

51・52・53 は 1 mm以下の石粒を含む胎土で、硬質に焼き上げられている。灰褐色からにぶい橙色を示す。外面は縦・斜め方向の刷毛が入り混じり、横ナデも施されている。突帯はいずれも下辺の後に、上辺と側辺を同時に調整を施している。この内 53 は外面にヘラ記号をもつものである。

54~59 の断面形状は 51・52・53 と同様であるが、外面調整が斜め刷毛調整に限られる点や全体的に色調に赤色または橙色を帯びてくる部分で分けられる。55・56 には突帯上部に左上がりの細い擦痕がみられることから、断続ナデ技法 A と判断できる。また 55 は突帯を 2 段残すもので、突帯間の幅を確認できる数少ない資料である。下段の突帯は欠損しているが突帯貼付後の横ナデ調整を残すもので、その上には左上がりの擦痕を確認でき、2 段にわたって断続ナデ技法 A を施していることが分かる。その他は突帯より上辺が失われており、擦痕のようなものが残るが確定できるものではない。内面からは強いナデ調整により粘土に凸凹がみられるものと、滑らかに施すものが混在する。以上から外面に断続ナデ技法 A を施し、内面に凸凹の面をもつ 55・56 と 57・58・59 に分けることが可能である。また、54 は内面に凸凹の面をもつが突帯の低さや色調の違い、断続ナデ技法 A が確認できないことから、他のものと細かい点で異にする。

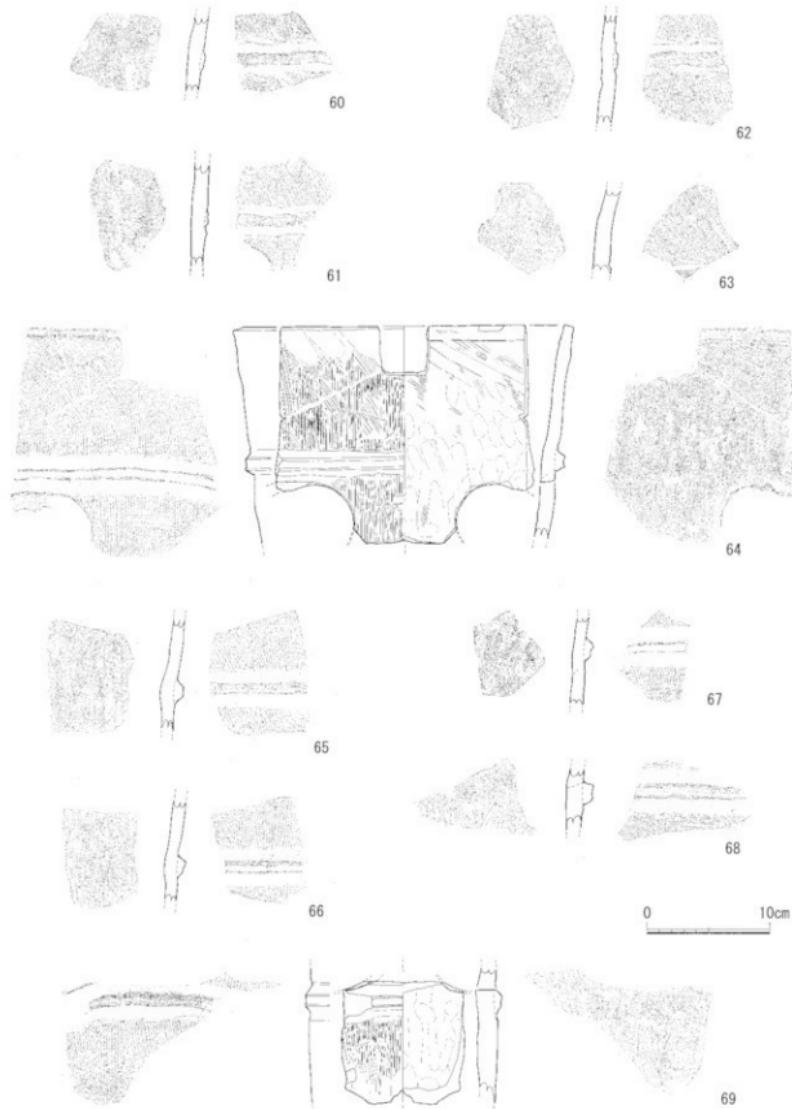
60~63 の胎土は 2 ~ 3 mm以下の石英と長石を少量含む粘土で構成され、硬質に焼き上げられているが、色調はにぶい橙が強くなる。また、外面の斜め刷毛は 1 cmあたり 4・5 条の太い幅のもので浅く施されている。突帯には顕著に左上がりの擦痕が観察でき、断続ナデ技法 A を伴う。61 のみ突帯上辺に擦痕がみられないが、圧痕・擦痕がみられないものでも断面ナデ技法 A の観察より、同一位置で突帯の上辺・下辺にへこみや団子状の膨らみがみられ、一定間隔で凸凹がみられるという（註1）。本古墳からは一定間隔でみられるほどの残存状況のよいものではないが、断続ナデ技法 A のあるものを観察すると、横ナデ調整によって消えてしまった左上がりの擦痕の開始部分と思われるあたりに粘土の盛り上がりがみられる。また、歪ではあるが同一位置に上辺と下辺にへこみがみられ、緩やかに長く突帯の幅は団子状に膨らむ。以上より 61 も断続ナデ技法 A が施されている可能性がある。また、突帯を欠く体部片 I.0054-96 は胎土・調整・色調に加え断続ナデ技法 A みられることから当類型に属すと考えられる。

〔突帯 5〕（第 12 図）（報告番号 64~69）

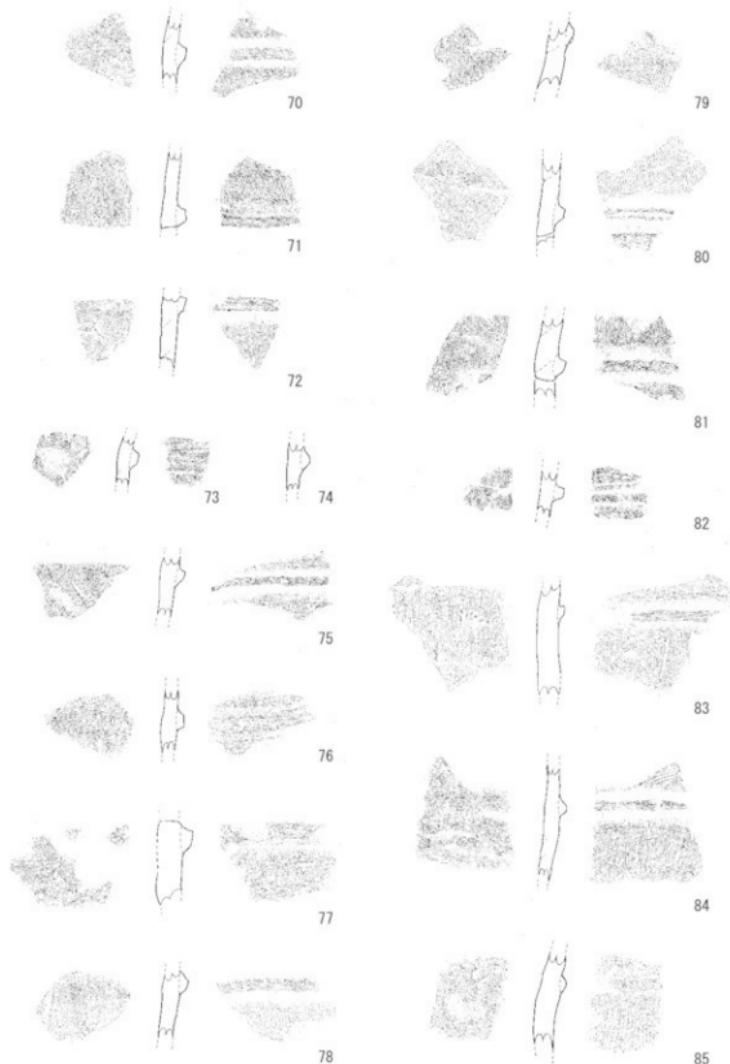
（収蔵資料分類番号 I.0054）

断面形状は突帯下辺が下がる M 字型を呈す。胎土は 3 mm以下の石粒を少量に含み、色調は橙色を中心的ににぶい赤褐色・灰褐色・明褐色を示し、表面と粘土内部でも色調が異なってくる。全体的に硬質ではあるが、色調から土師質的印象を受ける。64~67 は調整は外面に 1 cmあたり 5 条の幅の太い縦・斜め刷毛が深く重複して施されている。二次調整は確認できない。突帯は横ナデ調整の際に、上辺と下辺を強く押しナデしているため、突帯粘土の接合面は窪む。更に側面にも強いナデを加えるため突帯側辺は M 字型になり、突帯を貼り付けた器壁も内側に押し込められて窪む。突帯は幅 2 cm前後、高さ約 0.8 cmを測るもので高さが際立つ突帯である。内面には外面に使用された工具を用いて斜め刷毛が施されており、その後、指一本分の間隔を空けて縦ナデが施されている。67 は横刷毛は確認できないが縦ナデが施されている。本類型は比較的残りがよく、直立に立ち上がる口縁部をもつ形態であると考えられる。また、同様の特徴から 64~67 は同一個体の可能性をもつ。

68 の突帯は断面 M 字形を呈すが、突帯の調整に違いがみられる。突帯となる粘土紐を貼り付けた



第12図 円筒埴輪実測図7 突帯 (S=1/4)



0 10cm

第13図 円筒埴輪実測図8 突帯 (S=1/4)

後、突帯下辺に横ナデを施している。その後、上辺と側辺の粘土を指で挟み同時に横ナデ調整を加えている。そのため突帯の上辺はほぼ水平になり頂部はやや突出し、下辺には側辺のナデによって押し出された粘土が下方へ垂れる。また、外面には1cmあたり10条の細かな斜め刷毛が施され、突帯を貼り付けた後、二次調整としてB種横刷毛を施している。横刷毛は水平に施されているが上下の歪みは大きい。また、明瞭な工具の静止痕がみられ、何度も区切りをつけて施している。色調ははぶい橙色を呈し、胎土は1mm以下の石粒を含み、非常に硬質な焼き上がりとなっている。

69は調整・色調から別の個体であることが言える。その他、本類型と同様の調整を施す突帯を欠いた体部片が数個みられ、いくつかは本類型に属するものと思われるが、軟質土師質埴輪〔突帯10〕と同様の特徴を示すものもあり識別は難しい。

軟質 土師質埴輪

〔突帯6〕(第13図)(報告番号70~85)

(収蔵資料分類番号I.0054)

突帯下辺が低い断面台形を呈すもので、若干突帯側面が窪みM字形に似通うものもある。外面の刷毛は1cmあたり5条から10条みられバラつきがある。突帯貼付後の横ナデ調整により接合面を消すものが多い。

調整はいずれも下辺を横ナデした後、上辺から側辺へ、または同時に横ナデを施す。横ナデ調整はきれいに突帯粘土の接合面をナデにより消しているが若干突帯下辺のナデがあまいものもみられる。突帯は0.6cm~1.0cmを測る。基本的に胎土は2mm以下の石粒を含む軟質な焼き上がりをみせるが、3mm以下の石粒を多量に含む77や、同じく3mm以下の石粒を含む胎土に比較的硬質で外面の刷毛が1cmあたり5条の太く深く施されている78のように違いが際立つものがある。

79・80・81は肉厚な器壁をもつもので、底部付近のものと考えられる。80・81は突帯下に透かし孔をもつ。1cmあたり6条の縦・斜め刷毛が施され、突帯貼付後の横ナデ調整の幅が広く、粘土の接合をきれいに消す。内面は製作時の粘土紐の接合痕が顯著にみられ、3cm間隔で確認できる。また、細かな胎土や灰色を基本に黄色を含む色調が共通することから同一のグループもしくは同一個体の可能性をもつ。

82~85は突帯の幅が狭く、やや低い突帯をもつものである。しかし、いずれも突帯上部が上方に突出するという点で、台形突帯から単に突帯が低くなった扁平台形とは異なる。この突帯形状は突帯となる粘土紐が細いことや、横ナデ調整の際にあまり壁面に強く押してナデないことから上下に広がらず、また、突帯の上辺と側辺を指で挟みながら横ナデ調整を施したために上方へ突出する形状になっている。84は外面調整が縦刷毛後に左下から右上方向のかなり角度の緩い刷毛が施されている。横刷毛のようにもみえるが二次調整のものとは判断できない。85は細い粘土紐に強い横ナデを加えたため83の形状よりも変形し、扁平な三角形になっている。

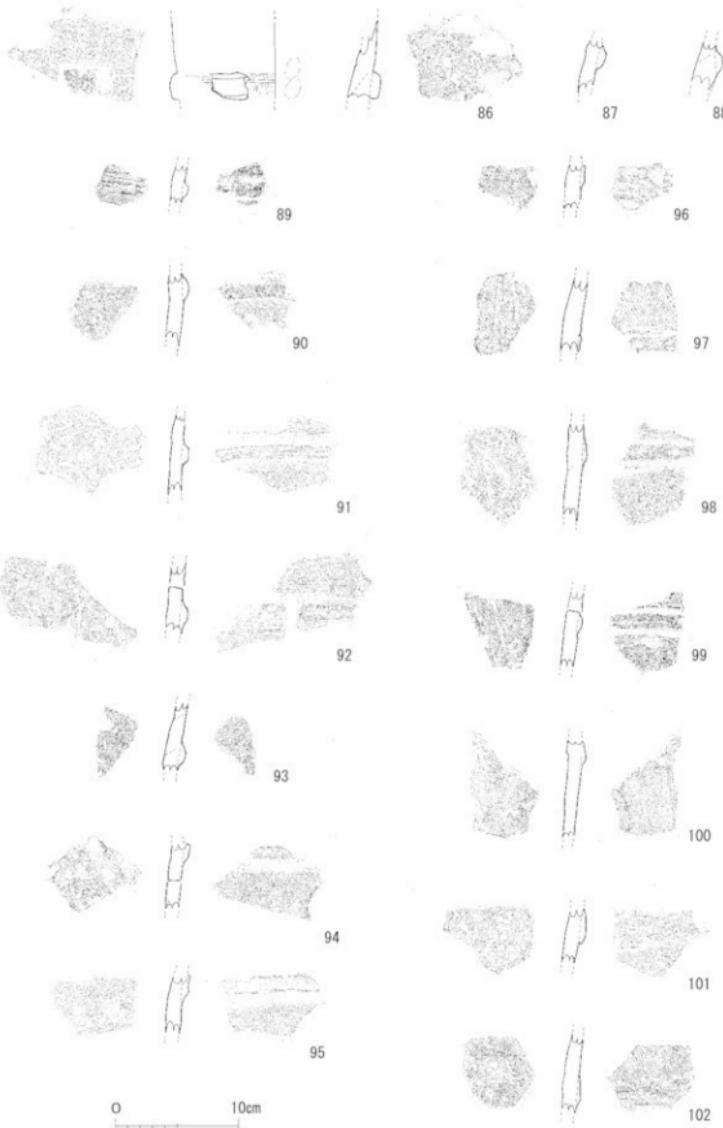
〔突帯7〕(第14図)(報告番号86~94)

(収蔵資料分類番号I.0054)

扁平な台形を基本とする。この内86~89のように台形を基本とするが、丸みを帯び、蒲鉾状の突帯を示し、調整についても突帯貼付後の横ナデがあまく接合痕を残すものと、90~94のようにしつかりした扁平台形に、突帯貼付後の横ナデを丁寧に施し、接合痕を消すものの2種に分けることができる。また、B種横刷毛をもつ92はこの類型に属す。

86~89は突帯調整の横ナデが突帯上辺と側辺に施すもので、下辺には横ナデを殆ど加えないため、突帯形状が丸みを帯びた台形を示す。86は突帯裏の器壁には突帯貼付時の目印線が確認できる。調整は89の内面に横刷毛が観察できるのみで87・88を含めいずれも摩滅が激しい。

90~94は突帯高さが0.6cmを測る断面扁平台形を示し、やや突帯中央が窪むM字形も含む。外面



第14図 円筒埴輪実測図9 突帯 (S=1/4)



第15図 円筒埴輪実測図10 突帯

は1cmあたり9条前後の斜め刷毛が施されており、色調は橙色を中心とする。2mm以下の石粒を少量含む胎土で、焼成は軟質である。突帯については90・93は摩滅しているため調整の観察が難しいが、他は下辺に横ナデした後、上辺と側辺に横ナデを加えている。突帯粘土の接合面も横ナデ調整により、丁寧に仕上げられている。内面は縦刷毛もしくは斜め刷毛が施される。

〔突帯8〕(第14図)(報告番号95)

(収蔵資料分類番号I.0054)

突帯はM字形を呈すもので、95のみ確認している。胎土は3mm以下の石粒を含む粗い粘土で色調は内外面ともに2.5YR6/6の橙色を示す。突帯は上辺と下辺に横ナデ調整を加え、最後に側辺に単独で横ナデを施したため、突帶上幅は広くなり、側辺の上下端には明確な稜がついたものと考えられる。突帯貼付後の横ナデ調整は丁寧に施される。

〔突帯9〕(第14・15図)(報告番号96~103)

(収蔵資料分類番号I.0054)

突帯は断面扁平を呈す突帯で、やや突帯側辺が凹むものも含む。

96~99は突帯となる粘土紐を貼り付けた後、横ナデ調整を施すが、摩滅が激しく調整の順序は不明である。胎土に含まれる石粒の大きさ、量、焼き上がりがそれぞれ異なり、4片とも別個体である。97には土師質埴輪で唯一断続ナデ技法Aが確認できた。99にも左上がりの擦痕のようなものがみられるが、上部欠損のため不確かである。

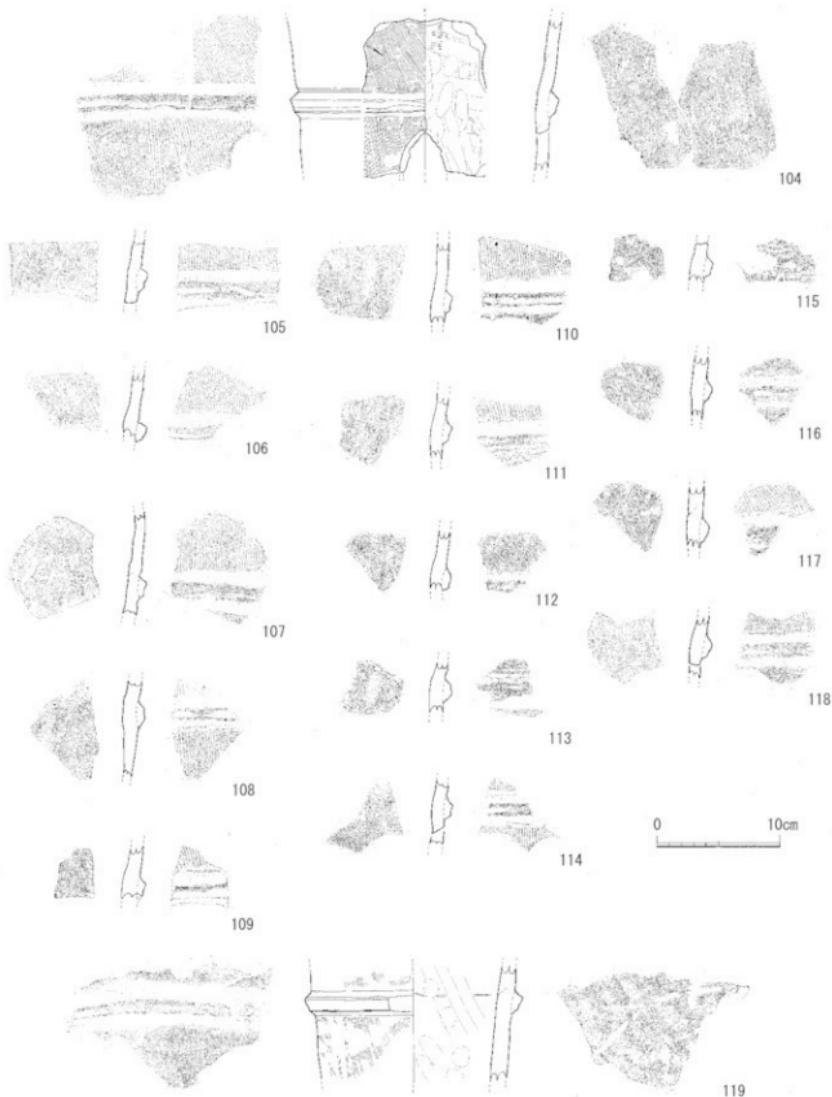
100~103は突帯の粘土紐を貼り付けた後、突帯の形状を整えずに側辺を中心に横ナデ調整が加えられたため、或いは突帯となる粘土紐自身が最初から薄く幅の広い形状であったため、幅の広い突帯になったとも考えられる。そのため突帯の上下幅が不明瞭である。断面を観察すると、横ナデ調整は厳密には上から下へ力を加えながら側辺をナデつけているため、突帯の上辺は粘土の接合面はきれいに消されている。上辺に対して下辺は突帯の幅を修正するに止め、粘土の接合面まで消すまでの調整は行われない。100以外は突帯幅が3cm前後を示す。

〔突帯10〕(第16図)(報告番号104~119)

(収蔵資料分類番号I.0054)

突帯断面M字形突帯を呈すものである。硬質土師質埴輪〔突帯5〕と特徴が近似する。単に焼成と色調の違いにより分けられるものではなく、突帯形状や調整の細かい部分で違いがみられる。また本類型は胎土・調整から更に2つに細分される。

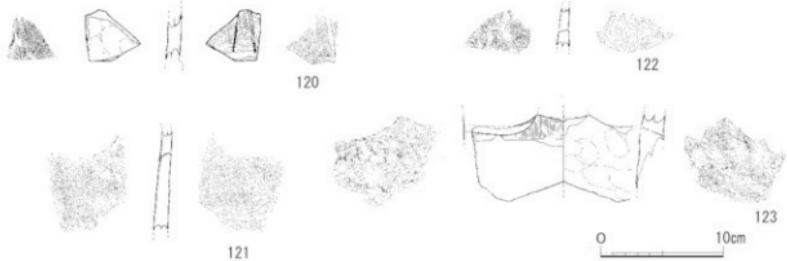
104~118の胎土は2mm以下の石粒を少量含むもので、色調は橙色を中心にぶい橙・浅黄橙・明黄褐色等黄色が強くなる。外面と器壁内部もほぼ同じ色調を示し、軟質な焼き上がりである。そのため、多々表面の調整や突帯の摩滅がみられる。外面は1cmあたり5・6条と幅の太い縦・斜め刷毛が深く施されている。いくつか刷毛の重複がみられるが、縦方向と斜め方向が重なるようなものはあまりみられない。また、一次調整のみで二次調整はみられない。突帯は下辺が低い断面M字形であるが、丸みが強く明確な稜はもたない。調整時の横ナデの際、上辺はしっかりナデつけるが下辺はあく、



第16図 円筒埴輪実測図11 突帯 (S=1/4)

突帯の粘土接合部分が観察でき、しばしば一次調整の縦・斜め刷毛がみえる。また、突帯は貼り付けに強い力を加えるため器壁は内側に窪んでいる。内面は斜め刷毛の後は主に縦ナデを施している。

119 の胎土は3mm以下の石英、長石を多量に含むもので、外面の刷毛が1cmあたり8条を測るもので104~118とは異なる。やや上辺の突出が強くみられる。突帯の下辺に横ナデを施した後に、上辺と側辺を指で挟みながら横ナデを施したためにできたものと考えられる。また、上辺には高く上幅を広く設けることや、突帯貼付時につく器壁の凹みがみられないなど細かい部分で違いがみられる。



第17図 円筒埴輪実測図12 体部 (S=1/4)

(収蔵資料分類番号 I. 0054)

その他の円筒埴輪片 (第17図参照) (報告番号 120~123)

120はヘラ記号をもつ埴輪片である。121・122・123は円形透かし孔をもつ。121は外面は1cmあたり12条の斜め刷毛が施され、内面は指頭圧痕と斜め刷毛が施される。色調はにぶい橙色を示すもので軟質土師質埴輪に分けられるが、焼成は良く比較的硬質である。123は1cmあたり6条の縦刷毛が施されており、縦刷毛の下に横ナデがみられるることから突帯を貼り付けた際にいた調整の痕跡と考えられる。透かし孔には切り取りの際につけられた石粒の移動が顕著にみられる。器壁が厚く底部付近の破片であると考えられる。

各分類から見出せる特徴

口縁部・突帯・基底部の分類として焼成から大別し、各形状に分けて胎土・調整・色調等の項目により細分類を行った。以下、口縁部は7類型、基底部は5類型、突帯は10類型に分けた。以下、各部位ごとに分類により抽出された特徴を示す。

口縁部の形態は直立もしくは直立気味なものが主である。その中で口縁部が開くものや口縁部に折れをもつも含み、直立する口縁部形態から逸脱するものがみられる。口縁部の調整は基本的にあまり、縦・斜め刷毛が残るものが殆どである。内面調整では、刷毛を施すものは〔口縁部1〕と〔口縁部2〕にのみ確認でき、他は指頭圧痕やナデ調整が主である。突帯は台形とM字形を中心にみられ、ともに突帯下辺が下がり、傾いた形状を示す。突帯は基本的に、粘土紐を器壁に貼り付け横ナデを施すものが主であるが、数例ほど断続ナデ技法Aが確認できる。また、断続ナデ技法B(無調整突帯)は確認できなかったが、採集されたものはほんの一端であるため、無調整突帯が含まれていた可能性は捨てきれない。基底部は形態別にみれば底部が窄まるものと、厚さに変化がないものと、肉厚な底部を持つものの3つに分けることができる。いずれも自身の重みに底部が潰れないように、または修正として内面の底部端に指頭圧痕を施している。この内〔基底部5〕のように厚い底部は自重によりつぶれやすいためか底面に刷毛や、横ナデを施してきれいに均している。焼成別にみた場合、調整に差異がみられ須恵質埴輪に限り、数例であるが非常に細かい刷毛を施すものがある、土師質埴輪にはみられない調整であり特異なものと言える。

各部位ごとの関係については、推測するまでのモデルがないため、相関関係の推測は難しい。須恵

質埴輪を例にあげれば直立気味の口縁部〔口縁部1〕に扁平M字形突帯の〔突帯1〕、底部の窄まる〔基底部1〕という構成が考えられるが、突帯片に比べ口縁部と基底部片が少なく、実際には複数の組み合わせが存在したことが想定される。硬質・軟質土師質埴輪では、分類から硬質土師質埴輪は〔口縁部2～5〕・〔突帯2～5〕・〔基底部3〕から、軟質土師質埴輪は〔口縁部6・7〕・〔突帯6～10〕・〔基底部2・4・5〕からの組み合わせが考えられるが各部位の分類を組み込み、相関関係を示すまでには至らなかった。しかしながら、今回確認できた埴輪のうち、B種横刷毛や断続ナデ技法のように新古の要素を伝える特殊なものがみられることから、各部位の調整技法も合わせてこれらの調整技法を施す一群を想定できるかもしれない。

	焼成	口縁部形状	口縁部調整	内面調整	色調	掲載番号
口縁部1	須恵質	直立気味	端部は横ナデにより凹む	外面は斜め刷毛、内面は横刷毛・指頭圧痕・ナデ	灰褐色	1～3
口縁部2	硬質	直立気味・端部は外に傾く	外面に強いナデ	外面は外面は縦・斜め刷毛、内面は斜め刷毛・ナデ	にぶい橙色	64
口縁部3	硬質	直立・端面は水平	弱い横ナデ	外面は斜め刷毛、内面は斜めナデ	橙色～にぶい赤褐色	4
口縁部4	硬質	直立気味、端面は水平・凹み	刷毛を打ち消すほどの横ナデ	外面は斜め刷毛、内面は指頭圧痕・ナデ	にぶい赤褐色を中心とする	5～8
口縁部5	硬質	外反、端部突出・端面は凹む	刷毛を打ち消すほどの横ナデ	外面は斜め刷毛、内面は指頭圧痕・斜めナデ	にぶい赤褐色	9
口縁部6	軟質	直立気味、内面は反り気味、端面は水平・凹み	強・弱横ナデ	外面は斜め刷毛、内面は指頭圧痕・ナデ	橙色を中心とする	10～14
口縁部7	軟質	外反・折れ	刷毛を打ち消すほどの横ナデ	外面は斜め刷毛、内面は指頭圧痕・ナデ	橙色	15

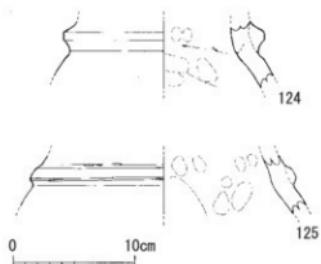
	焼成	突帯形状	調整(特徴的なもの)	断続ナデ技法A	色調	掲載番号
突帯1	須恵質	扁平M字形	外面は斜め刷毛、内面は指頭圧痕・縦・横ナデ	断続ナデ技法Aを含む	褐灰色～灰褐色	28～37
突帯2	硬質	台形	外面は斜め刷毛、内面指頭圧痕、縦・横ナデ、内面は指頭圧痕・縦・横・斜めナデ	突帯下に爪状の痕跡	灰褐色～にぶい橙色等	38～45
突帯3	硬質	扁平台形	外面は斜め刷毛、内面は指頭圧痕、縦ナデ、ヘラ削り		灰褐色、にぶい赤褐色	46
突帯4	硬質	扁平M字形	外面は斜め刷毛、縦・斜め刷毛、内面は指頭圧痕、縦・横・斜めナデ、ヘラ削り	断続ナデ技法Aを含む	にぶい赤褐色、灰褐色、橙色等	47～63
突帯5	硬質	M字形	外面は縦・斜め刷毛、内面は指頭圧痕、横・斜め刷毛、縦・横ナデ	B種横刷毛を含む	橙色を中心とする	64～69
突帯6	軟質	台形	外面は縦刷毛、斜め刷毛、縦・斜め刷毛、内面は指頭圧痕、斜めナデ、横刷毛		橙色を中心とする	70～85
突帯7	軟質	扁平台形	外面は縦刷毛、斜め刷毛、内面は指頭圧痕、縦ナデ	B種横刷毛を含む	橙色を中心とする	86～91
突帯8	軟質	M字形	外面は斜め刷毛、内面は指頭圧痕、ナデ		橙色	95
突帯9	軟質	扁平形	外面は斜め刷毛、縦・斜め刷毛、内面は指頭圧痕、刷毛、縦ナデ	断続ナデ技法Aを含む	橙色を中心とする	96～103
突帯10	軟質	扁平M字形	外面は縦・斜め刷毛、内面は指頭圧痕、横・斜め刷毛、縦・横・斜めナデ		橙色を中心とする	104～119

	焼成	基底部形状	外面調整	内面調整	色調	掲載番号
基底部1	須恵質	細く窄まる	ナデ(板ナデか)	内面に細かい指頭圧痕	灰褐色～にぶい褐色	16
基底部2	軟質	器壁は薄く内折する	指頭圧痕、ナデ	底部に指頭圧痕	にぶい橙色	17
基底部3	硬質	細く窄まる	斜め刷毛、ナデ	内面・底面に指頭圧痕	にぶい褐色	18～20
基底部4	軟質	厚さに変化なし	縦刷毛、ナデ、指頭圧痕	内面に指頭圧痕	橙色を中心とする	21～24
基底部5	軟質	厚い底部	縦刷毛、指頭圧痕	内面に指頭圧痕、底面に刷毛・ナデ	にぶい橙色・にぶい褐色	25～27

第4表 各部位別分類表

朝顔形埴輪（第18図）（報告番号124・125）

(収蔵資料分類番号I.0054)



第18図 朝顔形埴輪 (S=1/4)

朝顔形埴輪は2点確認している。いずれも括れ部で両者は別個体である。124は器壁が厚く括れ部に台形に突帯を貼り付けている。外面は横ナデ調整が施され、突帯の形を均一に整えている。突帯貼付後の横ナデ調整も丁寧に施され、粘土の接合痕はきれいに消されている。内面は摩滅しているが粘土の接合痕と指頭圧痕が観察できる。胎土は細かい石粒を含み橙色を示す。125は摩滅が激しく内外面ともに調整は不明である。124と同じく括れ部に突帯を巡らしているが、突帯形状は扁平台形を呈し、突帯端部は丸みがかかる。突帯貼付後の横ナデ調整が甘く、突带上辺は粘土の接合痕がみえる。また、傾きもやや緩い。胎土は粗い石粒を含み、浅黄橙色を示す。括れ部径は約20cm前後を計る。

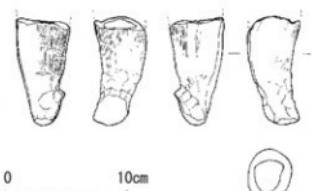
人物埴輪（第19・20図）

5片を数える。いずれも墳丘の頂部から出土・表採とされている。そのため個体数も不明であるが、胎土、焼成、調整、割れ口の観察より、126～129と130の2個体に分けられる。

人物埴輪1（第20図）（報告番号126～129）

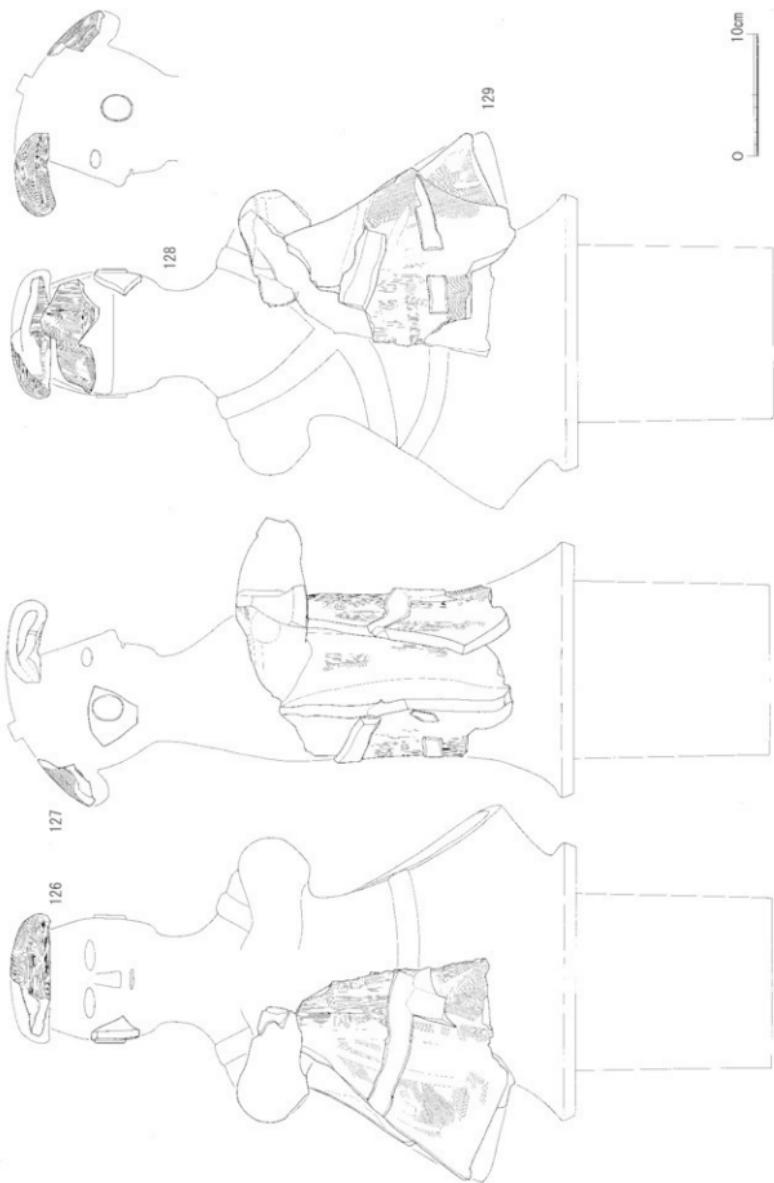
(収蔵分類番号I.0055)

126・127は頭部である。126は頭部前面の髪部であり、断面より一枚の粘土を折り曲げて作られている。髪部は顔よりも前面にやや垂れ下がり気味で突出するものと考えられる。調整は細かい縦・横刷毛が施され、内側にも一部刷毛が及ぶ。127は126に続くもので後頭部付近に位置するものと考えられる。調整は外面に細かい縦・横刷毛を施すもので、断面より後頭部の端部が曲がることから、126と同じく一枚の粘土を折り曲げて作っていたものと考えられる。また、両者とも髪の側面に、薄い板状の道具を引き抜いた痕跡が確認できる。これは、髪を折り曲げる際に板状の道具を挟み折り曲げた、もしくは折り曲げた後に調整として孔を穿ったと考えられ、いずれも結った髪の膨らみを表現するために用いたものと考えられる。128は耳部と考えられる。器壁に薄い楕円形の粘土を貼り付けたもので、ナデ調整が施され、耳を簡素に表現している。129は体部であり、腕から腰辺りまでの右半分が残存している。埴輪は袈裟状衣をまとい、腰に巡らした横帯を前で結び留める。この袈裟状衣の右端には、鱗状部が確認できることから、欠損している左側には袋状部が付くものと推測できる(註2)。背面には左肩から右腰にかけて帶状の粘土が貼り付けられている。両肩を巡り背面で交差する襷を表しているものと考えられるが、残存している右脇下に帶状の粘土は確認できない。襷から露出した腕は水平に上げられ、肘を曲げ胸の前面にくる。調整は袈裟状衣外面は粗い縦・横・斜め方向の刷毛、内面は指頭圧痕と斜め方向のナデが観察できる。また、腕部は指頭圧痕・ナデが施され、内面は指頭圧痕とナデ、粘土接合痕が観察できる。焼成は非常に硬質で、7.5YR5/2の灰褐色から2.5YR6/3のにぶい橙色を示す須恵質埴輪である。復元より頭部は髪を折り曲げ、底のように突出させ頭部の中程で結う、所謂古墳島田の髪型に袈裟状衣をまとった姿に本来は袈裟状衣の下にはスカート状下衣、その下に円筒形



第19図 人物埴輪 腕または脚 (S=1/4)

第20圖 人物埴輪 復元圖 (S-1/4)



器台部がついた巫女埴輪であると考えられる。

人物埴輪2（第19図）（報告番号）

（収蔵資料番号I.0057-5）

130は腕部もしくは脚部であると考えられる。指先は欠損しており、調整もところどころ摩滅している。外面は細かい刷毛が施され、内面には指頭圧痕が良く残る。焼成は軟質である。細かい刷毛調整と内面の指頭圧痕調整が括れ付近まで施されている点より、須恵質埴輪の腕部と作り方は異なる。

家形埴輪（第21・22図）

2個体分の家形埴輪を確認している。1つは入母屋造であり、屋根の破片のみ残存する。もう一つは家形埴輪の基部である。前者は131～134であり、にぶい赤褐色から橙色を示し、非常に硬質で須恵質に近く調整もよく残る。後者は135でありにぶい橙色を示す軟質な埴輪で、屋根部を欠損する。また、同一個体と思われる破片がいくつか確認できる。

家形埴輪1（第21図）（報告番号131～134）

（収蔵資料分類番号I.0057）

131は上屋根の破風板部である。幅約4.0cm、厚さ0.8～1.5cmを測る。内外面とも指頭圧痕とナデが施され、破風の端部は横ナデにより整えられている。屋根との接合面には剥離したために、斜め刷毛がプリントされている。また、破風の器壁には一片約5mmの方形透かし孔が水平もしくはや上方から穿たれており、134と同じ工具を使用したものと考えられる。132は134と同じ上屋根の一部である。妻側の屋根の据部であり、埴輪の傾きや屋根のカーブより、上屋根の頂部、やや左側の破片であると考えられる。外面は斜め刷毛が施され、破風板を取り付けた痕跡を残す。133は下屋根の寄棟造の一部である。屋根の隅棟にあたり、隅棟の棟と屋根據部を欠損している。外面は斜め刷毛が施され、内面は指頭圧痕とナデ、粘土接合痕が観察できる。また、屋根據部の欠損により、屋根の内面で、棟木にあたる部分が露出しており、本来は屋根との接合で隠れてしまう部分であるが、製作過程の横刷毛調整が観察できる。その他、家の壁面と屋根との接合面には、刷毛の痕が残っており、縦刷毛を施した壁面が存在していたことがわかる。下屋根は上屋根を支え、壁面と接する他、全体の中腹にあたるため、器壁は厚くしっかりした造りである。134は上屋根の切妻造の一部である。上屋根は外に向かい斜め上方へ伸びる。外面は刷毛調整が施された後、下屋根と上屋根の接合付近には、平側から縦5mm、横4mmの方形の穿孔が穿たれ、合掌部の前面に工具痕を残す。内面は指頭圧痕とナデにより丁寧に調整され、妻側には径約12cmの円形の透かし孔が穿たれている。また妻側の屋根端には破風板が取り付けられていた痕跡が残る。破片の底部には上屋根と下屋根の接合痕が観察できる。

家形埴輪2（第22図）（報告番号135）

（収蔵資料分類番号I.0056）

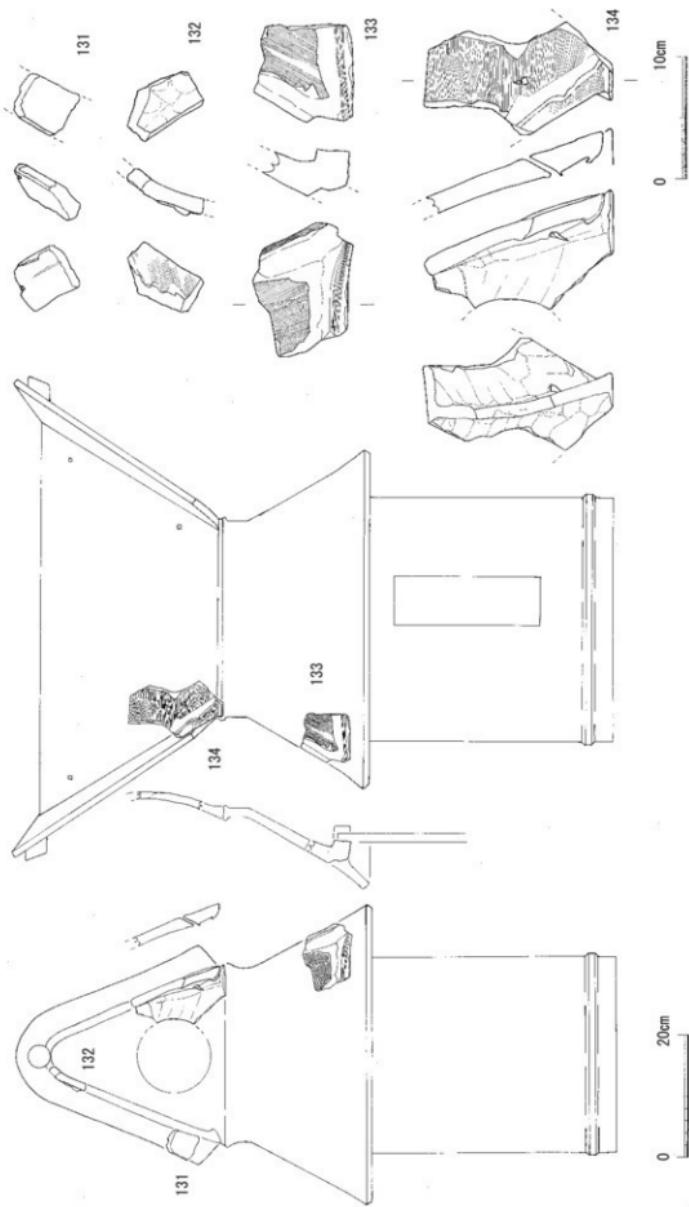
135は家形埴輪の基部である。縦約38.0cm、横約31.0cmを測る。外面は縦刷毛、または斜め刷毛が施され、内部は底部に強い指頭圧痕と斜め方向のナデが施されている。器壁は、基部は厚く上部に向かうほど薄くなり内傾する。両長側辺には、中央やや右側、底部から約12.5cmの地点に縦5cm以上、横7.8cmの窓を表現したと考えられる方形透かし孔が切り開かれている。短側辺には透かし孔は確認できない。底部より約3cm上部には幅1.0cmの突帯がめぐる。内面は指頭圧痕と斜め方向のナデが施されている。

家形埴輪片（第23図）（報告番号136～148）

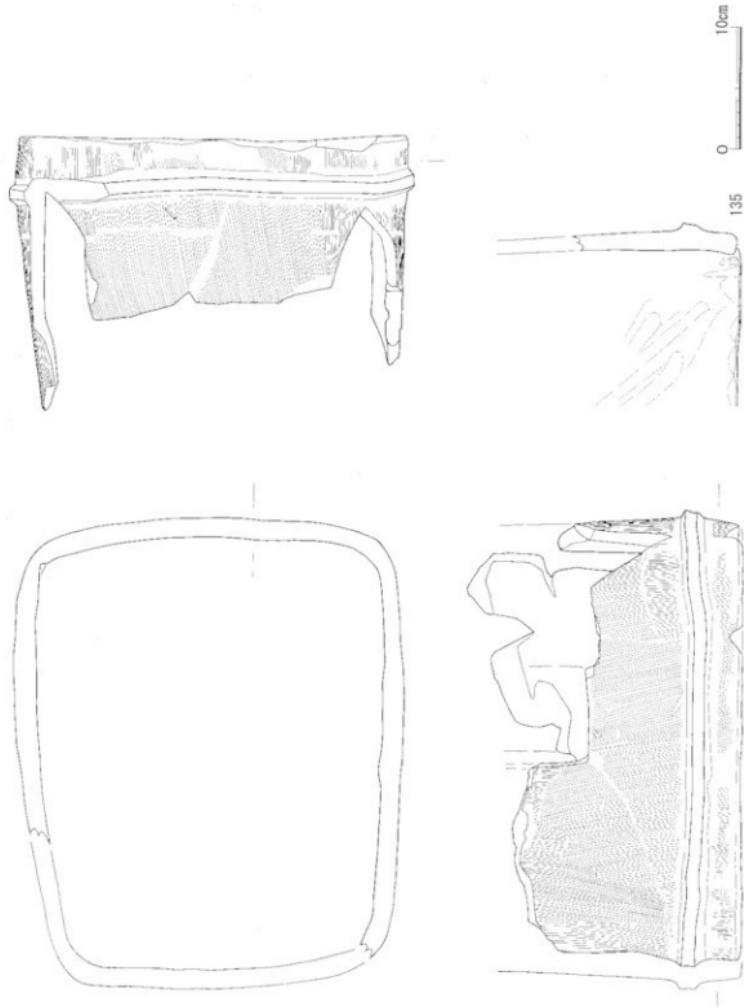
（収蔵資料分類番号I.0057）

136～141は家形埴輪の壁面の破片と考えられる。この内141以外は方形と考えられる透かし孔の一辺が確認できる。いずれも外面は縦刷毛もしくは斜め刷毛が施され、内面には指頭圧痕や斜めナデ

第21圖 家形埴輪 復元圖・實測圖 (復元圖 S=1/8・實測圖 S=1/4)



第22図 家形埴輪 基部 (3:1/4)

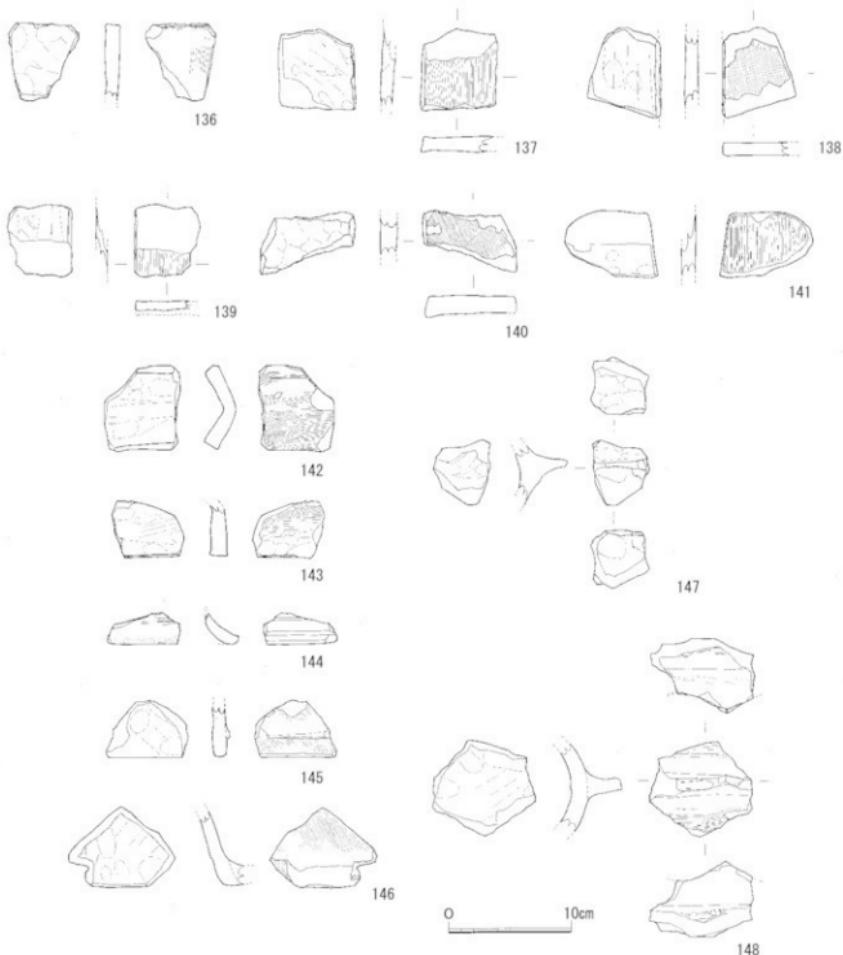


が観察できる。136は縦刷毛と直角になるように水平に透かし孔がみられる。透かし孔の上辺または下辺の破片と考えられる。137・139は縦刷毛と並行して縦に透かし孔が切り開かれており、透かし孔の右左辺にあたるものと考えられる。また、器壁の厚さから、137は下部付近、139は上部付近のものと推測される。138は縦刷毛に対して斜めに透かし孔が切り開かれている。破片のため正確な傾きは不明であるが、調整の一部に透かし孔と並行する刷毛がみられることから、透かし孔を垂直に据えて実測図化を行っている。破片は透かし孔の右左辺にあたるものと考えられる。140は透かし孔が2辺確認できる。他の埴輪破片に比べ硬質であり、胎土や焼成、色調の観察から家形埴輪1と同一個体の可能性がある。

形象埴輪片（第23・24図）（報告番号142～157）（収蔵資料分類番号I.0055・I.0056・I.0057・I.0061）

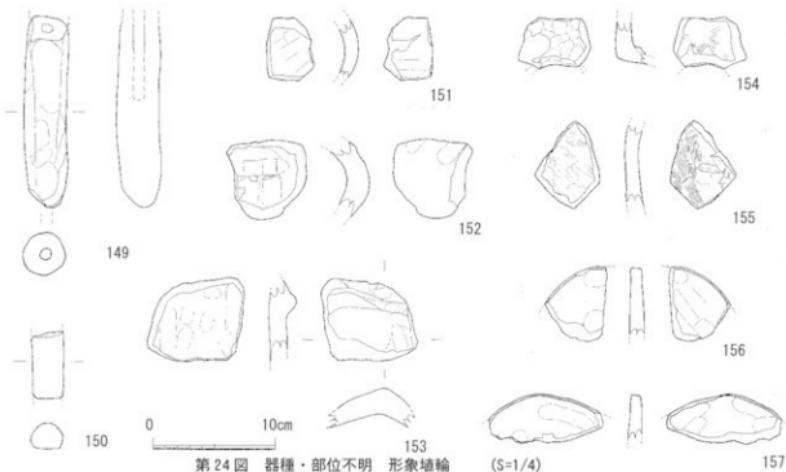
以下に示すものは形象埴輪であるが、小片のため器種・部位の特定が困難な遺物である。前述した人物埴輪・家形埴輪と同一個体・別個体のも含まれていると考えられる。種類の特定まではいかないが参考として、土器の色調・胎土・焼成等を記していく。

142は両端に透かし孔のように切り取られた端部に、そのほぼ中央で緩く約120度の角度をもった折れが確認できる。器壁は1.2cmと厚く調整は残りが良い。外面は縦刷毛、内面は指頭圧痕とナデ調整が施されている。143は一片に端部がみられ、反対側には緩い折れが確認できる。器種・部位が不明であるため、端部を底面に据えて実測図化を行っている。形状の観察より、調整・胎土の他、端部の作や、折れる箇所等から142と同様の部位であると考えられる。外面は縦刷毛と端部近辺にはナデが施され、指頭圧痕とナデがみられる。144は端部片である。外面は横ナデ、内面は剥離しており、接合した際にできた粘土の撓みと斜め刷毛目がプリントされている。破片は硬質で赤色を帯びる。土器の胎土・焼成・色調の観察より、家形埴輪1と同一個体の可能性がある。また破片は傾斜をもって接合されていたものと考えられ、端部を整えていることから、家形埴輪の屋根の一部の可能性が考えられる。145は四辺が欠損・磨耗しており部位の特定ができなかつたため、接合痕の剥離面を基準に水平になるように実測した。外面の剥離痕から斜め刷毛が施された後、144のようなものが接合されていたものと考えられる。内面は指頭圧痕の後、斜めナデが施されている。また、内面にはやや緩やかなカーブをもち、真直ぐな面から折れはじめる変換点付近の部位であると考えられる。146も145と同様に傾きが不明なため、残存している接合面を底面として実測図化している。外面には斜め刷毛を施した後に、端部に144のようなものが接合されている。内面は指頭圧痕とナデを施す器壁は厚さ1.2cmを測り、調整の残りも良好である。また、外面の剥離痕からは接合される前の斜め刷毛が観察できる。破片は緩やかなカーブをもち、端部を欠損しているため傾きは不明であるが、土器の調整・胎土・焼成・色調等の観察の他、145と同様な特徴がみられることから両者は同一個体の可能性があり、比較的近い部位にあったものと考えられる。また、これらの破片は、端部近辺のものと考えると、家形埴輪1と同様の屋根の破風板付近もしくは、人物埴輪の袈裟状衣やスカート状下衣の裾部の可能性が考えられる。147は器壁が三又に分かれるものである。埴輪の一片に端部が確認できたため、端部を基準として上面に設定して実測図化及び展開を行った。表面は全て指頭圧痕とナデにより整形・調整され、一部笠状の道具で強く押し当てた痕跡を残す。土器断面の観察から緩いカーブをもつ器壁に端部面をもつ器壁面を接合していることが分かる。表面は2.5YR6/6～7/7の橙色を呈し、胎土は細かく、1mm以下の石粒を含む。器種・部位は不明である。148は147と同じく、器壁が3方向に分かれる破片である。一辺の端に端部が確認でき、断面の観察からカーブをもつた器壁に端部をもつ器壁が接合され、まるで魚の背鰭のような形状を成す。確認できた端部は角張り、端部面には石粒の移動痕が観察でき、鋭利な道具で切り取られた痕跡を顕著に表す。また、端部は2方向から切り取られており、一方は円形透かし孔のようにカーブをもち、もう一方は残存面が狭いため直線か曲線かは不明



第23図 形象埴輪片 (S=1/4)

である。調整は端部面をもつ器壁には指頭圧痕とナデの他、範状の工具を使用したと考えられる痕跡も見受けられる。カーブをもつ壁面は刷毛を施し、粘土の接合面には丁寧にナデが施されている。内面は指頭圧痕と多方向からのナデが観察できる。表面は2.5YR5/2~5/4のにぶい赤褐色へ灰褐色を示し、胎土はやや粗く3mm以下の石英、長石を多量に含む。焼成は良好で非常に硬質である。以上の観察から家形埴輪1の胎土に近似している。また、近い形状を示すものに人物埴輪1の129があげられる。湾曲する器壁は胴部にあたり、外面に透かし孔のように調整された鰐状の形状は袈裟状衣の一部であると考えられる。そのため器種・部位については人物埴輪の可能性があげられる。149は棒状の



第24図 器種・部位不明 形象埴輪

(S=1/4)

埴輪片である。非常に軟質で表面は摩滅が激しく、辛うじて指頭圧痕とナデの痕跡を残す。内面には直径0.9cmの棒状の道具を刺し抜いた痕を残す。棒状の道具は埴輪製作時に粘土を巻きつけ形成するための骨組みの役割を担ったものと考えられ、残存部から6cm程棒状の道具が押し込まれている。色調は5YR6/6の橙色を呈し、胎土は細かく1mm以下の石英と長石を含む。器種・部位は不明であるが、長さ16cmにも及ぶ棒状の形状は家形埴輪に付随したものとは考えにくく、腕や脚が表現される人物埴輪の一部と考えられる。また、動物埴輪の可能性も考えられるが現資料からは動物埴輪と断定できるものは確認されていない。150は149と同じく棒状の形状である。表面は摩滅が激しく、調整の観察は困難である。一辺に平らな面が作られており、断面は蒲鉾状を呈する。両端は欠損しているが、端と端で幅が微妙に異なることから、均一の幅で作られたものではない可能性がある。色調は2.5YR6/6の橙色を呈し、胎土はやや粗く、2mm以下の石英、長石を多量に含むことで、やや軟質の焼成。当古墳からは170の三足金脚部が確認されているが、色調・胎土は異なり、整形時のナデや指頭圧痕の凹凸がみられないことや、形態はほぼ棒状に作られていることから三足金脚部とは考えられない。器種・部位については屋根の装飾木である輕木の可能性が考えられる。151はカーブをもつた土器片である。破片は摩滅が激しく、端部であるか欠損しているか判断が難しく、ある程度均一な面を残すが、凹凸が多いことから欠損しているものと判断し実測している。調整は内外面に笠状の道具を使用した痕跡を残す。色調は外面は7.5YR5/1のにぶい褐色、内面は10YR7/4のにぶい黄橙色を呈し、やや硬質で胎土は粗く2mm以下の石英と長石を多量に含む。見ためは石の様であり、他の埴輪片と若干異質な印象を受ける。152はカーブをもつ埴輪片である。外面は摩滅が激しいが指頭圧痕の痕跡を残す。内面はナデとその際に粘土が移動した粘土塊がみられる。色調は外面が7.5YR6/4のにぶい橙色、内面は5YR5/4のにぶい赤褐色を示す。胎土はやや粗く2mm以下の石英、長石を多量に含む。153は1.3cmの厚い器壁に円筒埴輪の突帶のように突出する部分をもつ。また、緩やかな角度をもつ折れが確認できる。傾きは不明なため、突出した部分を基準に、水平になるように設定して実測図化を行っている。表面の摩滅は激しいため、どこまでが本来の形状を示す面か判断が難しい。内面も摩滅しているが、

指頭圧痕とナデが確認できる。色調は外面が 5YR5/4 のにぶい赤褐色、内面は 7.5YR5/3 のにぶい褐色を示し、胎土はやや粗く、3mm 以下の石英、長石を示す。154 は一辺に弧を描く面が設けられている。外面の粘土の剥離痕からは接合前に施された細かな縦・斜め刷毛がみられる。内面には指紋が残るほどの指頭圧痕が無数に施されている。色調は外面が 7.5YR6/4 のにぶい橙色、内面は 5YR5/4 のにぶい赤褐色を示す。軟質であるが、胎土は細かく、1mm 以下の石英と長石が含まれる。器種・部位は不明である。155 は緩いカーブをもつ破片であり、硬質で調整がよく残る。外面は細かな刷毛がみられ内面は刷毛の後、指頭圧痕とナデが施されている。色調は内外面ともに 5YR5/4 にぶい赤褐色～5YR7/8 の橙色を示す。胎土は細かく、1mm 以下の石英と長石を含む。器種・部位は不明である。

156・157 は『高松市歴史資料館収蔵資料目録～考古資料～』において弥生土器壺口縁部とされていた遺物である。口縁部とされる端部は歪んだ弧を描き、端部に沿ったナデ調整やそれに伴った土器の凹凸はみられない。角に丸みをもって 90 度に曲がる。観察より調整は内外面共に指頭圧痕と多方向のナデであり、胎土は粒子が粗い。同出土・表探の形象埴輪と同じものと判断する。器種は不明であるが形象埴輪端部の一部分であると考えられる。

須恵器（第 25・26 図）

須恵器の点数は非常に少なく、殆どが破片であり全容を知り得るものは少ない。確認している土器片の多くは甕であり種類は乏しいが、一方で器台が存在する。

蓋杯（第 25 図）（報告番号 158）

（収蔵資料分類番号 I. 0060）

杯蓋である。天井部から肩部まで残存する。調整は内外面ともに回転ナデが確認でき、天井部外面には回転箆削りが施されている。肩部の稜は突出し、その下にやや浅い凹線が回る。復元口径 15cm 前後を測る。陶色編年の MT15 及び TK10 型式にあたるものと考えられる。

壺（第 25 図）（報告番号 159・160）

（収蔵資料分類番号 I. 0060）

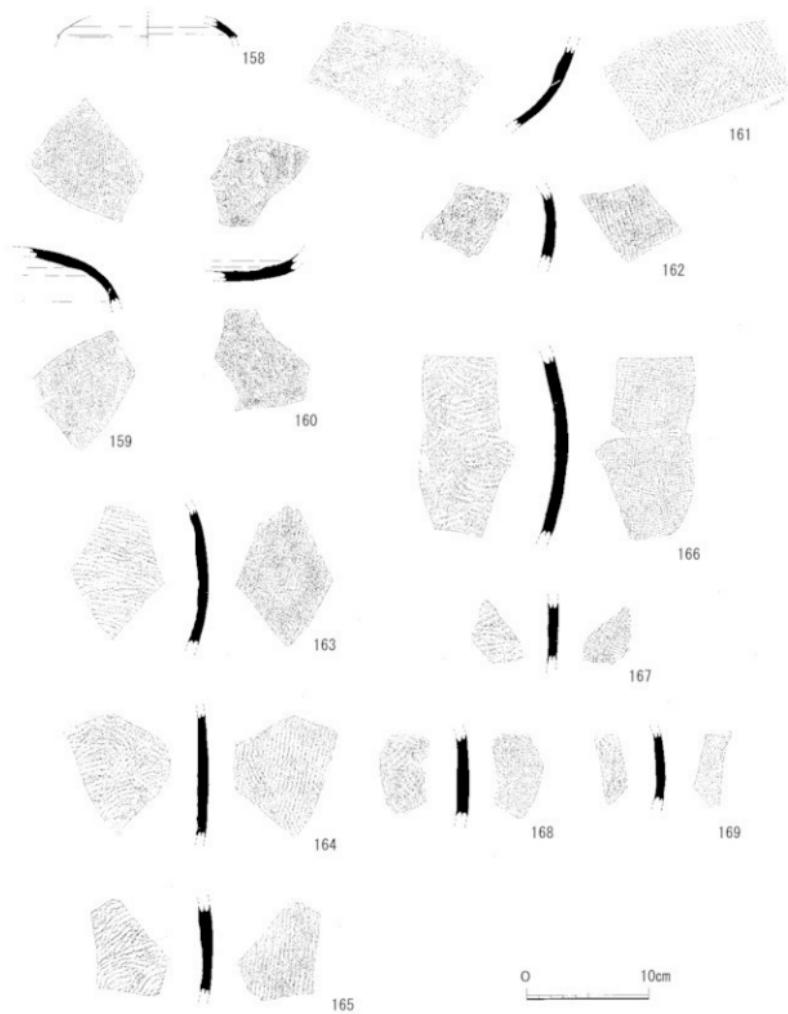
159 は壺の体部である。外面は鈍いカキ目調整が施され、内面は回転ナデと粘土の接合痕が観察できる。破片のため器種の断定は難しいが、カキ目の中心付近に粘土の接合痕があることから、提瓶の製作時に穴を塞いだ痕であるか直口壺等の肩部のものと考えられる。160 は壺の底部と考えられる。調整は内外面ともに指頭圧痕と回転ナデが施される。器種は不明である。

甕（第 25 図）（報告番号 161～169）

（収蔵資料分類番号 I. 0060）

161～169 は甕である。この内 161・162 は底部付近、163～169 は体部である。161 は外面に平行叩き目が観察でき、内面は同心円文の叩きの後にナデ調整が施されている。接合痕付近には強い指頭圧痕が施されている。また、一部暗オリーブ色の自然釉がみられる。162 は 161 と同じく外面は平行叩き目、内面は同心円文の当て具痕があり、ナデ調整が施されている。土器の胎土、調整、表面や割れ口の色調観察から 161 と 162 は同一個体の可能性がある。163 は外面に格子状叩きの後にナデ調整が施されている。内面には同心円文の当て具痕が強く残る。164 は器壁がほぼ垂直に立ち上がる体部である。外面には平行叩きと、内面は同心円文の当て具痕がみられる。また、内面には暗オリーブ色の自然釉が付着している。165 は 164 と内外面の調整が同じあるが、色調を異にする。166 の例があることから同一個体の可能性が考えられる。また、内面には微量に暗オリーブ色の自然釉が付着している。166 は接合資料である。外面に細かな格子状叩きと内面は同心円文の当て具痕があり、その後ナデ調整が施されている。両破片は割れた後、何らかの影響を受けておりお互いに色調を異にする。167 は外面に細かな格子状叩きの後、ナデ調整が施されており、外面には暗オリーブ色の自然釉が付着し

ている。内面は同心円文叩きが観察できる。168は外面に細かな格子状叩きが施されている。表面は摩滅が激しく暗オリーブ色の自然釉が剥離している。内面は同心円文の当て具痕があり、その後にナデ調整が施されている。169は外面に細かな格子状叩きと黒色の自然釉が付着する。内面はナデにより同心円文の当て具痕が打ち消されている。

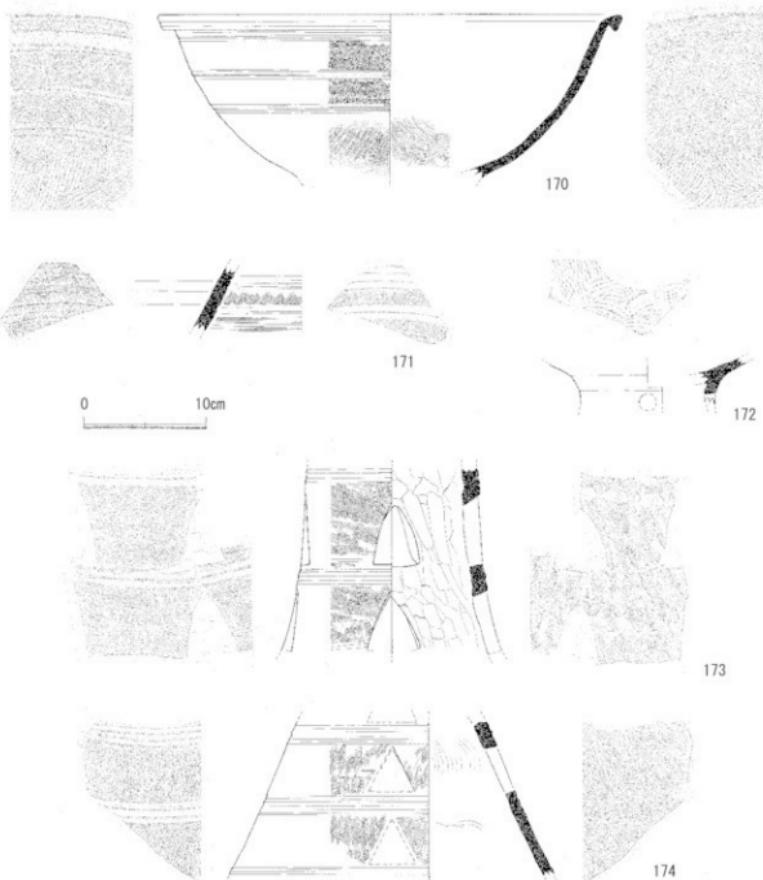


第25図 須恵器片 ($S=1/4$)

器台（第26図）（報告番号 170～174）

(収蔵資料分類番号 I.0058・I.0059・I.0060)

170は大型器台の杯部である。口縁部から底部付近まで半分ほど残存している。直径は約38cmを測る。口縁部は大きく外に開き、端部は厚く幅をもち下方へ突出する。また、端部には鈍い凹線が一条めぐる。外面は2条一組の凹線が3段にめぐり、凹線と凸線の間には細かな波状文が施されている。波状文は左側に急な角度をもち、右側には緩やかなカーブをもつ。道具の静止痕の観察から右から左へ施していると考えられる。約17条一束、幅約1.5cmの工具を杯部の上部から下部へと順に重ね描きしている。杯部の底部付近は格子状の叩きが無数に施され、凹線付近や脚部との接合付近には回転ナデ調整が施されている。内面は口縁部から底部付近まで回転ナデ、底部には同心円文の当て具痕



第26図 須恵器 器台 (S=1/4)

が施されている。また、一部に指頭圧痕やナデ調整が施されている。171は杯部の小片である。外面調整は、上方に突出した3条一組の凸線が2段確認でき、その間に波状文がめぐる。その下にはカキ目が施されている。波状文は約8~10条一束、幅約1.1cmの工具を用いて左から右へ施されている。内面は回転ナデが施され、一部に同心円文の当て具痕をナデによって消していることが観察できる。以上の調整と器壁の傾きより、杯部の中程から底部にかかる付近のものと考えられる。胎土・焼成・調整・割れ口・色調の観察より、170とは別個体である。172は受け部の底部から括れ付近である。受け部の外側には格子状の叩き、内面には同心円文の当て具痕が施されている。脚部には受け部を接合の後、回転ナデ調整を施す。また、受け部と脚部の接合付近には径1.4cmの円形透かし孔が穿たれている。173は器台の脚上部である。杯部との接合付近から脚部の中程にわたり残存する。外側には幅約1.5cm、2条一組のにぶい凹線が2段みられ、その間に波状文が施されている。波状文は工具の静止が0.8~1.0cmの間隔で観察でき、右から左へ回転台を使用して施しているものと考えられる。また、調整の施しがあまいため、所々に一次調整のカキ目や横ナデがみられる。波状文の施された器壁には高さ約5.5cm、底辺約3.6cmを測る二等辺三角形の透かし孔が穿たれており、鋭利な道具を用いて器壁に対して垂直と斜め方向の2度にわたり切り込まれている。残存状況から透かし孔は1段に4方向ずつ等間隔に配されている。内面調整は指頭圧痕と、上方から下方への強い縦・斜めナデが施されている。174は器台の脚部である。復元径と傾きより、脚部の底部付近と考えられる。外面調整は幅約1.8cm、4条一組の凹線と幅約1.5cm、3条一組の凹線がめぐり、その間に幅約2.5cm、約15条一束の波状文が左から右へ重ねて施されている。内面調整は同心円文の当て具痕の後に、回転ナデ調整が施される。波状文の施された器壁には二等辺三角形の透かし孔が穿たれており、残存状況から各段に4方向ずつ配されていたものと考えられる。胎土や調整の観察より173とは別個体である。

鉄製品（第27~30図）

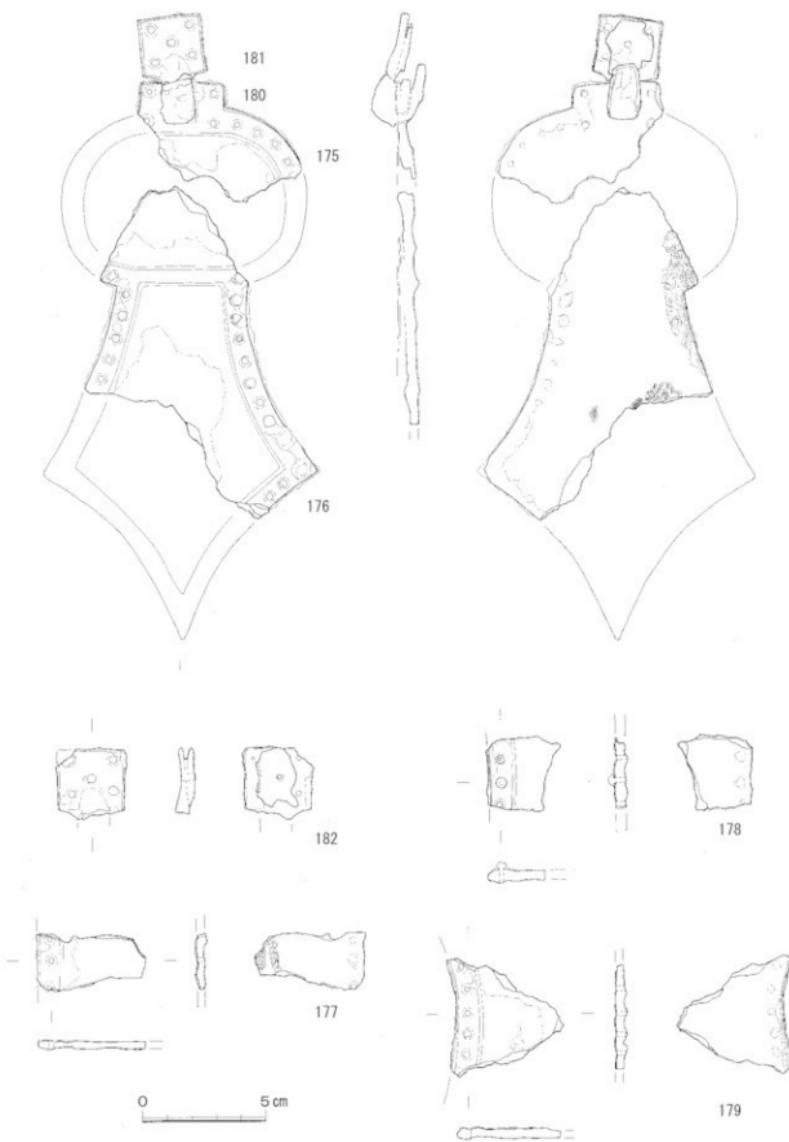
45点ほど確認されている。大刀や金銅製品の馬具等があり、確認できる種類は少ないが、その内容には目を見張るものがある。中でも特に珍しいものに挂甲小札が挙げられる。高松市内では唯一の出土であり（註3）、香川県内では善通寺市に所在する前方後円墳で、横穴式石室に石屋形を設けた王墓山古墳の2例のみである。

剣菱形杏葉（第27図）（報告番号175~182）

（収蔵資料分類番号M.0001・M.0002）

大小あわせて8片表採されている。破片ではあるが、ある程度の形は復元することが可能である。また、整理においていくつか接合が可能なものが見つかり、より本来の形に近づけるに至った。2個体分を確認しているが接合関係にないため同一個体であるかは不明である。形を把握するために部位の特定できるものを一個体として実測図化を行っている。また、剣菱形杏葉にはしばしばセット関係でf字形鏡板および轍がみられるが、当古墳からは確認されていない。

整理にあたり釣金具181と杏葉小片180、杏葉は175が接合関係にあることが判明した。181は一辺約2.3cmの方形の鉄地板に厚さ0.5mm程の金銅板を被せ、その上から鉢を四隅と中央の5箇所に留めている。鉢の頭部は全て欠損しているが、残存部から径2~3mmのものが使用されていることが分かる。釣金具の下部には1cm程の膨らみがあり、そこから杏葉と連結する金具へ続く。裏面には広範囲にわたって、2mm程の板が付着している。また、表から打ち付けられた鉢の痕跡が確認できる。180は、これまで杏葉の一部とされていたものであるが、釣金具から伸びる金具の一部であることが確認された。金具は杏葉の縦約0.4cm、横約1cmの方形の穴を通して連結している。表面は錆がひどく、一部に杏葉の金銅板が付着している。175は剣菱形杏葉の上部である。破片の上部には釣金具を通す方形の穴が施され、裏面には釣金具の一部が付着している。破片の右側にはカーブがみられ、梢円形



第27図 金銅張刻菱形杏葉 (S=1/2)

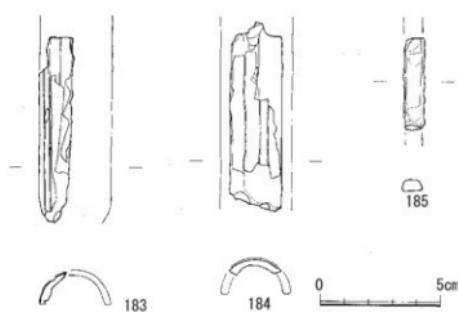
状に下部へ続く。表面は約 0.5mm の金銅板が貼り付けられ、径 2 ~ 3 mm の鉢で鉄地板に固定されている。鉢は 8箇所確認でき、いずれも頭部は欠損している。また、表面は錆や剥落が進行しているが、僅かに金色を残す。断面から鉄地板と金銅の境が観察でき、縁金を金銅板で覆った後に鉄地板に鉢で貼り付けたようである。裏面には表から打ちつけた鉢が錆により膨らむ。また、縁金を金銅板で覆った際にできた金銅板の折込が確認できる。杏葉の上部と確認できるものは 175 の 1 点のみである。176 は剣菱形杏葉の下部である。金銅板は僅かに金色が残るのみで、大部分は緑青に覆われ、膨れ上がり鉄地板が露出する。断面から 175 と同じく縁金に金銅板を被せた後に鉄地板に貼り付けていることが分かる。杏葉の中央には一筋の縁金がとおり上部と下部を明確に分ける。周縁の縁金には 5 ~ 7 mm 間隔で鉢が打ちつけられており、必ずしも等間隔に打ちつけているものではない。杏葉の右側は錆が激しく、鉢の箇所が特定できない。左側は比較的残りがよく、12箇所確認でき、その内 7箇所は頭部を残す。裏面には打ちつけられた鉢がみられる他、一部に木質痕と布目痕が付着している。182 は 181 と同じ釣金具である。方形の金具の部分のみ残存している。鉢は欠損し、打ちつけられた痕跡を残す。裏面には厚さ 2 mm 程の板状のものが付着しており、皮の可能性がある。177・178・179 は鉄地金銅張の剣菱形杏葉片である。177 は側片が直線的である。裏面には木質痕が付着している。178 は端部にカーブする面がみられることから、杏葉の下部の一部分であると考えられる。179 は側辺に緩い曲線がみられることから杏葉下部の折れ付近であると考えられる。

鞍金具（第 28 図）（報告番号 183・184）

（収蔵資料分類番号 M. 0003）

183・184 は断面が半円状を呈し、細長く伸びる金属片である。断片的な破片のため部位の特定は困難であるが、形状より鞍金具の覆輪の一部と考えられる。両破片とも鉄地に表面は金銅板を張り付けられている。

183 は残存長 7.7cm、残存幅 1.2cm、厚さは約 2 mm を測る。長側辺には端部と考えられる金銅板の折り返しが観察できる。短幅側に円弧を描き、断面は半円状になるものと推測される。表面には 0.5 mm ほどの金銅板が貼り付けられているが、現在は茶褐色を示し、錆が進行している。また、金銅板には装飾的な要素と見受けられる幅 5 mm 程の稜が縦方向に 5 本確認できる。内面は錆が激しく、板状に剥離している。木質の痕跡は確認できない。また、短側辺の一方にはきれいに丸く弧を描く部分がみられ、鉄地も丸く納まっていたため本来の形状を残しているものと判断した。縦方向に直真直伸びる形状に先が丸く終わることから、覆輪端部の可能性をもつ。184 は残存長 7.8cm、残存幅 2.2cm、厚さ約 3 mm を測る。外面は暗緑灰色に変色した金銅板が 3 分の 2 程残存する。181 と同じく幅約 5 mm 間隔に稜が 5 本確認できる。内面は、錆がひどく木質痕の確認はできない。一部に何らかに張り付いていたと考えられる平らな面がみられる。



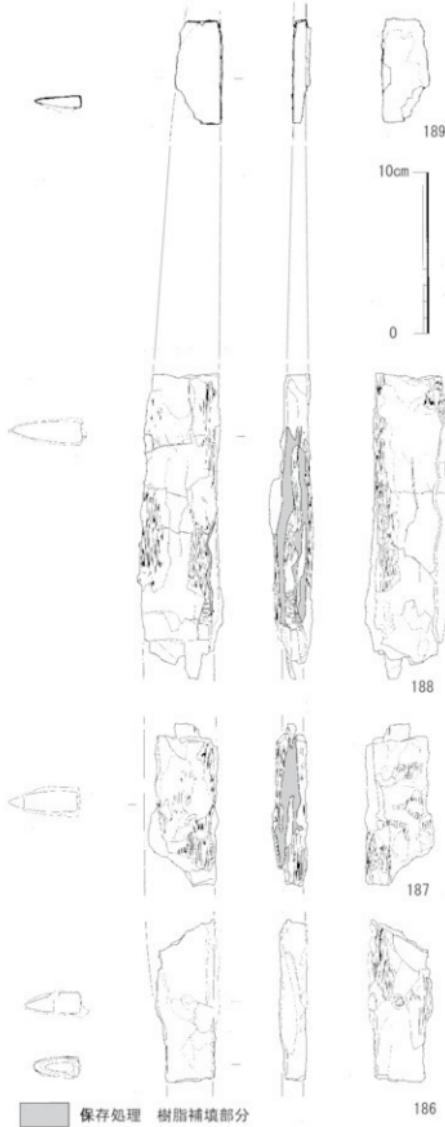
第 28 図 金銅張鞍金具覆輪（左・中）鉄金族（右）（S=1/2）

鉄鎌（第 29 図）（報告番号 185）

（収蔵資料分類番号 M. 0006）

185 は鉄鎌の頭部片と考えられる。残存長 3.8cm、幅 0.9cm を測る。錆の影響もあり、断面はやや台形状を示す。本来は長方形を成していたものと考えられる。鉄鎌と考えられる遺物はこの 1 点のみである。

大刀（第29図）（報告番号186～189）



第29図 大刀 (S=1/3)

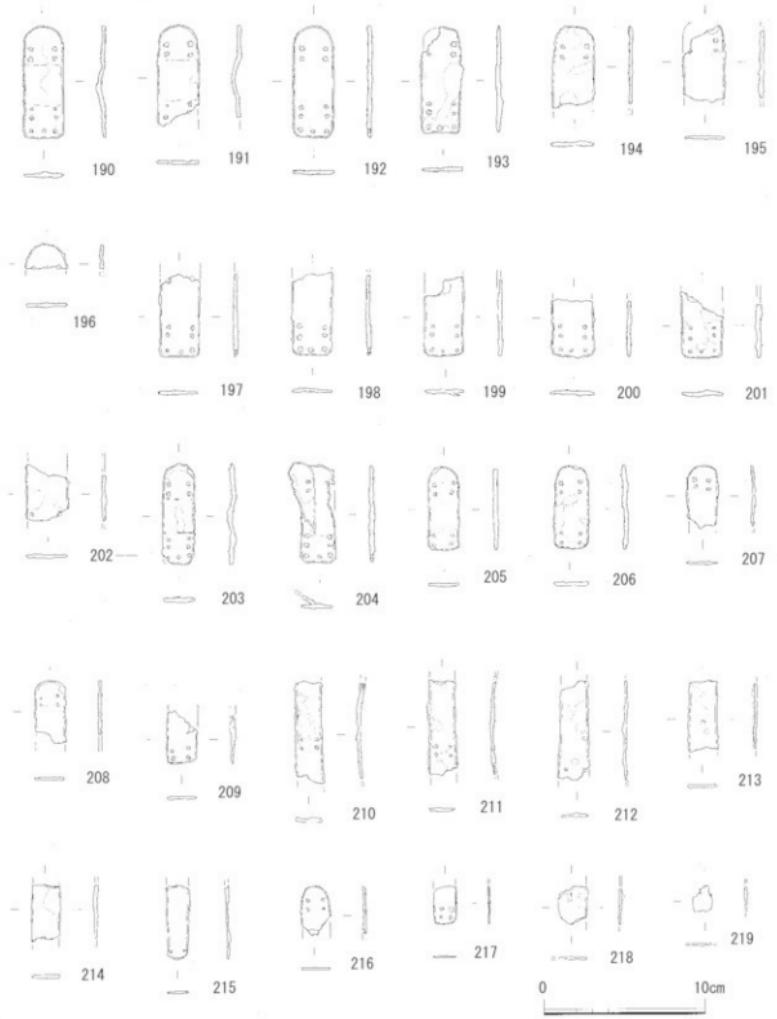
(収蔵資料分類番M.0005)

4片確認している。いずれも接合関係はないが、幅・厚さが近いため一振として実測図化を行っているが同一個体という確認はない。そのため、1個体以上副葬されていた可能性を示す。いずれも鋒が進行しており、残存状況は良くないが、およそその部位の特定は可能である。また、表面に木質痕を残すものがあり、鞘木の存在が推測できる。柄頭等の装飾は確認されていない。186は短側部の幅が異なることから茎から刃部にかかる関部であると考えられる。残存長10.1cm、残存幅4.0cmを測る。厚さは約1.5cmを測るが、割れ口断面から元の厚さが1.3cmであると計測できる。右側面には縦方向に伸びる木質痕が確認できる。また、関部の中央には直径約0.5cmの窪みがみられる。目釘と考えられるが、本来目釘は茎の先に近い部分に設けられ柄木に固定するもので、関部に目釘を施すことは考えにくい。187は残存長10.0cm、幅約4.2cmを測る。また、厚さ約1.8cmを測るが断面から本来は1.3cm前後を示すものと考えられる。刃部は欠損しており、表面には所々に木質痕が観察できる。188は刃部の中程辺りのものと考えられる。残存長18.4cm、幅約5.1cmを測る。また、1.3cmを測る元の厚さは鋒により2.0cmに膨れ上がっている。表面は鋒や縛により酷い状態であるが、縦方向の木質痕と背側に一部斜め方向の木質痕が観察できる。189は刃部の切先付近とみられる。残存長6.4cm、幅約2.8cm、厚さ約1.0cmを測る。割れ口断面より、本来は0.7cmを測るものと考えられる。木質痕は確認できない。

挂甲小札（第30図）（報告番号190～219）

(収蔵資料分類番M.0004)

実際には数百枚もの小札により構成されるが、付着片も含め31枚を数える小



第30図 挂甲小札 (S=1/3)

札が確認されている。湾曲した細長い小札がみられることから胴丸式挂甲と考えられる。

190・191は長さ約7.0cm、幅約2.5cm、厚さ約0.2cm長方形の板に頂部を弧形にしたものである。上部には鍼孔4つ、下部には緩孔4つ、下搦・覆輪孔3つがみられる。小札の中央には湾曲がみられることから草摺据札と考えられる。192～202は190・191と同じ寸法、同じ箇所に孔をもつものであるが、中央に湾曲はみられない。203・204は先のものより小形の小札で、長さ約6.2cm、幅約2.0cm、

厚さ約 0.3cm を測る。上部には縫孔 4 つ、下部には緩孔、下掘・覆輪孔合わせて 7 つみられる。203 は小札の中央に湾曲がみられる。204-1 と 204-2 は鋸により小札が付着しているものである。204-1 は一部欠損、204-2 は 3 分の 1 程残存しており、孔が確認できる。205 から 209 は一方を弧形にした長方形の板に、上部と下部に 4 つずつ孔がみられる。長さ約 5.2cm、幅約 2.0cm、厚さ約 0.2cm を測る。207・208 は上部のみ残存する。上部には孔が 4 つ確認できる。両者とも下部を欠損しているため、孔は 7 つまたは 4 つもつものか確定できない。209 は上部を欠損したもので残存部には孔が 4 つ確認できる。210・212 は両端部を欠損したもので、いずれも残存長約 6.0cm、幅約 1.8cm、厚さ約 0.3cm を測る。この内 210・211 は破片中央に孔が 4 つ、212 は孔が 2 つみられる。板には湾曲がみられる。213・214 は両端部が欠損するもので、残存部に孔は確認できない。215 は上下が不明である。実測図上の下部には孔が 2 つみられる。端部に孔 2 つをもつものは 215 のみである。これら 210 から 215 は細長い形状や湾曲がみられることから腰札もしくは、付近の破片と考えられる。216・217 は端部片である。216 の端部は円弧を描き、217 は方形を呈す。両者とも草摺掘のものと比べ幅が狭いつくりで、端部には孔が 4 つみられる。218 は小片であるが一辺に端部が確認できる。219 は小片である。部位の特定はできない。

その他採集遺物（第 31 図）

土師質土器（第 31 図）（報告番号 220）

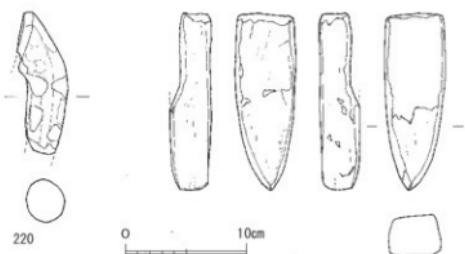
（収蔵資料分類番号 I. 0062）

220 は三足釜の脚部である。摩滅が激しいが、外面は指頭圧痕とナデ、内面は横刷毛が観察できる。

石器（第 31 図）（報告番号 221）

（収蔵資料分類番号 J. 0001）

221 は磨製大型蛤刀石斧とされていたものであったが、柱状片刃石斧であることが分かった。小竹氏の記録報告より「残存石室の上方とみられる封土表面近くで採集したもの」である。刃先は残りが



第 31 図 三足釜（左） 柱状片刃石斧（右）

（S=1/4）

よく側面の一部と後部を欠損している。挿入はみられず、表面は使用痕であるか摩滅であるかは判断できない。石器は弥生時代の所産と考えられ、古墳の築造時に混入したものか、後世に田地耕作の際に周辺の土と一緒に巻き上げられたものと考えられる。材質は玄武岩もしくは輝緑岩と考えられる。

註

（註 1）松本和彦 2000 「第 3 節 遺構・遺物（④出土遺物）『県道高松王越坂出線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 雄山古墳群』財團法人香川県埋蔵文化財調査センター他

（註 2）鈴木 徹 1999 「女子埴輪、袈裟状衣の孔」『埴輪論叢 第 1 号』埴輪検討会

（註 3）他に木田郡三木町諏訪山古墳群から出土したとされるが詳細不明。

第4章　まとめ

これまで相作牛塚古墳は、県内では数少ない、後期前半の古墳であることや、卓越した資料が出土していることから、香東川下流域の首長墳墓として研究・集成に度々取り上げられてきた。主に遺物資料のみが先行して、調査記録の不足から古墳の内容は詳細不明のため、資料的に制約があり踏み込むことができないままであった。そのため、資料の価値を高めるために、ここでは前章で整理した内容から各遺物の編年的な位置づけを行い、相作牛塚古墳の築造時期を推測したい。

第1節　古墳の築造年代

遺物は先述のとおり、破片が主である。の中でも、いくつか時期的変化を示すものがある。埴輪は円筒埴輪、須恵器は蓋杯 158 と器台 170～174、鉄器は劍菱形杏葉 175～182 の遺物を取り上げ、以下、総合的に古墳築造の時期を推測してみたい。

円筒埴輪

突帯断面の形状は、断面台形、扁平台形、M字形、扁平M字形がみられる。方形や突出した突帯はみられず、主に扁平化した台形やM字形が中心となる。口縁部では直立もしくは直立気味に伸びる形態が主にみられる。数例ほど張り出す突帯や外反する口縁部がみられ、比較的古い形態をみせるが、基本的には新しい様相を示すものを中心とする。また、注目すべき点として一次調整が主流とみられる中で二次調整を施すものも含まれており、2例のみであるが、B種横刷毛を施すものを確認した。また、突帯調整には断続ナデ技法Aを数例確認している。

ここで円筒埴輪の時期を推測するために、比較的資料の残りがよく時期も近いと考えられる雄山古墳群（4～7号墳はMT15～TK10型式並行期、円筒埴輪はTK10並行期）の円筒埴輪を参考に整理してみる。雄山古墳群では相作牛塚古墳と同様に須恵質埴輪が出土しており断続ナデ技法Aも確認されているほか、断続ナデ技法B（無調整突帯）も確認されている。この断続ナデ技法Bは突帯調整の横ナデを欠くものであり、いわば断続ナデ技法Aを省略した技法である。それは断続ナデ技法Bが断続ナデ技法Aより後出するものと考えられる。相作牛塚古墳では無調整突帯はみられず、断続ナデ技法Aのみ確認されていることから、横ナデ調整を省く工程まで至っていないことが言える。また、二次調整が並存しており、古くからの調整技術を残しながらも、新しい技術も取り入れており、調整技術の変化がみられる。一方、雄山古墳群からは二次調整を施す埴輪が出土していないことや、断続ナデ技法Bを施すことから、相作牛塚古墳は雄山古墳群よりも古い時期に位置づけられるだろう。

以上、円筒埴輪から、雄山古墳群よりは古いものと推測されるが大きく前出するものではないと考えられる。編年観を与えるならば断続ナデ技法の使用を考慮すると川西編年（註4）のV期の比較的新しい時期とされるMT15型式並行期（6世紀前半）に位置付けられると考えられる。

須恵器（蓋杯・器台）

蓋杯 158 は蓋の肩部であり、肩には明確な稜がみられる。復元した規模や形状からMT15～TK10型式並行期（6c前半～中頃）の特徴を見出すことができる。ただし、小片のためあくまで可能性をもつもので断定できるものではない。器台については時期が近いとされる善通寺市王墓山古墳と比較検討してみる。相作牛塚古墳の器台 170 の杯部は浅く、口縁部は強く反り返る。口縁部から受け部の底部までに、3条の凹線が入る。脚部の173・174は凹線で段を成しており、各段には三角形の透かし孔がみられる。173より、格段に4方向から開かれ、縦に直線的に配列されていることが確認できる。段数は不明である。次に王墓山古墳のものをみてみると、3個体が確認されており、いずれも浅い杯部を示す。脚部は格段に三角形の透かし孔を4方向から開くものと、格段に5方向から三角または四

角形の透かしを開くものがみられ、脚部端部は内側に窄まる。器台は時代の降下に従い、杯部が浅く、脚部端部は内側に窄まるといった変化がみられることから、器台は MT15 型式並行期に位置づけられると考えられる。王墓山古墳出土のものには相作牛塚古墳と同じ、3段の凹線がめぐる浅いつくりの杯部や、4方向から三角形透かし孔を開くものがあり、共通する部分がみられる。しかし、口縁部の細かな違い、方形透かし孔や1段あたりに切り開かれる透かし孔の数の違いがあり、時期編年でどれだけ時期差を分けるものかは分からぬ。以上を理由に安直に須恵器編年をあてることは難しいが、近い時期であると考えられる。

以上、蓋杯から MT15～TK10 並行期（6世紀前半～中頃）、器台から MT15 型式並行期（6世紀前半）のものと推測される。

鉄器（劍菱形杏葉）

研究により、劍菱形杏葉は変遷の過程に形状・製作過程に変化が見出されている。以下示してみると、一般的に製作工程から、鉄地板、縁金に金銅板を別々に被せるものと、金銅板一枚を被せるものがあり、前者が先行するもので、後者は TK23・TK47 型式（5世紀後半～末）以降に現れる様相であるという（註5）。形状からは、MT15 型式以降から金具の形は大きくなり、菱形部の下端は鋭角から鋸角に変化し、縁金の鉢の間隔が密になるとされる。当古墳の劍菱形杏葉を整理してみると、上部には横に伸びた梢円形、下部には長く伸びた菱形がつく。杏葉の中央には水平に通る縁金により梢円形部と菱形部とを明確に分ける。実測による復元から、梢円頭部は立體と中央の縁金を含め縦約 8.0cm、横約 10.0cm、菱形部は縦約 14.5cm、横約 11.4cm を示し、杏葉の周囲には幅約 0.8cm の縁金がめぐる。鉢は約 5～7mm 間隔にみられ、計 60 前後の鉢が打ちつけられていたものと考えられる。また、菱形部下端の劍先部は鋭角になるものと考えられ、合わせて最大長約 22.8cm、最大幅約 11.1cm を示すものと考えられる。割れ口断面から、鉄地板・縁金・金銅板の重ね方が観察でき、製作工程を読み取ることができる。金銅板は一枚を使用し、縁金に貼り付けた後、鉄地板に張り合わせている。鉄地板には金銅板は被されていない。

以上の製作工程・形状から当古墳の劍菱形杏葉は MT15 型式以降の特徴を備えるものである。同県から出土が確認されている王墓山古墳・菊塚古墳のものと比較すれば、製作工程に鉄地板と縁金具を金銅板一枚で被せる方法や、鉢の間隔等、細部の形状に差異はみられ、この差異がどこまで時期差を反映するものかは知れないが、およそ近い時期のものと推測される。その上限は MT15 型式から下限は TK10 型式という時間幅を与えることができる。

想定される年代

これらの遺物から位置づけられた年代をもとにすれば、相作牛塚古墳は 6世紀前半（MT15 型式並行期）を中心とした時期に位置づけることができる。

周辺古墳との年代比較

相作牛塚古墳周辺には、相作馬塚古墳や円筒埴輪片が採集されている青木 1号墳、王墓古墳が存在する。これらは相作牛塚古墳と同じ香東川下流域の首長層の墳墓であり近接して分布する。王墓古墳で採集されている円筒埴輪は比較的硬質であるが須恵質のものは確認できない。中には形象埴輪と思われるものも含まれている。突帯は扁平化したものが多いことから相作牛塚古墳よりも後にするものと推測される。青木 1号墳はやや低平な M字形から突出した M字形突帯が確認されている。王墓古墳と同じく須恵質の埴輪は確認されていないが、比較的硬質な土師質埴輪が表採されている。突帯下辺の低い突帯で、突帯幅が広い。外側調整の刷毛が 1cmあたり 3 条のかなり粗いものや、内側調整に縦刷毛を施すものがみられ、調整の面で違いがみられる。相作牛塚古墳と前後するものと考えられる。

第2節 墳丘と石室

墳丘・埋葬施設については既に消滅のため確認できない。小竹氏の記録によれば墳丘は14m以上の円墳で、埋葬施設は竪穴式石室であったと記されている。しかし、後に横穴式石室の可能性も示唆されており、依然詳細は不明である。墳丘と墳域については消滅前の写真や地籍図から読み取ることができる。写真には墳丘に木が茂っている姿が確認でき、残存する墳域は地籍図とほぼ合致すると思われる。昭和45年頃の写真にみえるように既に墳丘は削平を受けている状態であり、墳域の周辺もある程度削平が及んでいると思われるが、写真と地籍図からは周濠の痕跡は見受けられない。

埋葬施設についてはこれまで横穴式石室か竪穴式石槨か、または竪穴系横口式石室であるか問題となっていた。香川県下で本古墳と比較的時期が近いものに觀音寺市の赤岡山古墳、丸龜市の津頭西古墳、さぬき市の大井4号墳がある。これらは集成編年(註4)の8期と考えられ、埋葬施設はいずれも7期から引き続き竪穴式石槨をもつものである。続く9期では善通寺市の王墓山古墳に横穴式石室の導入が確認されている。しかし、同時期とされるさぬき市の大井5号墳では竪穴式石槨もしくは箱式石棺と推測されており、両者が並存している可能性がある。その中で高松平野に築かれた相作牛塚古墳は9期に含まれ、竪穴式石槨の継続、または横穴式石室の導入という埋葬施設に変化が生ずる時期に位置し、評価の判定が難しい。小竹氏の記録から、墳丘頂上から形象埴輪片を表探している点から墳丘は築造当時の形を残していると考えられる。その上で記録写真を参考にすれば、墳丘はおよそ2m前後の高さとみられ、石室石材は墳丘の中央辺りで露出しており、横穴式石室を埋葬施設にもつには墳丘に高さが足りないものと考えられる。石室形態を確定する根拠は薄いが、現段階では、埋葬施設は竪穴式石槨の可能性が高いとし、高松平野西部での横穴式石室の導入は次の段階に下るものと推測する。

高松平野では前方後円墳出現期の古墳である鶴尾神社4号墳や双方中円墳の猫塚古墳・姫塚古墳等を含む石清尾山古墳群が築かれる。しかし、4期に入ると石清尾山では石船塚古墳を最後に積石塚築造の終焉を迎える。また、今岡古墳築造以後は前方後円墳の築造停止とし、続く中期古墳がみられなくなる。ただし、綾川中流域や津田川周辺では依然として古墳の築造がみられ高松平野とは異なる状況を示す。また、中期以降には古墳が平野に築造される動きには注意が必要である。

この香東川下流域の古墳は、高松平野の古墳時代中期、そして後期古墳へ移り行く墓制の動向を推測する上で重要な古墳である。しかし、多くは遺物が表探されているのみで墳丘や埋葬施設の詳細は不明である。相作牛塚古墳を含め中期末以降の古墳の動向は、同時期の古墳の調査と情報の収集、分析が必要であり今後の調査が期待される。

註

(註4) 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号

(註5) 千賀久 2003 「馬具」『考古資料大観 第7巻 弥生・古墳時代 鉄・金属製品』小学館

(註6) 広瀬和雄 1991 「第3章 前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成 中国・四国編』山川出版

大久保徹也 2005 「四国の前・中期古墳築造状況」『第10回前方後円墳研究会 前半期の首長墳の消長』

中国・四国前方後円墳研究会

主要参考・引用文献

田辺昭三 1966 「隅邑古窯址群 I」

高松市鷺市小学校 PTA 1969 「『鉾打風土記』

鍛方正樹、安井宣也、中島和彦 1991 「晉原遺跡埴輪窯跡をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財センター紀要1991』

笛川龍一 1992 「史跡有岡古墳群（王墓山古墳）保存整備事業報告書」善通寺市文化財保護協会

國木健司ほか 1994 「香川考古－特集：香川の中期古墳－」香川考古刊行会

松本和彦 2000 「『道高松王越坂出縁道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』雄山古墳群」

財团法人香川県埋蔵文化財センター他

松本和彦 2001 「香川県における前方後円墳時代後期首長の動向～集成9期の動向を中心～」『中国・四国前方後円墳研究会 第7回研究会資料集 前方後円墳時代後期首長の動向』中国・四国前方後円墳研究会

田中晋作 2003 「『鐵製甲冑の変遷』『考古資料大観 第7巻 弥生・古墳時代 鉄・金属製品』小学館

善通寺市教育委員会 2003・2004・2005 「善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書8・9・10』

第十一章

編號	送達地番号	送達地名	郵便	開封内		箱内	備考
				封筒	封筒		
47	03050-29	佐野市安	—	小笠原 2m	小笠原 2m	小笠原 2m	小笠原 2m
48	03050-29	佐野市安(内)丸	3.5cm	—	小笠原 2m	小笠原 2m	小笠原 2m
49	03050-29	佐野市安	4.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
50	03050-29	佐野市安(内)丸	6.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
51	03050-29	佐野市安	5.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
52	03050-43	佐野市安	5.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
53	03050-43	佐野市安(内)丸	4.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
54	03050-29	佐野市安	4.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
55	03050-29	佐野市安	5.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
56	03050-43	佐野市安(内)丸	7.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
57	03050-43	佐野市安	5.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
58	03050-52	佐野市安	4.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
59	03050-52	佐野市安	5.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
60	03050-43	佐野市安	5.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
61	03050-29	佐野市安(内)丸	5.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
62	03050-29	佐野市安	5.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
63	03050-29	佐野市安(内)丸	5.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
64	03050-29	佐野市安	5.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
65	03050-29	佐野市安(内)丸	5.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
66	03050-29	佐野市安	5.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
67	03050-29	佐野市安(内)丸	5.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
68	03050-29	佐野市安	5.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
69	03050-29	佐野市安(内)丸	5.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
70	03050-29	佐野市安	5.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
71	03050-29	佐野市安(内)丸	5.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
72	03050-50	佐野市安	3.5cm	—	小笠原 2m	小笠原 2m	小笠原 2m
73	03050-94	佐野市安	3.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
74	03050-94	佐野市安	4.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
75	03050-113	佐野市安	5.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
76	03050-113	佐野市安(内)丸	5.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
77	03050-29	佐野市安	5.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
78	03050-117	佐野市安	5.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
79	03050-94	佐野市安	5.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
80	03050-29	佐野市安(内)丸	4.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
81	03050-94	佐野市安	5.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
82	03050-29	佐野市安(内)丸	5.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m
83	03050-29	佐野市安	5.5cm	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m	美濃原町 2m

第6表 形象埴輪觀察表

第7表 漆器器皿容積表

番号	器名	形態	底径	高さ	容積	測量	出土		測定 年月
							内寸	外寸	
118	12000-13	漆器 大型盆	1.7m	—	110L±	直筒形	1.51m	1.7m	66.4 6/13/11
119	12000-2	漆器 大型盆	1.6m	—	94L±	直筒形	1.31m	1.6m	66.4 6/13/11
120	12000-2	漆器 大型盆	1.6m	—	94L±	直筒形	1.31m	1.6m	66.4 6/13/11
121	12000-1	漆器 大型盆	1.6m	—	94L±	直筒形	1.31m	1.6m	66.4 6/13/11
122	12000-4	漆器 直筒	1.6m	—	94L±	直筒形	1.31m	1.6m	66.4 6/13/11
123	12000-5	漆器 直筒	1.6m	—	94L±	直筒形	1.31m	1.6m	66.4 6/13/11
124	12000-7	漆器 直筒	1.6m	—	94L±	直筒形	1.31m	1.6m	66.4 6/13/11
125	12000-10	漆器 直筒	1.6m	—	94L±	直筒形	1.31m	1.6m	66.4 6/13/11
126	12000-8	漆器 直筒	1.6m	—	94L±	直筒形	1.31m	1.6m	66.4 6/13/11
127	12000-2	漆器 直筒	1.6m	—	94L±	直筒形	1.31m	1.6m	66.4 6/13/11
128	12000-11	漆器 直筒	1.6m	—	94L±	直筒形	1.31m	1.6m	66.4 6/13/11
129	12000-12	漆器 直筒	1.6m	—	94L±	直筒形	1.31m	1.6m	66.4 6/13/11
130	12000-14	漆器 直筒	1.6m	—	94L±	直筒形	1.31m	1.6m	66.4 6/13/11
170	12000-1	漆器 口絶端一端切端	1.3m	—	103L±	直筒形	1.11m	1.3m	66.4 6/13/11
171	12000-4	漆器 口絶端一端切端	1.3m	—	103L±	直筒形	1.11m	1.3m	66.4 6/13/11
172	12000-2	漆器 口絶端一端切端	1.3m	—	103L±	直筒形	1.11m	1.3m	66.4 6/13/11
173	12000-3	漆器 口絶端一端切端	1.3m	—	103L±	直筒形	1.11m	1.3m	66.4 6/13/11
174	12000-8	漆器 口絶端一端切端	1.3m	—	103L±	直筒形	1.11m	1.3m	66.4 6/13/11

番号	漆器器皿名	形態	底径	高さ	容積	測量	出土		測定 年月
							内寸	外寸	
212	12000-1	漆器 直筒	1.3m	—	85.5L±	直筒形	1.03m	1.3m	66.4 6/13/11
213	12000-4	漆器 直筒	1.3m	—	85.5L±	直筒形	1.03m	1.3m	66.4 6/13/11

第8表 その他出土・表記遺物観察表

番号	漆器器皿名	形態	底径	高さ	容積	測量	出土		測定 年月
							内寸	外寸	
214	漆器 直筒	1.3m	—	85.5L±	直筒形	1.03m	1.3m	66.4 6/13/11	
215	漆器 直筒	1.3m	—	85.5L±	直筒形	1.03m	1.3m	66.4 6/13/11	

第8表 鉄製品（武具・馬具）観察表

報告番号	収蔵分類番号	器種名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量	備考
175	M.0001-1	剣菱形杏葉	5.4	6.7	0.4~1.5	(37.1)	M.0001-6・M.0002-1と接合。
176	M.0001-2	剣菱形杏葉	13.5	9.6	0.4	91.6	
177	M.0001-3	剣菱形杏葉	4.7	5.4	0.5	8.2	
178	M.0001-4	剣菱形杏葉	3.0	3.1	0.4~0.7	8.6	
179	M.0001-5	剣菱形杏葉	2.4	4.5	0.3	7.6	
180	M.0001-6	剣菱形杏葉	1.9	2.2	0.3~0.8	(37.1)	M.0001-1・M.0002-1と接合。
181	M.0002-1	釣金具	2.8	2.7	0.5	(37.1)	M.0001-1・M.0001-6と接合。革残存。
182	M.0002-2	釣金具	2.9	2.8	0.4~0.8	9.2	革残存。
183	M.0003-1	鞍覆輪	7.7	2.9	0.4	11.7	
184	M.0003-2	鞍覆輪	7.8	2.5	0.4	14.6	
185	M.0006	鉄鏃	3.9	0.9	0.5	3.8	
186	M.0005-1	大刀	10.0	3.7	1.3	97.3	木質を残す。中央に目釘と考えられる銷有り。
187	M.0005-2	大刀	10.0	4.7		123.2	木質を残す。
188	M.0005-3	大刀	18.9	4.9	1.5	300.6	木質を残す。
189	M.0005-4	大刀	6.4	2.8	0.9	22.7	
190	M.0004-1	挂甲小札	7.0	2.9	0.2	11.5	
191	M.0004-2	挂甲小札	6.9	2.7	0.3	9.1	
192	M.0004-3	挂甲小札	7.0	2.7	0.2	9.8	
193	M.0004-4	挂甲小札	6.8	2.8	0.3	9.0	
194	M.0004-7	挂甲小札	4.8	2.8	0.2	7.9	
195	M.0004-8	挂甲小札	4.8	2.7	0.2	6.3	
196	M.0004-9	挂甲小札	1.6	2.7	0.3	1.9	
197	M.0004-5	挂甲小札	5.3	2.7	0.3	6.8	
198	M.0004-6	挂甲小札	5.3	2.7	0.2	9.0	
199	M.0004-12	挂甲小札	5.0	2.6	0.3	7.0	
200	M.0004-10	挂甲小札	3.7	2.8	0.3	5.4	
201	M.0004-11	挂甲小札	4.2	4.3	0.3	7.5	
202	M.0004-13	挂甲小札	3.5	2.8	0.2	5.3	
203	M.0004-14	挂甲小札	6.3	2.1	0.5	11.6	
204-1	M.0004-15	挂甲小札	6.2	2.3	0.4	(12.2)	
204-2	M.0004-31	挂甲小札	2.9	0.9	0.1	(12.2)	M.0004-15に付着。
205	M.0004-16	挂甲小札	5.3	2.1	0.3	5.8	
206	M.0004-17	挂甲小札	5.2	2.1	0.3	7.9	
207	M.0004-19	挂甲小札	4.0	2.0	0.2	2.4	
208	M.0004-20	挂甲小札	4.0	2.0	0.3	4.5	
209	M.0004-18	挂甲小札	3.5	2.0	0.3	2.9	
210	M.0004-21	挂甲小札	6.4	1.9	0.3	9.7	
211	M.0004-22	挂甲小札	5.9	2.0	0.4	8.8	
212	M.0004-23	挂甲小札	6.2	0.3	0.2	3.0	
213	M.0004-25	挂甲小札	4.5	2.0	0.4	4.7	
214	M.0004-26	挂甲小札	3.5	2.0	0.3	4.2	
215	M.0004-24	挂甲小札	4.8	1.5	0.3	2.0	
216	M.0004-27	挂甲小札	3.1	1.9	0.2	2.4	
217	M.0004-28	挂甲小札	2.4	2.6	0.2	1.6	
218	M.0004-30	挂甲小札	2.3	1.8	0.2	2.4	
219	M.0004-29	挂甲小札	1.5	1.2	0.2	0.7	

()は遺物の合計数値

1 鶴市町周辺航空写真
(昭和38年以前に撮影)

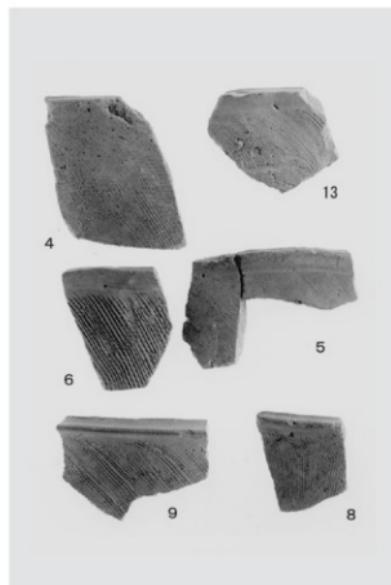


2 相作牛塚古墳周辺近景
(昭和38年以前に撮影)
写真中央、相作牛塚古墳

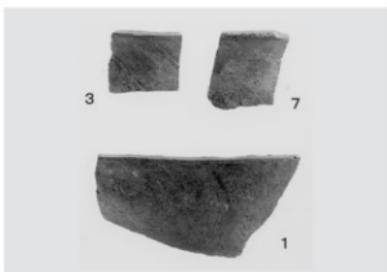


3 相作牛塚古墳(写真中央)
1970年(昭和45年)

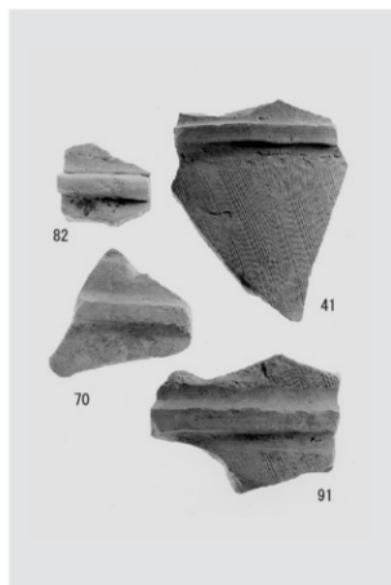




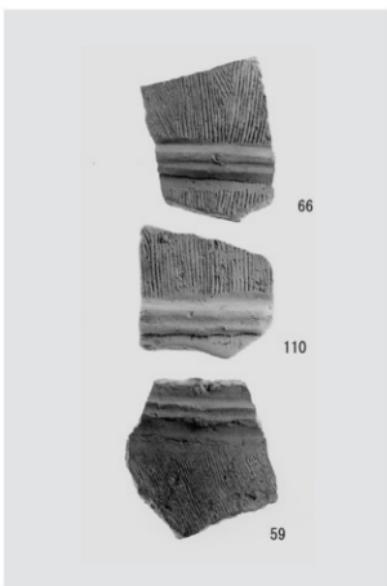
4 円筒埴輪 口縁部



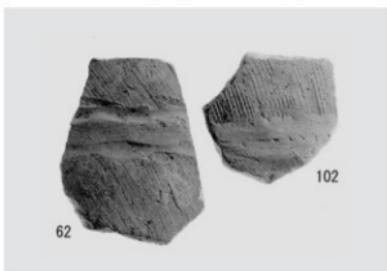
5 円筒埴輪 口縁部



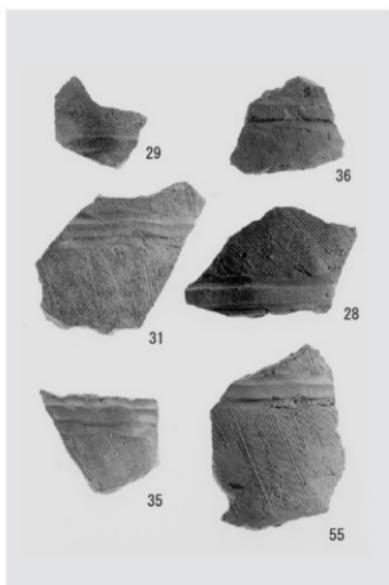
7 円筒埴輪 台形突帯



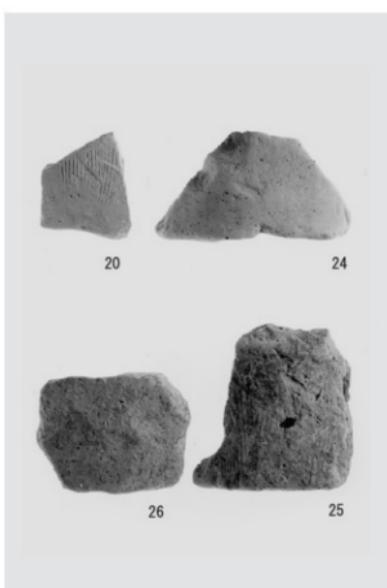
6 円筒埴輪 M字形突帯



8 円筒埴輪 扁平突帯



9 円筒埴輪 扁平M字形突帯



10 円筒埴輪 基底部



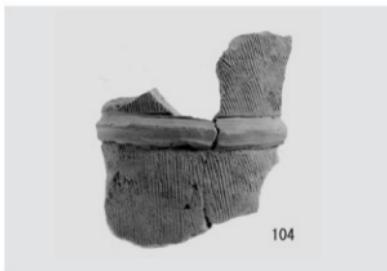
11 円筒埴輪 口縁部



12 円筒埴輪 口縁部



13 円筒埴輪 体部



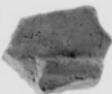
14 円筒埴輪 体部



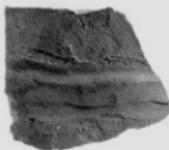
15 円筒埴輪 基底部



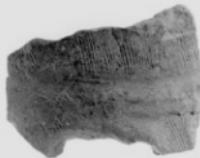
16 円筒埴輪 基底部



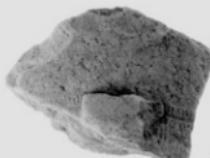
17 B種横刷毛調整



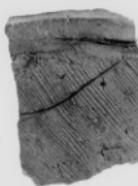
18 断続ナデ技法A



19 扁平突帯と透かし孔



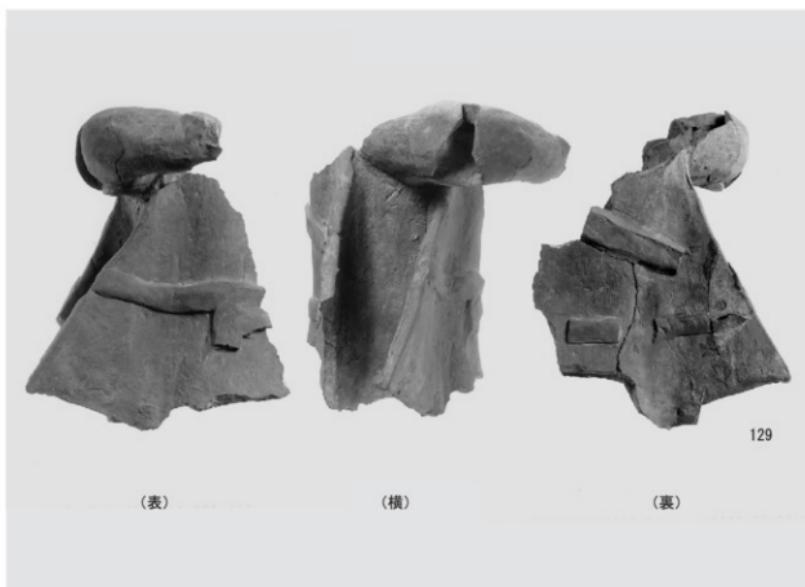
20 突帯貼付時の目印線



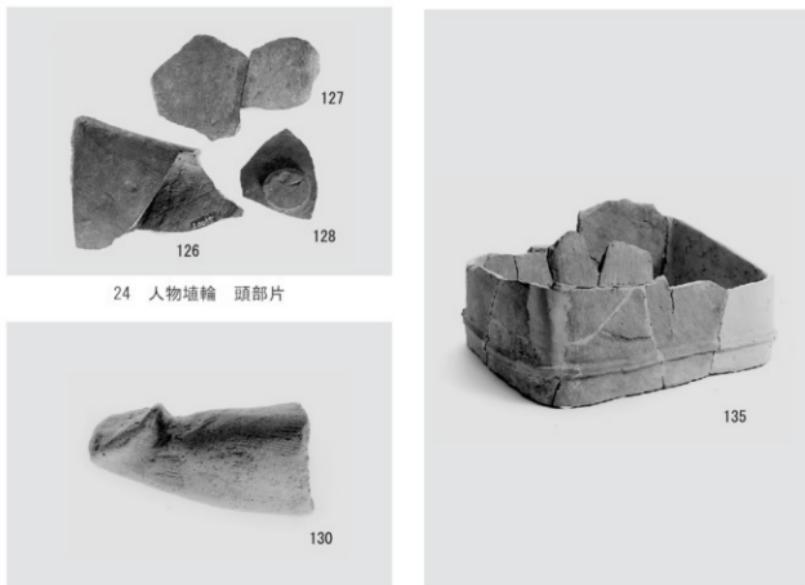
21 ヘラ記号

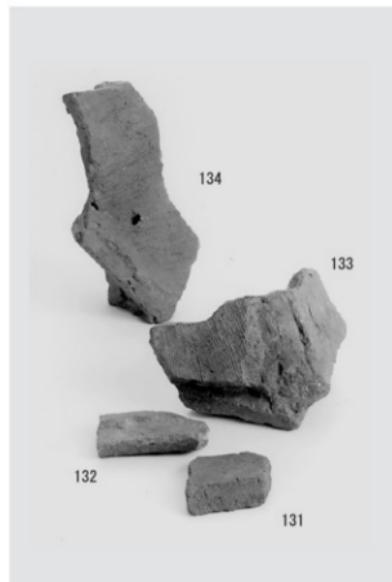


22 朝顔形埴輪 頭部

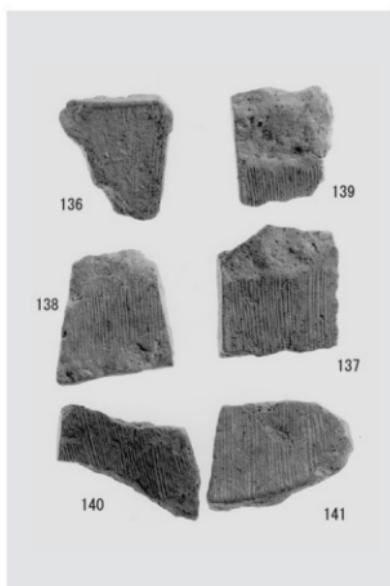


23 人物埴輪 胸部

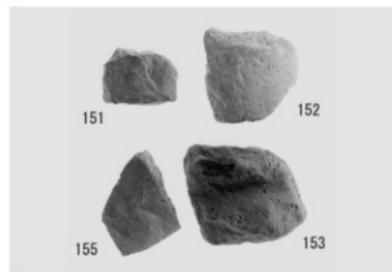




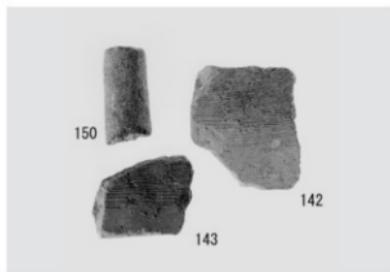
27 家形埴輪 屋根部破片



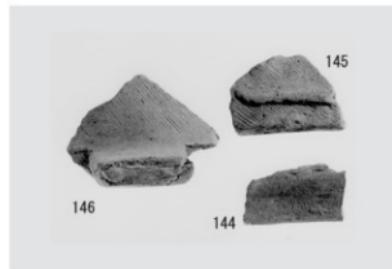
28 家形埴輪破片



29 形象埴輪片 1



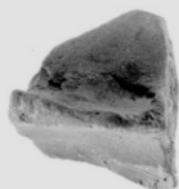
30 形象埴輪片 2



31 形象埴輪片 3



32 形象埴輪片 4



33 形象埴輪片 5

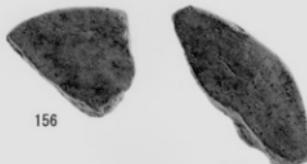


34 形象埴輪片 6



149

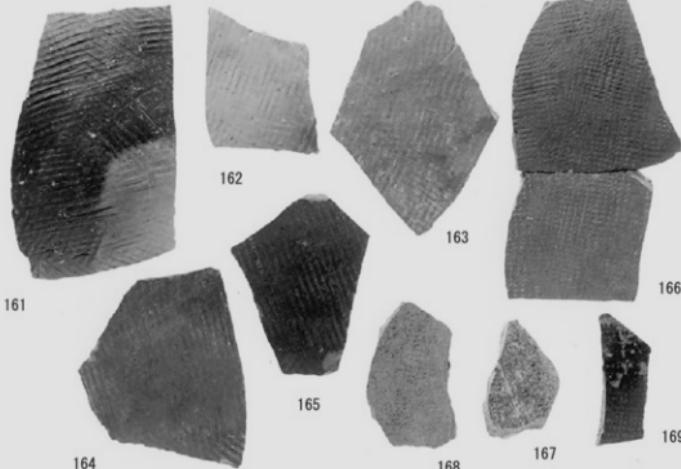
35 形象埴輪片 7



156

157

36 形象埴輪片 8



161

162

163

166

164

165

168

167

169

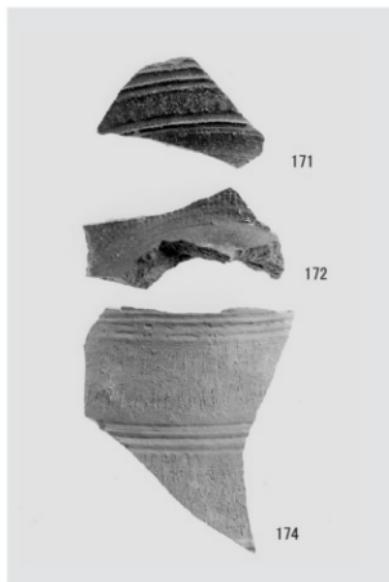
37 須惠器 壺破片



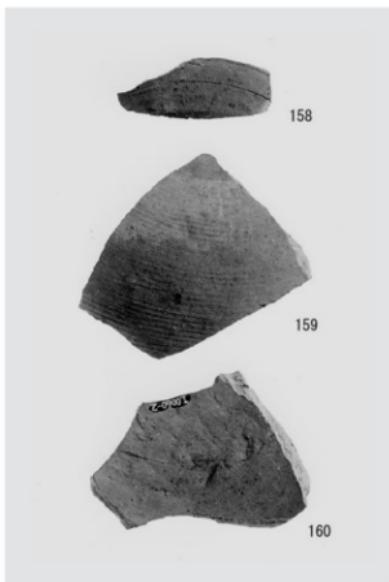
38 須惠器 器台 杯部



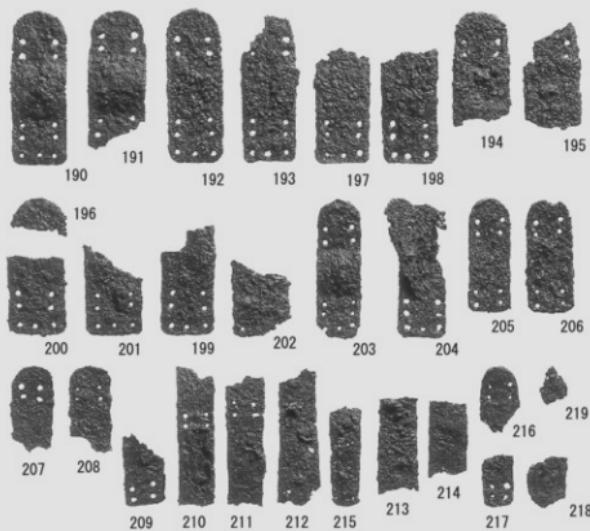
39 須惠器 器台 脚部



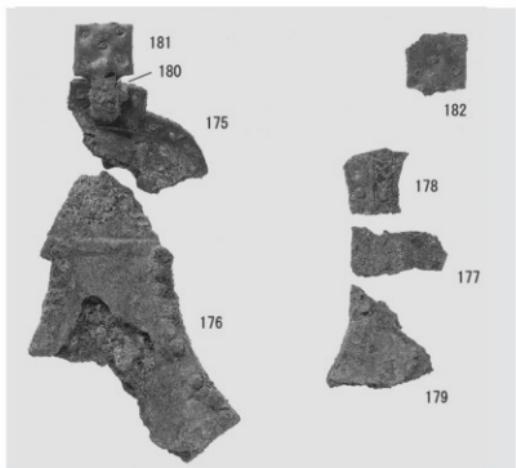
40 須惠器 器台片



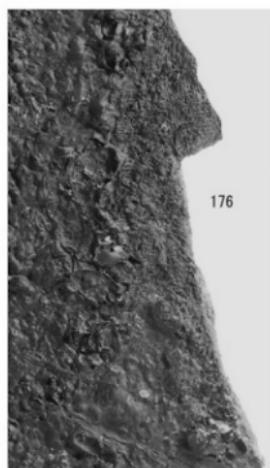
41 須惠器 蓋杯・壺片



42 挂甲小札



43 金銅張劍菱形杏葉



44 金銅張劍菱形杏葉裏 布目



45 大刀



46 大刀 開部



47 金銅張鞍金具 覆輪



48 鐵鎌



49 三足釜 脚部



50 柱狀片刃石斧

高松市 鶴市町 相作
牛塚古墳採集遺物報告書

高松市 鶴市町 相作牛塚古墳 採集遺物報告

所 在 地 高松市鶴市町相作 82, 83

採 集 者 高松市教育委員会

採集年月日 昭和 48 年 12 月 28 日

目次

1. はじめに
2. 位置と周辺に於ける
「伝説の古塚」
3. 遺物の採集状況
4. 出土遺物
5. 結語

〔付〕

図版 3

写真 48



写真 1 〔亡失直前の牛塚古墳〕

1 はじめに

この報告は、昭和 48 年 12 月 28 日、鶴市町相作地区で運輸会社が 1,5000 平方M余りの農地を買収し、車庫並に社員住宅建設のための整地作業中、相作 83 番地の畠と、82 番地の田の土を削りとった土塊や細地から採集した遺物の概要である。

整地作業進行中に、古墳であることが確認され、この時既に、僅かに残されていた石室や封土も亡失し、整地作業も完了した、という状況で、散在していた遺物の採集だけに終った。

遺物は石器、土器、鉄器、合計 317 片を数えるが、細かい破片や断片で器形も判然としないものが多いので、止むなく実測図はこれを省き、写真をもって、これに代えることにした。



写真 2 〔亡失後の牛塚跡〕

2 位置と周辺に於ける「伝説の古墳」



第32図 古墳分布図【Aは牛塚古墳】 (5-1/25,000)

図版1参照

番号	塚名	所 在 地	規 模 (m)			備 考
			長さ	巾	高さ	
1○	明見塚	鶴市町明見	30	7	2	長い丘に、川砂利が多い。古墳の確証はない。
2	秋山塚	鶴市町明見中所 518-1	2	2	0.7	土坦に五輪の一部有り。古墳の確証はない。
3	中所地神社前塚	鶴市町明見中所 323	4	3	1.5	小丘に雜草が茂り。状況不明。
4	相作馬塚（相作馬塚古墳）	鶴市町相作 29-1	14	9	1.5	荒廃しているが古墳である。内部施設一部露出。
5○	相作馬塚北西塚	鶴市町相作 31-1	1.2	1	0.5	痕跡。弥生式土器片を見る。
6○	青木馬塚	飯田町青木	1	1	1.3	粘土塊3,4有り。古墳の確証はない。
7	青木1号塚（青木1号墳）	飯田町青木 1146	4	4	2.5	丘上に埴輪円筒片を見る。
8	青木2号塚	飯田町青木 1181	4	4	1.8	丘上に石塊。弥生式土器片を見る。
9	青木3号塚	飯田町青木 1194	9	6	2	丘上に石塊。弥生式土器片を見る。
10○	青木4号塚	飯田町、青木1号西 50m	10	10	1.5	丘上に小祠あり。須恵器片を見る。
11○	青木5号塚	飯田町、青木4号南 30m	2.4	2	1	丘上に石塊多く、弥生式土器片極めて多い。
12○	青木6号塚	飯田町、青木5号西 25m	6	5	1	丘上は雜草に覆われ。状況不明。
13○	青木7号塚	飯田町、青木5号南 40m	2.5	2.5	1.3	丘上は石塊におおわれている。
14○	青木8号塚	飯田町、青木5号南東 40m	2	1.5	1.3	丘上に安山岩の破片多し。
15	小坂馬塚	飯田町小坂 324	11	6	1.5	小丘は土坦、四周に石塊が混じっている。
16○	小坂馬塚北西1号塚	飯田町小坂、小坂馬塚北西 70m	3	2.5	1.2	小丘は石塊に覆われ。弥生式土器片を見る。
17○	小坂馬塚北西2号塚	飯田町小坂、小坂馬塚北西 1号塚西 20m	3	3	1.3	小丘は石塊に覆われ。弥生式土器片を見る。
18	半田塚	飯田町半田 462-1	5	5	2	小丘は土石混在、川石多し。古墳の確証はない。
19○	飯田神社東塚	飯田町537	8	3.7	1.4	小丘は雜草が茂る。弥生式土器片を見る。
20	王墓（王墓古墳）	鶴市町大墓 1993	2.5	20	2.5	丘の四周竹林、雜草茂る。丘上に小祠有り。

表9 相作牛塚古墳周辺の古塚名 注 ○印は今回の報告に新しく追加したもの。

高松市鶴市町相作 82 及び 83 の地籍に属する牛塚古墳は、香東川と本津川下流に挟まれた海拔 8 m 前後の平野部にある。そして香東川東堤に沿うて石清尾山塊が南北に伸び、本津川西方には、勝賀山から篠山に至る鬼無地区の山々が南北に連なっていて、何れも山頂から山麓にかけて多数の古墳の存在が知られている。

然し、両山塊にはさまれた平野部では、古墳と確認されたものは皆無であったと言えよう。この度、平野部の中央にある「相作牛塚」が埴輪で装飾され、副葬品も豊富な立派な古墳であったことが実証せられたことは「伝説の古塚」が、本物の古墳であったわけである。

平野部の古墳は、殆んどが著しく破壊、縮小せられて、痕跡に過ぎないものが多いので、現状から古墳であるか否かを判別することは極めて困難である。こうしたものを「伝説の古塚」と呼ぶと、相作牛塚古墳の周辺には、分布図に示す通り、大小 20 基を数える多数の「伝説の古塚」が散在しているのである。

写真 3 (明見塚)



写真 4 (秋山塚)



写真5 (中所地神社前塚)



写真6 (相作馬塚)



写真7 (相作馬塚北西塚)



写真8 (青木馬塚)



写真9 (青木1号塚)



写真 10 (青木 2 号塚)



写真 11 (青木 3 号塚)



写真 12 (青木 4 号塚)



写真 13 (青木 5 号塚)



写真 14 (青木 6 号塚)



写真 15 (青木 7 号塚)



写真 16 (青木 8 号塚)



写真 17 (小坂馬塚)



写真 18
(小坂馬塚北西 1 号塚)



写真 19
(小坂馬塚北西 2 号塚)



写真 20 (半田塚)



写真 21 (飯田神社東塚)



写真 22 (王墓)



3 遺物の採集状況

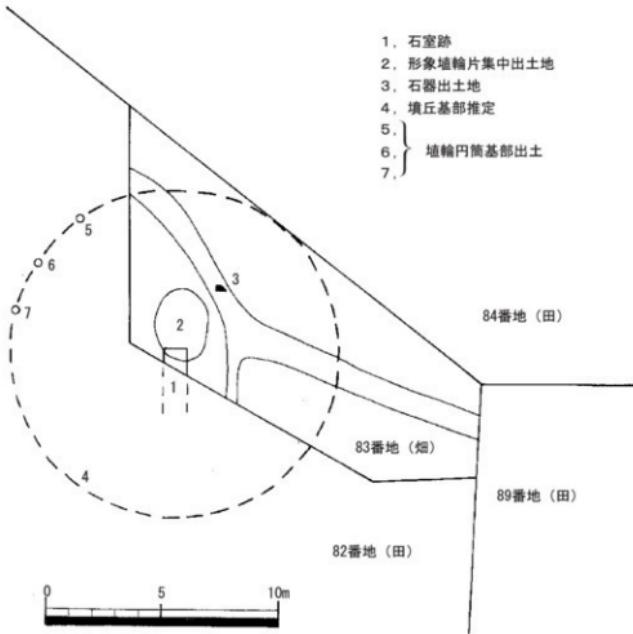
「相作牛塚」と呼ばれた地域は、相作83番地、地目は畠、面積は105平方mで、新造成地域内の北東隅に位置し、高さは1m余、凹凸の多い雜木や雜草の茂った丘であった。

昭和48年12月28日午後1時、現場へ行った時は、この丘の土を削りとて、西方の低地へ運ぶ作業が進行中で、丘の三分の二は既に取り崩しを終り、三分の一程度を残していた。この残されていた小丘の土塊をすくい上げた時、僅かに残されていた竪穴式石室の一部と、石室床面の遺物が一挙に削り取られてしまった。

出土遺物の中、鐵器類は、この土塊の運搬先で拾い集められたものであり、種々の形象埴輪片の大半と、石斧は残存石室の上方と見られる封土表面近くで採集したものである。残存石室から半径約7mの周上に埴輪円筒の基部が3ヶ所認められたこと、石室は南北に長く、東西に短い長方形であったことが認められたので、この古墳の大きさは残存石室を中心に直径14m以上の円墳であったと推定され、墳域の約半分は83番地に、あとの半分は82番地にまたがっていたものと考えられる。

採集した遺物は、すべてこの墳域から出土したものであるが、大型機械でどんどん整地作業を進めている間に、見つけた遺物を採集することは容易でなかつたし、又遺物を発見し、採集しても、残りの部分は、既に削りとられた土塊と共に何處へ運ばれたかわからなかつた。

従って採集した遺物は、埋蔵されていた遺物の僅かの部分に止まつたばかりでなく、すべてが断片的なものとなってしまったことは極めて遺憾である。



第33図 牛塚墳域図 (S=1/200)

牛塚位置図

(S=約1/2,000)

第34 図



4 出土遺物

出土遺物は、鉄器、石器、土器に分類され、その点数は鉄器 40 片、石器 1 箇、土器 276 片で、總点数は 317 点を数えるが、何れも断片や細片で完形品は僅かに石器 1 箇、挂甲小札 5 枚に過ぎない。

[鉄器の部] 写真 23

○長剣 1

3 折し、尖端部欠損

長さ 37cm

○短剣片 1

束に近い 1 部分

長さ 6.5cm

○管状片 2

何れも長さ 7.5cm

○小鉄片 1

長さ 3.7cm



○馬具断片 8 写真 24

右下の 2 片鉄製

他の 6 片鉄地金銅製

右上方の 1 巻大きいものは

長さ 13.7cm

巾 先端部は 0.35cm

下方のひろがった部分は 12.5cm



かけよろいこ さね
○桂 甲 小札25枚 写真25

(イ) 上、二段 12枚

大きい小札で完形2 一部欠損10

大きさ

長さ 6.9cm

巾 2.4cm

厚さ 0.15cm

(ロ) 上から3段目 7枚

少し小さい小札で完形3、1部欠損4

大きさ 長さ5.0cm 巾 2.1cm 厚さ 0.15cm

(ハ) 最下段 6枚

何れも1部欠損

短冊形の平板ではなく、少し曲りがついている。



註、挂甲はけいこう、或はかけよろいといい、小さい短冊形の鉄板をつづり合わせてつくったよろいで、4世紀ごろ大陸から我が國に伝来したと言われている。

[石器の部]

○石器 1箇 写真26

磨製石斧で、石質は片磨岩斧
頭部の側面に柄を取りつけるた
めの凹みがついている。

大きさは

長さ 14.0cm

巾 4.6cm

厚さ 2.2cm



[土器の部]

○埴輪断片 1 写真 27

人物埴輪の断片で、腕の部分であろうか。柔らか味のある弥生式土器よりも硬質の須恵器に近い。

色は灰黒色、肩から手首までで、長さは 14.5cm ある。



○埴輪断片 1 写真 28

人物埴輪の断片で、足の部分であろうか。色は黄褐色で弥生式のやわらか味のある焼きである。

股から下の部分で長さは 4.5 cm ある。



○埴輪断片 1 写真 29

形象埴輪の断片と見られるがこの程度の断片からは、全体がどんな形のもの、どの部分であるかはわからない。この断片の長さは 12.0cm ある。



○埴輪断片 3 写真 30

下の写真のように、家形埴輪の四方の壁面の中、三方がわかれわかれに、三つになっている。他の方は失われている。

これを組み合わせて立てると、写真 31 の形になり、その大きさは、縦 28.0cm 横 35.5cm 高さは 18.5cm から上の方を欠いでいる。横の壁面が 2 面あるが何れも窓がついていた跡が見られる。

(写真 32 と 33 の写真参照)

写真 31



写真 32



写真 33



○埴輪片 1 写真 34

器材埴輪の一部分で、円筒の
両側に下の写真のようなものを
向かい合って取りつけてある。



写真 35



○埴輪断片 1 写真 36

高坏埴輪の坏の部分で、外側は写真 36、内側は下の写真 37 のようである。硬質の須恵器で弥生式の土器とはちがっている。外側の紋様も細かく波紋をえがき凸帯も3筋見られる。口径は約36.0cmあって、かなり大きいものである。



写真 37



○埴輪断片 4 片 写真 38

この4片は、前の高坏埴輪の台の部分であるが、途中の部分が全く見当たらないので全体の形がわからない。断片から考えても立派な高坏埴輪であったことが考えられる。



写真 39



○埴輪円筒片 3 片 写真 40



左端の大きさ 長さ17.8cm 中
14.6cm 厚さ0.8cm円筒埴輪片で一
番大きい。左端は、円筒の上端部
の破片で、凸帯の下に穿孔がある
が、その形が四本の指を並べて上
下の形を整えた跡が見られる。中
央は、円筒の約3分の1位で、直
径をたしかめることは一寸もつか
しい。右端は穿孔が左端と同様長
方形に近いが四本の指を並べて形
を整えてあり、そこにはっきり指
紋を残している。

古墳時代人の指紋をはっきりの
こしている埴輪円筒片がここにある。

○埴輪破片 3 片 写真 41



埴輪円筒破片3片は、同じ仲間
ではない。中央の破片には、凸帯
が2段あり、長さ17.5cm 中13.5
cm これが埴輪断片の二番に大き
いものである。

左端の穿孔はかなり大きい。

○埴輪破片 6 片 写真 42

埴輪円筒破片、6 片は同じ仲間ではない、硬さ、色合い皆異なっている。



○埴輪破片 6 片 写真 43

円筒埴輪であるが同じ仲間が見当たらない。



○土器破片 10 片 写真 44

円筒埴輪破片の外に形象埴輪の断片や異なった器物の破片も見えるが、外に仲間が見当たらない。



○土器細片 17 片 写真 45

円筒埴輪の破片が主であるが、焼きの硬さや、粘土帶のあるものは、その造り方、線紋のつけ方等まちまちで、幾つかの円筒埴輪の破片がまじり合っている。



○土器細片 31 片 写真 46

弥生式土器の細片で、厚さ、色、紋様等各種入りまじって、数多くの器形の細片であることが知られる。



○須恵器 14 片 写真 47

須恵器は前にも記した、高坏埴輪片の一群と、この 14 片が總べてこれ以外は弥生式土器片であつた。この 14 片は同一器物の破片ではなく、幾種かの器物の細片で色も黒色から灰色等一つ一つがまちまちである。



○土器片 15 片 写真 48

埴輪円筒破片で、粘土帯の造り方だけを見ても、幾つかの円筒埴輪がまじり合っていることが明らかである。



5 結語

大規模な土地開発や宅地造成の度にいくつかの埋蔵文化財が闇から間に消滅していくことが多いことは、まことに悲しいことと言わなければならない。

この度は鶴市町相作牛塚古墳が亡失直前に駆けつけて、遺物の一部でも採集できたことは不幸中の幸いと言えるかも知れないが、何とかして整地作業を行う前に発掘調査を行っていたら、と悔やまれてならない。

遺物採集の際の残存石室から半径約7mの線上に2mおきくらいに3ヶ所埴輪円筒の基部が認められたことから、この古墳の墳域は直径14m以上の円墳と見られ、墳域の約半分は83番地にまたがっていたものと推定される。従って墳域の半分は遠い昔に削平されて水田となっていたのであろう。

形象埴輪片の大部分は、残存石室上部の封土表面近くから採集されたことから、これ等は墳頂附近に集中配置されていたものと見られる。石室は竪穴式のもので南北に長く、東西に短い長方形石室内の高さは不明である。

出土遺物に多数の埴輪があり、それが円筒埴輪だけではなくて、人物、家形、高坏、器材と多様に豆っていること、鉄器には鉄地金銅製の馬具片や、挂甲小札があることは、この古墳が当時の大豪族を葬ったものであることを物語るものであろう。又、さぬきでは挂甲小札の出土を見た古墳は一例もなかったので、この古墳が最初である。

この古墳の築造年代については、出土遺物等から5世紀後半と推定されるであろう。

終わりに相作牛塚古墳の周辺には多数の「伝説の古塚」が散在しているので、これ等については今後、細心の注意を払いたいものである。

終

報告書抄録

ふりがな	あいさこうしづかこふん						
書名	相作牛塚古墳						
副書名							
巻次							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財報告						
シリーズ番号	第125集						
編著者名	中村 茂央, 小竹 一郎						
編集機関	高松市教育委員会						
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2660						
発行年月日	西暦 2010年3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
相作牛塚古墳	香川県高松市鶴市町	37201	34°19'31"	134°00'17"	S48,12,28	105m ²	造成工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
相作牛塚古墳	古墳	古墳時代 後期前半	埴丘 竪穴式石室	須恵器 円筒・形象埴輪 大刀 挂甲小札 鉄地金銅張馬具			
要約	高松平野北西部に立地していた古墳であり、造成工事に伴い削平された。直径14m以上の円墳と考えられ、外部には円筒埴輪の他、埴丘上面では人物・家形といった形象埴輪を確認している。内部に埋葬施設を確認しており、竪穴式石室と推定される。副葬品には鉄地金銅張の馬具の他、県内では2例のみ確認されている挂甲小札が出土している。古墳の築造時期は出土資料から古墳時代後期前半に位置づけられる。						

高松市文化財報告第125集

相作牛塚古墳

編集	高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号	
発行	高松市教育委員会
発行	平成22年3月31日
印刷	石田印刷有限会社